

自己意識の社会心理学的研究

特に 対人認知および対人関係の
規定因としての自己意識について

梶田 叡一

目次

第1部	問題の背景	1.
第1章	序論	2.
第1節	心理学における自我および 自己の研究	2.
第2節	主体としての自我と客体と としての自己	6.
第3節	自己意識の諸相	20.
1.	自己概念	20.
2.	自己評価	28.
3.	自己概念の構造的 特性および自己洞察に 関する次元	33.
第2章	自己意識に関する諸理論	39.
第1節	概観	39.
第2節	Jamesの理論—— 自己意識の古典的 分析	43.
第3節	Rogersの理論—— 現象学派の	

	理論における自己意識の位置	48
第4節	Sarbinの理論——役割理論に おける自己意識の位置	54
第5節	Horneyの理論——現代精神分 析学理論における自己意識の 位置	61
第3章	自己意識と対人関係——従来 の実証的諸研究の概観	66
第1節	自己意識と対人関係との関 連性	66
1	自己意識と対人関係の良好 さとの関連性	66
2	自己の受容と他者の受容	72
3	好悪感情と自他の概念	75
第2節	自己意識が社会的行動にお よぼす影響	79
1	対人認知および対人感情に およぼす影響	79
2	被説得性におよぼす影響	84

第3節	他者との相互作用による自	
	己意識の形成と変様	88
1	両親の養育態度と自己意識	88
2	他者からの承認・拒否と自	
	己意識の変様	93
	引用文献	99
第2部	実証的研究	109
	序	110
第1章	2者関係に及ぼす自己評価の	
	効果——他者からの働きかけに	
	対する反応を規定する要因として	112
	問題	113
	方法	114
	結果	115
	考察	116
	要約	118

文献	118
第2章 自己評価と自己のパフォーマンス	
ンスの評価——他者に感じる魅力	
力を規定する要因として	120
実験Ⅰ	121
目的	121
実験仮説	121
方法	122
結果と考察	123
実験Ⅱ	123
目的	123
実験仮説	123
方法	123
結果と考察	124
実験Ⅲ	124
目的	124
実験仮説	125
方法	125
結果と考察	125

総合的考察	126
要約	127
引用文献	128
Abstract	128
第3章 他者についての概念化と対人	
感情	130
問題	130
方法	131
結果と考察	131
要約	134
引用文献	134
第4章 Self-Esteem, Affect, and Interpersonal	
Cognition	136
Method	137
Results and Discussion	138
Summary	146
References	147

第5章 結論：対人認知および対人関

係の規定因としての自己意識 148.

1. 「自己意識、特に自己評価のレベルは、対人関係における経験と認知する場合の関係枠として機能する。」 148.

2. 「自己意識、特に自己評価のレベルは、他者に対する態度を規定する。」 150.

3. 「理想的自己像は、他者に対する好悪感情との関連で、他者に関するイメージの内容を規定する。」 151.

4. 「自己評価のレベルは、自他に関わる諸概念が調和的であるか非調和的であるかを規定する。」 152.

5. 「自己評価の低い人は、対人関係において不適応となる可能性が大きい。」 156.

第 1 部

問 題 の 背 景

第1章 序論

第1節 心理学における自我および自己の研究

人は一、の意識体験として自分自身に気づき、自分自身を「こういうものである」と考え、自分自身を「すぐれたもの」「つまらぬもの」等と評価し、また、より深く自分自身を知りたいという望みを持つ。自分自身に向けられるこのような意識は、古くから宗教、哲学等において問題とされてきた。ソクラテスがデルフオイのアポロンの神殿に掲げられた「汝自らを知られ」を己れの標語としていたことは有名である。しかしながら、近世の自然科学の進歩発展に刺激され、哲学から分離して独自の歩みを始めた科学的心理学においては、長い間この問題が無視されてきた。このことは心理学の方法论の発展、展開の

歴史から見れば十分理由のあることであった。この間の事情を簡単に述べれば、自己意識の研究が無視された理由として、

1. 科学的心理学を發展させるにあたって、それまでの哲学的思弁的な心理学が仮定した実体的な「心」の本質というような問題を拒否しようとした為、自我とか自己という概念も実体的な「心」といって概念と同一であったりまぎらわしかったりする場合があるとして、これを拒否しようとしたこと

2. 科学的心理学の祖として考えられるWundt等の構成心理学においては、当時の自然科学が要素的なものを求め、その結合によって現象を説明するのを見て、心理学にその体系の構成法を取り入れ、具体的な意識体験の底に要素的なものを求めるという方向を取った為、抽象的な意識の要素を求めようとする努力の中で、意識体験としての具体的事実を見失ってしまったこと

3. 構成心理学に対する批判として出現し

現代心理学に大きな影響を与えている Watson 等の行動主義心理学においては、「意識」そのものが、操作および測定が困難であるとしてその対象から除外され、人の内面の世界をブラックボックスとし、外部からの刺激とそれに対する反応から理論を構成してゆこうという考え方をと、たこと等を挙げることができると。

しかし、このような事情があつたとはいえ、人が自己についての意識を持っていることは誰も疑うことのない事実であり、また、そのような自己意識の内容とその個人の行動とが何らかの関連性を持っていることを多くの人々が認めている以上、人の意識体験および行動を研究する心理学において、いつまでも自己意識に関する問題が無視され続けるといふことは不可能であつた。また、社会的態度の研究が進められる中で、意識を数量的に取り扱う方法が發展してきたことも、自己意識の科学的研究の爲の有力な基盤となつた。このよ

うにして Allport, G. W. (1943)も述べているように、第2次世界大戦が開始された頃から、心理学における中心的な問題の一つとして自我や自己に関する問題が再び取上げられるようになり、現在ますます重視される傾向にあるのである。

第2節 主体としての自我と客体としての自己

自己意識の問題は、認識や行動の主体としての自我の問題と同時に論じられることが多かった。このことは、これらの問題を論じる場合に用いられる Ego Self 自我 自己という言葉が、認識や行動の主体としての自己をあらわす場合にも、そのような自己によって認識されたものとしての自己をあらわす場合にも用いることができる、ということと無関係ではないだろう。例えば Allport, G.W. (1943) は、それまでの心理学的文献の中で用いられてきた Ego の意味を整理し、Ego の概念規定として次の八つが重要であると述べている。

1. 認識者 (knower) としての Ego : この主格としての Ego という言葉は、Brentano 流に言うなら、ある主体が世界に対する関係づけを「志向している」ことを意味

するものである。この意味の Ego は多くの心理学者から無視あるいは看過されてきたが、Beth (1933)、Oesterreich (1910) 等の現象学者 Moore (1933) 等の性格学者からは重視されてきたものである。

2. 認識対象 (object of knowledge) としての Ego : この意味の Ego は自己に関する体験の性質についての問題の中で取り上げられたものである。内省によって Ego がどこに定位されるかを明らかにしようとある多くの研究がおこなわれたが、Ego が定位する所として挙げられた部位は多様であり、研究ごとに異なっている。この意味における Ego に関して一般の同意を得ていることは、幼児は個人として自らを意識しておらず、環境と自己とが未分化な状態にあること、我々の意識内容としての Ego はその次元が多様であり、時には体の一部さえも含まれなかったり、時には自分の子供や家、祖先等までが含

まれたりすること、の2点である。

3. 根源的な利己心 (primitive selfishness) としての Ego : Stirner (1912) や Le Dantec (1916) が人間の本质として、また社会成立の基盤として強調している利己心や偽善の傾向の中に見られるものであって、これによって投影、合理化、防御機制等が生じるのである。

4. 優越動因 (dominance-drive) としての Ego : 優越感、支配欲、ついはみ順位 (pecking order) 等に関する研究が多いが、この意味における Ego はパーソナリティの一部であり、地位や承認を要求するものである。不安、不安定感、防御反応、反抗といった消極的状態は、この Ego が低下すると防御の衝動、地位回復の衝動が生じることを示すものである。

5. 心的プロセスの受動的体制 (a passive organization of mental process) としての Ego : Freud の理論における Ego であって、独自

の力を持たない受動的なものであり、イド、スーパーエゴ、外的環境、それぞれからの相互に敵対する諸力を調和させ方向づけるものである。独自の力を持たない調整役としての Ego という考え方は、後に新フロイド主義者から批判を受けた。

6. 目的追求者 (a 'fighter for ends') としての Ego : この意味における Ego は主として新フロイド主義者によって主張されている。これは目的論的な力を主張する McDougall (1933) や James (1890) の立場と異なり、Koffka (1935) の「Ego を向上させる力」が常に活動している、という仮定に近いものである。この立場はまた、生物学的諸欲求は自我の満足という中心的欲求を満足する為の手段として機能していると考えた行動心理学者達の見方の中にもうかがうことができる。

7. 行動システム (a behavioral system) としての Ego : ゲシュタルト心理学者 特には

Koffka (1935) や Lewin (1936) の説く Ego である。Koffka によれば、この Ego は同質的な現象野の中で唯一つ分離結晶しているシステムであり、時と共にその境界は変化するが、ある条件の下では、知覚、行動、情緒等を規定する働きを持つものである。また Lewin は、要求水準の変化等に関与する多くの結果は、Ego が関与した場合に存在する特殊な緊張状態を考慮しなくては説明ができなると述べている。

8. 文化の主體的体制 (the subjective organization of culture) としての Ego : この意味における Ego の概念は、心理学、精神分析学、社会人類学の交流の結果として生じたものである。Sherif (1936) によれば、Ego は発生的には心理的なものであるが、子供が両親、教師、社会との交渉を通じて名前、地位、行動規則、社会的意味における罪悪、判断する際の社会的基準、といったもの Ego に入れられたり教えられる

した結果、社会的価値を反映したものとなり、その人の社会的役割そのものとなる。Cantril (1941) もまた、ある人の Ego かなわちその人が自分自身を見る見方というものは常に、彼を取りまく文化によって規定されていると述べている。

Allport は、これら八つの Ego が果して同一のものであるかどうかは分らないが、いくつかの概念規定を同時に支持するような実験事実を検討することによって、これら八つの概念を整理あることができるだろうと述べている。

しかし、我々は概念規定の多様性にこそが、自我や自己意識に関する議論をこれまで混乱させてきた最大の原因であると考えられる。例えば、認識者としての Ego と、そういう Ego による認識対象あるいは認識内容としての Ego とを、同時に同じ Ego という語で呼ぶことができるであろうか。我々にはまず、概念の整理から始めなければならない。

Allport の挙げた八つの意味における Ego を大別すれば

1 「認識者」としての Ego (Allport の 1)

2 「認識対象あるいは認識内容」としての Ego (Allport の 2, 7, 8)

3 自らを他に対して押し出そうとする「自己主張傾向」としての Ego (Allport の 3 と 4)

4 全体的行動や適応プロセスを説明する為の「仮説構成体あるいは説明原理」としての Ego (Allport の 5 と 6)

という四つの基本的考え方となる。第4は精神分析学系に特有な理論構成の中で用いられる特殊な用語法における「Ego」なのでここでは論じないことにする。また第3は Ego 自我の用語法としては一般的なものであるが、人の全体的な機能および傾向のうちある一部の特別な傾向を指して用いられるものである。これだけを単独でとりあげて Ego あるいは自我を論ずることはできない。

我々が Ego の概念規定をなす場合重要なのは
 第一と第二の考え方 すなわち「認識者」と
 しての Ego および「認識対象あるいは認識
 内容」としての Ego という考え方である。
 両者を区別する為に、北村(1962)の用語法
 に従い、以後の記述においては、原則的に
 主体としての Ego を表わす場合には「自我」
 という語を、客体としての Ego を表わす場合
 には「自己」という語を用いることにする。

17世紀に Descartes が、初めて心(mind)を
 認識あるもの すなわち認識の主体と、認識
 されるもの、すなわち認識の対象とに区別し
 て論じたと言われる(Diggory 1966による)。
 James(1891)もまた、「我」の問題を主体
 としての自我の問題と認識内容としての自己
 の問題とに区別して別個に扱うという態度を
 示している。彼は、全自我はいわば二重であ
 って、なかば被知者でありなかば知者であり、
 なかば客体でありなかば主体である と述べ、
 前者を客我(Me) 後者を主我(I)と呼ん

でいる。そして彼の言う主我、可なりち主体としての自我に関しては、多くの哲学者が経過的意識状態（意識の流れ）の背後に不変の実体もしくは行為者を設定するに至ったことを述べ、「靈魂」、「先驗的自我」、「精神」等は皆、この行為者、可なりち考える主体に与えられた名称であるが、心理学上の目的からはそれらの概念の必要はなく、「意識の流れ」の存在自体を仮定する以外、何の仮説も必要でない」と述べている。

Jamesはこのように、主体としての自我の問題を心理学的に問題とあることを避けたのであるが、彼の後の心理学者の中には、主体としての自我に独自の機能を認めようとする人も多い。これは精神分析学の影響であろう。

例えば Bertocci (1945) は、普通 Ego と言う時には、行動の主体としての Ego と客体としての Ego とが正しく区別されず不用意に用いられていることを指摘し、主体としての自我を表わす場合には「Self」を、客体としての自

己を表わす場合には「Ego」を用いている。そして彼は、この主体としての「Self」は、いわゆる知者であり、感覚、記憶、想像、知覚、欲求、感情、思考等の心的活動が統一化された複雑な過程である、と述べている。

また Symonds (1951) は、自我 (Ego) と自己 (Self) について、自我は内的欲求を満足する為に外界に適応する能動的な働き の主体であり、知覚し、思考し、行為するものであり、現実界を点検し、内外の諸要求を調整し、抑圧や禁止を行ない、記憶を形成する働きをもつものである。一方、自己は、その人の主観的体験として、その人によって観察され保持される身体や精神、また身体的精神的なプロセスである、と述べている。

我々も主体としての自我に種々の機能を認めることには反対しない。注意が必要なのは、そのような機能を持つているものとしての自我と、認識内容としての自己との関係をどう考えるかという点である。例えば Smith (1950)

は、主体としての自我と、現象野の一部であ
って自分自身の諸部分諸特性についての知覚
からなる自己とは、相互依存関係の強いもの
であるが同一のものではないと述べ、自我は
進行あるプロセスの力動的体制であって、個
人の生活史および行動から推定されるのに対
し、自己は自我プロセスの結果生じ、逆に自
我プロセスに影響を与える現象的実体であっ
て、主に現象学的な報告から推定される、と
述べている (P.519 傍点筆者)。このような
論述は、あたかも自我プロセスの外部に自己
なるものが存在するかのような印象を与える。
それでは、「主体」としての自我とは一体
何を意味しているのであろうか。自分自身の
全体を主体と客体とに分けて考えるという考
え方は、自分自身を対象化し意識する際、ど
うしても対象化できない部分、可なりち自分
自身をその時意識している当の意識自体が存
在あることを認め、対象化できる部分を客体
と、どうしても対象化できない部分を主体と

名づけたことによるものである。このような二分法は、認識による自己存在の確認の問題に、関連して始まったことから、認識だけでなく、意識から行動、適応にまで至る人の全機能を問題とする心理学にそのまゝ移入された場合、混乱を生じたのは当然のことであろう。

主体としての自我と客体としての自己とを並列的に扱うことはできない。認識に限って考えても、主体としての意識が「意識ある」という機能をも意味しているとするならば、客体としての意識内容は、そのような主体の機能の一断面である。認識だけでなく、適応というような全体的な機能を考えてみれば、この主体としての自我の問題は、よりほゞ、ヨリある。適応あるという機能を果しているのは、人の一部の機能ではなない。意識をも含む全ての機能が統合され、適応という全体的機能として現れているのである。それ故、自己に関する意識は当然、主体のこのような全体的機

能 (= 自我プロセス) の一部として含まれるものである。このように考えるなら、主体としての自我と客体としての自己との関係は並列的なものではなく、いわば「含む-含まれる」といった関係であることは明らかである。主体としての自我は、心理学的に考える場合、行動主義心理学者 (例えば Hull, 1943) や Rogers (1951) の使う「有機体 (organism)」の概念と同じものと考えることが出来る。このような意味における主体としての自我の機能について、その全体像を探求する科学が心理学なのである。その意味で、部分的機能群をもつて主体としての自己の機能と称することは不十分である。我々の研究は、自己に関する意識について研究することによって、全体的な自我の機能のある側面を研究しようとするもの、とすることが出来るであろう。^註

一部の心理学者は、Freud流の仮定的な精神装置の一部としての Ego という考え方と、哲学における認識の主体としての Ego という考

註) この意味において、例えば依田&山下 (1964) の論述にも同意できない。彼等は「記・自己概念」に関する文献概観の結語として「研究は大部分『客体としての自己』の問題に集中しているが、主体としての自我についての研究を欠くことはできないであろう。」と述べている。

え方とを無批判的に接合してしまっているように見える^註。このことが、主体としての自我に関する概念上の混乱をもたらしている一つの大きな原因であると考えられる。

註) 例えは、我妻(1964)は、「被知者としての自己」と「行為者としての自己」とを分け、「行為者としての自己」の中に、James や Mead の「I」と Freud の「Ego」とを一括している。

第3節 自己意識の諸相

個人が自己に関して持っている意識という意味での自己意識の研究は、自己意識のどのような面を問題にするかによって、二つに大別される。一つは自己意識の内容および構造を問題とするものであり、他の一つは自己意識の何らかの次元に注目し、その程度を問題とするものである。

1 自己概念

自己意識の内容および構造が問題とされる場合、それは自己概念 (Self-Concept) と呼ばれることが多い。自己概念とは、Rogers (1951) も述べるように、自己に関する諸認識が構造をもった集合体として意識に現れたものであり、その要素として、自己の特性や能力、他者あるいは環境との関係における自己についての認識、経験や対象との関連において認識

された種々の価値。正あるいは負の誘因性をもつものとして認識されている目標や理想を含むものである。

この自己概念に関しては、まずその構造が問題とされてきた。Miller (1963) は自己概念 (彼は identity という語を用いる) を構成する構造的領域として、核心部分 (core)、副次的部分 (subidentities)、ペルソナ (persona) を区別する。核心部分とは、最も初期に形成され、パーソナリティの中心部に近く位置し、それ故最も変化しにくい部分である。Dahl (1952) の言う「私的な自己 (primary self)」、James (1890) の言う「最も真実で、最も強力で、最も深い自己」もこれと同義であると考えられる。副次的部分とは、後に学習されたものであって核心部分に拘束されるものであり、それぞれ situation において異ったあらわれ方を示すものである。これは自己に割当てられた社会的役割群の知覚から主として生ずるものであって (例えば、父、友、法律家等とし

ての自己) Dai(1952)の言う「二次的な自己 (secondary selves)」もこれと同義であると考えられる。ヘルマンとは Jung (1953)によって用いられた言葉であって、自己概念の周縁的部分であり、実際の自己概念と社会的状況からの圧力との妥協によって生じたものである。Goffman (1959)の言う「顕示的自己 (presented self)」、北村 (1962)の言う「仮面」もこれと同義であると考えられる。

一方、このような構造論とは別に、自己概念を構成している諸属性を、具体的に実態に即してとらえようとする試みがおこなわれている。この目的の為に Bugenthal & Zelen (1950)の始めた「Who-Are-You」テスト(「あなたは誰ですか」という問いに対して3通りの回答を書かせる)、Kuhn & MacPartland (1954)の始めた「20答法」(「私は誰でしょう」という問いに応じて20通りの回答を書かせる)、等の方法が用いられてきた。このような方法による場合、研究者があらかじめ枠組を与えてしま

うということがない為、自己概念の実態をとらえやすいという利点がある。得られた自由回答から一般性を持った結論を引き出す為には、その自由回答を何らかの枠組によって分類しなくてはならない。ここに、回答をどのようなカテゴリーに分類するのが妥当であるか、という問題が生じる。Gordon (1968) は、これまでこの種の諸研究において用いられてきた種々のカテゴリーを整理し、次のような分析方法を提案している。自己の属性として回答された文あるいは文節は、1) 内容(内容に関するカテゴリーのどれに分類されるか)、2) 時制(現在形であるか過去形あるいは未来形であるか等)、3) 評価(回答内容に含まれる自己評価的調子)、4) 重要性の順位(回答者がその属性を重要だとする順位)に関して分類される。そして Gordon は内容に関するカテゴリーとして、A 帰属特性(ascribed characteristics : 1 性別、2 年令、3 名前、4 人種、5 宗教)、B 役割と所属(

roles and memberships : 6 血縁的役割 7 職業的
 役割 8 学生であることに關する役割 9 政
 治的志向 10 社会的地位 11 居住地域および
 市民権 12 所属集団) C 抽象的身分 (
 abstract identifications : 13 実存的個別的なもの
 14 抽象的カテゴリーへの帰属 15 イデオロギ
 ーおよび信念) D 興味および活動 (interests
 and activities : 16 判断や好み 17 知的関心 18 芸
 術的活動 19 その他の活動) E 物質的
 なもの (material references : 20 所有物 21 身体に
 關するイメージ) F 自己についての主
 要な認識 (major senses of self : 22 能力に關する
 認識 23 自己決定に關する認識 24 統合性に
 關する認識 25 道德的価値に關する認識)
 G 個人的性格 (personal characteristics : 26 対人関係
 の型 27 心理的型 パーソナリティ) H
 その他 (external meanings : 28 他の人達からの判断
 29 瘦れている 空腹である等シチュエーショ
 ナルなもの 30 分類不可能なもの) を挙
 げておける。「あなたは誰ですか」という問に

15通りの回答を求められたロスアニゼルス
の大学生265名の結果を見ると、最も多いのは
対人的行動の型に関するもの(72%)、次
いで性別(70%)、年齢(69%)、心理的型あ
るいはパーソナリティ(66%)、学生に関
する役割(59%)、自己決定に関する認識(55
%)、身体的イメージ(55%)となってい
る。

自己概念の内容および構造に関する第3の
研究方向は、研究者があらかじめ選択した属
性に関して多くの人に評定させ、その結果を
因る分析して、自己概念を構成する属性群の
一般的な因る構造を明らかにしようとするも
のである。この方法では、選択された属性群
が被験者として選ばれた集団にどのように分
布しているか、についての構造を単純な形で
あらわすことはできるが、それ以上は不可能
であるので、当然のことながら見出された
諸因るは研究ごとに異なる。それ故ここでは
比較的包括的体系的に属性群を収集選択して

因子分析をおこなった長島等(1966, 1967)の研究をあげるにとどめたい。彼等は Osgood et al. (1957) によって始められた Semantic Differential 法の考え方に基づき、自己記述語対からなる Self Differential を作製することによって、自己概念を測定する為の共通的な方法を確立しようとする。その為、まず大学生群、高校生群、中学生群 についてそれぞれ 1) 自己記述語収集の為の連想実験(「小さいころの私」「友達から見た私」「失敗したときの私」等について連想させ、形容詞、形容動詞の形で書かせる)、2) 反意語対作製の為の反意語調査(収集された自己記述語について反意語を収集する)をおこない、頻度の少ないもの、判断の困難なものを除いた45の自己記述語対(各対は互いに反意語となる2個の自己記述語からなる)を各群ごとに作製した。これを各群50名に對して、五つの自己概念(1 現在の私、2 父親から見た私、3 母親から見た私、4 理想の私、5 友達から見た私)に

ついて7段階に評定させた。この結果を因子分析し、バリマックス法による回転をした結果、中学生については、誠実性(第1因子)、向性(第2因子)、情動安定性(第3因子)、強靱性(第4因子)、過敏性(第5因子)、高校生については、強靱性(第1因子)、向性(第2因子)、情動安定性(第3因子)、誠実性(第4因子)、大学生については、向性(第1因子)、情緒安定性(第2因子)、強靱性(第3因子)、誠実性(第4因子)、過敏性(第5因子)、理知性(第6因子)の各因子を明らかにしている。

因子分析的手法を用いた研究方向としては、この他に、自己概念の一般的な因子構造でなく、何らかの基準で選ばれた特定の個人について、その個人の自己概念の因子構造を明らかにしようとするものもある。

2 自己評価

自己意識の何らかの次元に注目し、その程度を問題とする場合、最も多く検討されてきた次元は、自己に対する評価的態度に関わるものである。この自己に対する評価的態度をあらわす為には「自己評価 (self-esteem)」という言葉が多く用いられてきたが、この他に「自己態度 (self-attitude)」、「自己満足度 (self-satisfaction)」、「自己好意度 (self-favorability)」、「自己愛 (self-love)」、「自信 (self-confidence)」等の言葉が用いられてきた。勿論これらの概念は内容的に全く同一であるというわけではなく、強調点はそれぞれ若干異なる。

自己に対する最も包括的・一般的な評価的態度を指す場合に用いられるのが「自己評価」および「自己態度」という言葉である。「自己満足度」、「自信」等は、自己に対する評価的態度のある側面を強調する為には用いられることが多い。では、自己に対する全体的な評

価値的態度は、どのような側面から成り立っていると考えられるであろうか。自己に対する評価が何を基準としてなされたものであるかという観点から見る時、自己に対する全体的な価値的態度に自己優越感的側面と自己満足感的側面とを区別することが出来る。自己優越感的側面は主として「他者」が基準となるものであって、自己の能力等に関する自信、他者に対する優越感等を含むものである。これに対して自己満足感的側面は主として自己の「要求水準」が基準となるものであって、自己満足や失望、感情的な自己肯定や自己否定、等を含むものである。この両者は相互関連性が強く、通常の場合高い相関を示すであろう。「自己評価」「自己態度」等を測定するものとして構成されている種々の尺度の項目内容を検討すると、この二つの側面の他に独立心（他者からの援助、同情を排し、自立してことをおこなおうとする傾向）、積極性（自己を強く押し出し、何事にも積極的に取

り組んでいこうとする傾向)、心理的適応(神経症的な症状が見られないこと)の各側面を見る為の項目群が含まれていることが多い。しかしこれらは、自己優越感および自己満足感と同列に考えるべきものではなく、自己に対する評価的態度のレベルに応じて生じる附随的な側面として考えるべきであろう。以上述べたように、自己に対する評価的態度は、主要な側面として自己優越感的側面と自己満足感的側面を持つと考えられるのであるが、両者は緊密に関連し、全体としての自己評価を形作っているものと考えられるので、本研究においては、この両側面を個別的に考察するということはしない。

Symonds (1951) は自己に対する評価的態度を「自己愛」という言葉であらわし、現象的には類似しているが本質的に異なる2種類の自己愛があると述べている。彼の言う第1種の自己愛は純粹な自己評価であって、両親から受容されることによって発達し、自分自身

に安心し信頼感をもつ、というものである。これは感情的な安定性に根ざしており、自分自身についての現実的評価に基づいた自己評価であって、このような自己愛は他者に対する愛の基礎ともなるものである。第2種の自己愛と彼が呼ぶものは、両親から受容されないことによつて発達するものであつて、他の人々や外的な経験の中になほなく、自分自身の中に満足を見出すことを余儀なくされた状態である。これは感情的な不安定性に根ざしており、不安の色合のついた、現実的というより空想的願望的な自己評価である。このような自己愛は、他の人と社会的関係を発展させていくことを妨げるものである。このように、自己評価を起源の異なる2種に分けて考えることは、理論構成上有益であり、また実証的研究に對して一つの展望を持たせるものであるが、この2種を操作的に區別することはかなり困難である。それ故、実証的研究においては自己防衛性の高い被験者（自己防衛

性が高く自己評価も高い場合、第2種の自己愛である可能性が強い)を除外し、実際上ここで言う第1種の自己愛のレベルのみが自己評価として扱われるようにすることが多い(第2部第3章 第4章で報告する研究もそうである)。

3 自己概念の構造的特性および自己洞察に 関する次元

自己に対する評価的次元の他に、自己意識
に関する理論的あるいは実証的研究において
取り上げられてきた次元には、自己概念の構
造的特性に関するものと、自己洞察に関する
ものとがある。

自己概念の構造的特性に関する次元として
は、自己概念の一貫性 (consistency)、分化度 (
differentiation) 等が問題とされてきた。Rogers (1951)
や他の理論家が述べるように、自己概念は、
分化はしているが統合的な構造をもったもの
であり、人は自己概念の一貫性を保とうとす
る傾向をもち、その為に、その構造に調和し
ないような認識を除外あるいは変形してゆく
傾向がある。ある人の自己概念の現状を考
える場合、自己概念に構造的統合性をもたらし
うとあるこのような傾向が、どの程度達成さ
れているかということ、無視することはで

きない。この意味において、自己概念の一貫性、分化度等は、自己概念を記述する際の重要な次元である。しかしながら、これらの次元について測定することは、実際には容易ではない。その上、一貫性、分化度等の言葉は、それを用いる研究者によって、その意味する内容自体がかなり異なっているのである。例えば、自己概念の一貫性の測度として、自己概念と理想的自己の概念との差が小さいことを考える研究者とすれば、私的自己和社会的自己（他の人々から見られていると思う自己の像）との差が小さいこと、私的自己あるいは社会的自己と自己に関する他者の実際の認知との差が小さいこと、等を考える研究者といるのである（cf. Wylie, 1961, p.111）。また Cartwright (1957) は、3人の人から自己がどのように見られていると思うか3通りのQ分類をさせ、その間の一致度が高ければ自己概念の一貫性が高いと考えている。これらは同じ一貫性といっても内容的にかなり異なるものである。

また、これらの一貫性と分化度等その他の構造的な特性との違いもはっきりしない。例えば、分化していると言う場合は、各要素が相対的に独立していることを意味するのに対し、一貫性がないと言う場合は、各要素が何らかの不調和な関係にあることを意味するはずである。しかしながら、分化度と一貫性という言葉は、現在の所、このような区別なしで用いられているように見える。また、一貫性と分化度といった構造的な特性を考へる場合、何が構造的要素であるか^註をはっきりさせた上で、その要素間の関係として論じなくてはならないのであるが、研究の数が少ないこととあつて、またその中で問題は整理されていない。

自己洞察に関する次元としては、自己意識度 (self-awareness)、自己受容度 (self-acceptance)、自己洞察 (insight) 等が問題とされてきた。自己意識度と自己受容度とは共に、自己に関する経験、自己の特性等さどの程度まで意識に受け入れているか、言いかえれば、自己に関

註) 自己概念を構成する構造的要素を最も大きく考えた場合、理想的自己の概念と現実の自己概念との2要素という考え方ができ、現実の自己概念をさらに私的自己と社会的自己の2要素に分けるとも可能である。もう一段階要素を小さくすれば、社会的自己の中に特定の人々から見られていようと思ふ複数の社会的自己に分けることができる。最も小さく要素を考えた場合には、各要素は自己概念を構成する一つの属性あるいは認識と考えることができる。

してどの程度まで正確で完全な認識をもっているか、ということの意味している。(但しこのような意味で「自己受容」という言葉を用いるのは、Snygg, Combs, Rogers, 等のいわゆる現象学派の理論においてであって、実証的研究の多くにおいては「自己受容」という言葉は、自己に対する評価的態度をあらわすものとして用いられている)。操作的には、心理療法のプロセスで古い自己記述語が減少し、自己についてそれまで記述されなかった側面に関する記述が増加することをもって、自己意識度が向上したとされたり (Vargas, 1954)、自己について被験者自身が行った Q 分類と観察者のおこなった Q 分類との相関をもって自己意識度とされたり (Kolman & Rarloff, 1957) してきた。これに対し自己洞察とは、自己の姿をどの程度正確に、また深く認識しているか、ということの意味している。操作的には、自己に関する被験者の報告と他者から被験者を見た場合の報告との差が小さいことをもっ

て自己洞察の測度とするものが最も多い(例えば Calvin & Holtzman, 1953 : Brown Sain, 1952)。自己意識度あるいは自己受容度と自己洞察とは概念上その強調点が異なるわけであるが、両者とも自己の姿などの程度正確に認識しているかということとを意味する点では共通である。このような自己認識の正確さの次元に関して自己認識の不正確さは防衛性および不適応に伴うものであることが、多くの理論家によって述べられてきた。Rogers 等の現象学派の理論家達はこれに加えて、自分自身の見ている自己の姿が、周囲の人達から見られている自己の姿と食い違っていることに、ほんのわずかでも気づいた時にはじめて不安が生じるのであって、自己認識の不正確さだけでは心理的な不適応をもたらさないことを強調する。そのような食い違いは、外部の観察者の目から見た場合の不適応行動に彼を導くであろうが、彼自身がそのような食い違いに気づかぬがぎり、彼は心理的には不適応を感じないの

である。

ここで述べた自己概念の構造的特性および自己洞察に関する次元は、自己意識の研究の中で重要な意義をもつことは明らかであるが、いすれも操作的な扱いの点で困難な問題が多い。類似の概念を整理統合し、概念内容とより明晰にしてゆく努力と同時に、研究者間で一致した操作的定義を確立できるよう努力しなくてはならないであろう。

第2章 自己意識に関する諸理論

第1節 概観

自己意識に関する諸理論に、現在三つの流れを認めることができる。第1は Snygg & Combs (1949)、Rogers (1951, 1959^{ab}) 等のいわゆる現象学派と呼ばれる流れであり、第2は Newcomb (1950)、Sarbin (1954)、Shibutani (1961) 等の役割理論、相互活動理論を中心とした社会心理学派とも呼びうる流れであり、第3は Horney (1942)、Erikson (1959) 等の Freud の影響を強く受けながらも、心理学、社会学、文化人類学等の成果を取り入れて理論構成をしている現代精神分析学派とも呼びうる流れである。

第1の現象学派の理論家達は、人の現象的世界が、その人の行動を規定していることを強調する。そして人の行動を理解し予判する

為には、その人の外部から接近するより、その人の内部から、可なりその人の現象的世界から接近する方が有効であると考える。人が全体的な現象的世界の中で、自分自身に関して意識している部分(=現象的自己)は、他の部分に比較して恒常性が強く、その人の認識や行動がそれとの関係において規定されるような関係点である、という意味において重視される。これらの理論は、Köhler(1929) Koffka(1935)等のゲシュタルト心理学、その流れを継ぐLewin(1936)の場理論等の影響を受けて形成されたものと考えることができ

る。

第2の社会心理学派においては、最も私的なものと考えられる自己意識が、実は社会的存在であることが強調され、周囲の人達との相互活動の中で自己意識がどのように形成、変様されていくか、という点を中心に考察が進められる。特に幼児における自己意識の形成過程と役割取得の発達過程との関連性が問

題とされることが多い。これらの理論は Cooley (1908, 1922)、Mead (1922, 1934) の理論を継承発展させたものと考えることができる。

第3の現代精神分析学派においては、Freud 理論の影響を強く受けているという点では共通であるが、その Freud 理論の修正発展の方向が人によって異なる為、それぞれの理論はかなり異なった様相を呈する。しかし、パーソナリティの発達において、幼児期に受けた親からの愛情とか拒否の影響力を重視する点、外界との相互活動において、適応とか防衛機制といった側面を重視する点、等においては共通している。

Hall & Lindzey (1957) も指摘するように、これらの諸理論は、自己意識の問題に限る限り、James (1890, 1891) の影響を直接的、間接的に受けていると考えられる。以下の各節において、まず最初に James の理論を概観し、続いて現象学派の理論として Rogers の理論を、社会心理学派の理論として Sarbin の理論を、現

代精神分析学派の理論として Horney の理論を
それぞれ概観したい。

第2節 Jamesの理論——自己意識の古典的 分析

James (1891) は、我と呼ばれる全体的な自我の中に、主体としての主我 (I) と、客体としての、可なりち自らによって意識されるものとしての客我 (Me) とを区別する。彼は、その客我について、「考へ得る最も広義において、人の客我とは、人が己れの有と称へ得る全てのものの総和である」と述べ、その構成要素として、物質的客我、社会的客我、精神的客我の三つを挙げている。物質的客我とは、身体、衣服、近親の家族、家、財産等、自らの所有物と感ぜられるもののうち物質的なもののことである。社会的客我とは、仲間からこのように見られてゐるたうと考へる自己の姿であつて、厳密に言えば、一人の人は、彼を認め彼の印象を心に蔵する個人の数と同数の社会的客我を持つてゐると考へられる。しかし、彼についての印象を持つて

いる人はいくつかの種類に分けられるから、
実際には、自分についてどんな考えを持って
いるだろうかと彼が気にかけている人々は
いくつかのグループに分かれている。それ故
彼はそのグループの数だけの異なる社会的
客我と持っていることになる。精神的客我と
は、いわば意識に現れた主我の姿であって、
自らの諸意識状態、心的諸能力、諸傾向等の
集合した全体として考えられるものである。
この精神的客我の中にも、情緒や欲望のよう
に比較的内的な、自らの中心に近いものとし
て感じられるものと、感覚能力のように比較
的外的な、自らの所有物のように感じられる
ものがある。

彼は、上に述べたような客我の構成要素が
喚起する感情および情緒の問題として、自己
評価を論じている。自己評価には、自己に對
する満足と自己に對する不満足との2種が存
在し、自慢、自負、虚栄、自尊、尊大、虚飾
は、自己に對する満足の同義語であり、遠慮

卑下、当惑、自疑、羞恥、屈辱、悔恨、不名誉の感、絶望感、は自己に対する不満足の同意語である。これは連合主義心理学者達の説くように第2次的現象ではなく、我々の天性に備わった、直接的根本的な性質であると考えられる。普通、そのような自己感情、自己評価の起因となるものは、その人の実際の成功とか失敗、世間的な地位の高下である。

次いで、彼は、密我の構成要素がなすしめる行為として自己追求と自己保存とあげ、それらについて論じている。この自己追求、自己保存ということとは、我々の根本的な本能的衝動の多くを含むものであって、我々は身体的自己追求の衝動、社会的自己追求の衝動、精神的自己追求の衝動、を持っていると考えられる。有用な反射運動、消化運動、防御運動等は身体的自己保存の行為であり、自己追求と、現状を維持することと区別して将来の準備を要するという意味にとれば、恐怖および怒りを、狩猟、獲得、家庭建設、器具製作の

本能と共に身体的自己追求の衝動の中に入れて
 ることができろ。これらほ、単に身体的客我
 の発達のみならず、最も広義における物質的
 客我の発達を追求するものである。これに對
 して社会的自己追求とは、直接的には、恋
 愛、友情、他人の注目と賞賛を得たいという
 欲望、競争心と嫉妬、榮譽とか影響力とか權
 力とかを愛あること、によつておこなわれろ
 ものであり、間接的には、物質的自己追求の
 衝動の中、社会的目的を達するのに役立つも
 のによつておこなわれろものである。精神的
 自己追求とは、知的なものであつても、道德
 的なものであつても、あるいは狭義の靈的な
 ものであつても、心的発達に至る全ての衝動
 を含むものであつて、知的、道德的、宗教的
 な向上心、良心が鋭いこと、等が含まれる。

彼は、これまで述べたことを基礎にして
 諸客我間の關係に論を進める。我々ほ、自分
 の經驗的諸客我の中の一つを選擇し、他の全
 てを捨ててしまわなくてはならぬ場合があ

る。我々には同時に百万長者で聖人で詩人であるということとは不可能である。それ故、我々には自らの姿として一つの客我を選取するのである。選取がおこなわれるとこの選取された客我の運命のみが実在となりその客我に関与する失敗は真の失敗として羞恥を引き起し、その客我に関与する勝利は真の勝利として喜びをもたらし得る。この失敗とか勝利による自己感情は次の式のように表わしうる。

$$\text{自己感情} = \frac{\text{成功}}{\text{願望}}$$

このように、願望を引き下げることにしても、努力してより大きな成功をかちえることによっても、この自己感情のレベルを上げることができるのである。このことから、自己感情というものは、自らの支配下にある、と云うことができるであろう。

以上述べてきたように、Jamesの理論は経験的機能的なものであり、現在においてもその有効性を失ってははいない。

第3節 Rogers の理論——現象学派の理論に あける自己意識の位置

Rogers が自らの理論を体系的に述べている論文はいくつかあるが (Rogers, 1947, 1951, 1959a, 1959b) ここでは、最も簡潔に全体的パーソナリティ理論を述べている1951年の論文を中心として彼の考え方を見てゆきたい。

彼はまず、全ての人は、自分が中心であるところの絶え間なく変化している「経験の世界 (world of experience)」に存在していると述べる。この経験の世界と呼ばれるものは、また私的世界、現象的場^註、経験的場とも呼ばれるものであって、有機体によって経験される全てのもの——それらの経験が意識されていようとまいいと——を含んでいる。有機体は何らかの絶対的な実在に対して反応するのでなく、このような「場」に対して、その「場」の経験され知覚されるままの姿に対して一つの体制化された全体 (an organized whole) と

註) Snygg と Combs (1949) の場合、現象野とは「個人が実在または現実と思ひこんでいる、自己と環境の状態」であって、Rogers が意識化されていない経験を包含めようとするのは異なる。

して反応する。この知覚された「場」こそが個人にとって実在なのである。次いで彼は有機体は一つの基本的な傾向と渴望 (striving) をなわち体験している有機体を現実化し、維持し、強化する要素を持っている、と述べる。数多くの要素や動因は、この一つの基本的な要求の部分的な要求として考えるのが妥当である。行動とは、基本的には、知覚された「場」において、有機体が経験しているところの要求を満足させようとする、目標指向的な企てである。このように、行動は個人が知覚している「場」に対するその個人の反応であるから、行動の理解にとってもっとも有利な観点は、その個人自身の内的な準拠枠 (internal frame of reference) から得られるものである。

彼は続いて、「自己」の問題に論を進める。彼の言う自己は有機体という言葉と同義ではなく、存在していることおよび機能していることの意識と意味するものである。この

ような自己は、全体的な知覚の場の一部が分化したものである。環境との相互作用の結果として、とくに他者との評価的な相互作用の結果として、自己の構造、すなわち「私は」あるいは「私に(と)」の特質や関係についての知覚の体制化された、流動的なしかし首尾一貫している概念形式が、これらの諸概念に結びつけられている諸価値とともに、形成される。種々の経験が個人の生活において生起すると、それらの経験は、a) 「自己」と何らかの関係をもつものへと象徴化され知覚され、体制化されるか、b) 「自己」構造との関係が全然知覚されないうで無視されるか、c) その経験が「自己」構造と矛盾する為、象徴化が拒否されるか、あるいは歪曲された象徴化がなされるか、のいずれかである。また、有機体によって採択される行動の仕方は、ほとんどの場合、自己概念と首尾一貫しているようなものである。しかしある場合には、行動が、象徴化されていなくても有機体的な

経験や要求から起こることがあると考えられる。そのような行動は、「自己」の構造と矛盾するであろうから、その行動は自らのものとして認められない。

このような基本的考え方の上に、不適応に関与する彼の理論が展開される。すなわち、心理的不適応は、有機体が重要な感覚的内臓的経験を意識することと拒否し、したがってそのような経験が象徴化され、自己構造のゲニュタルトへと体制化されないときに存在する。このような状況が存在するとき、基本的あるいは潜在的な心理的緊張が存在する。心理的適応は、自己概念が象徴のレベルにおいて有機体の感覚的内臓的経験をことごとく自己概念と首尾一貫した関係に同化しているか、あるいは同化するのであるときに存在するのである。「自己」体制あるいは「自己」構造と矛盾対立するいかなる経験も、何らかの脅威として知覚されるであろうし、このような知覚が多ければ多いほど、「自己」構造

は、防衛反応によって、それ自体を維持するよう強固に体制化される。しかし「自己」構造に対して基本的に何らの脅威も含んでいない条件の下では、「自己」構造と矛盾対立する経験も知覚され検討されるようになり、また「自己」構造は、そのような経験を同化し包含するように修正されるであろう。個人が自分自身の感官的・内臓的経験の一切を知覚し、それを首尾一貫した統合的な一つの体系へと受容するならば、その個人は、他の人々をもより一層理解し、独立した個人として受容することができるようになるであろう。また個人は、自分自身の有機体的経験をまあまあ多く知覚し「自己」構造へと受容するにつれて、あたかも自分自身の経験に基礎づけられているかのように使用していた種々の価値を検討するようになり、外部から投影された価値体系でない自分自身の価値の感覚に気づくようになるのである。

以上述べてきたように、Rogersの理論は自

己概念を中心として、人の認識と行動とを全体的に説明しようとするものである。彼の理論は、精神分析的心理療法に對する批判として彼が提唱した「クライエント中心療法」の理論化として出たのであるが、現在では心理療法だけでなく心理学全体に對して大きな影響力を持つ理論となっている。

第4節 Sarbinの理論——役割理論における 自己意識の位置

役割理論においては、あらゆる社会は位置の構造としてとらえられ、それぞれの位置をしめる個人は、ある特殊化された行為、すなわち役割を果す、と考えられる。それぞれの役割は位置に結びついたものであって、ある時点にその位置を占める、ある特定の個人に結びついたものではない。役割理論で扱われる個人間の相互的行動は個人を単位とせず、より細かい単位である役割を単位として分析される。役割間の相互作用の分析に次いで、「自己 (self)」と役割との相互作用の分析が重要な課題となる。今日の役割理論は、人間の行動を「自己」と役割との相互作用として見ようとしているのである。彼は、役割実現 (role enactment) のさまざまな様態は、少なくとも次の三つの変数の函数であると述べている。すなわち、1) 役割実現の妥当性、2)

1) 役割実現における熟練 3) 現在の「自己」の構造 (この認知構造が役割知覚と役割実現に選択的・方向的な影響を与える) の三つである。

では、彼の述べる「自己」とは、どのような内容をもった概念であろうか。彼は「自己」という言葉を「物や身体や他人との接触による個人の体験から生じてくるものとしての独自性をもった現象的経験 (その全てが言語によって伝達されるわけではない)」という意味において、また「エゴ」という言葉を「心理学者およびその他の人々によって作られた概念であって、個人の一層中心的な、また永続的な心理的特性を指し示すもの」として用いる、と述べている。「自己」もエゴも直接に観察できるものではないが、推論あることは双方とも可能である。人は、そうした「自己」という現象的経験を第1人称の文章 (私は……である) によって伝達することができるのであり、観察者が同じように第3人称

の文章で、他人のエゴについて語ることで
きるのである。「自己」について、あるいは
エゴについて言及する場合、重要な役割を演
ずる言葉は、行為を表わすものではなく「性
質」を表わすものである。彼はこの性質を、
特性(感情をも含む)、態度、習慣の三つの
概念によって定式化しようとしている。これ
ら三つは全て行動の観察から引き出された推
論であって、特性は態度より一般的な性質で
あり、また態度は習慣より一般的である。

彼はまた、認識構造としての「自己」は、
生活体と刺激対象(事象)との相互作用から
生じると述べている。新生児においては、
安定状況は化学的均衡およびホメオスタシスに
よって保持される。この均衡保持の過程にお
いて、神経組織のうちには痕跡が作られる。可
なりち最初の認知があらわれる。こうした痕
跡が生活体の中で統合されると安定状況は前
より複雑になり、ホメオスタシスは、また自
動的な形ではあるが、より複雑化した生活体

に奉仕する。知覚の恒常性があらわれれば、と高度な均衡作用が生じる。対象の恒常性とは適応機制の一種であり、この現象がなるとしたら、異った条件の下で同じ対象に出会った際、知覚の妥当性をいろいろ問題にしなくてはならなくなる。同じような発達が表象についても見られるのであって、全く異なった新しい知覚に直面した時でも、表象は比較的恒常である。また概念についてもこのような恒常性が見られる。このような均衡原理は全認知構造の領域にまでおよび、「自己」についての概念とその下位構造もまた、恒常性原理に従っている。

「自己」は、最初は言語化されないが、後には、身ぶりや命名、自己描写、形容詞、第1人称の文章、等によって言語化されるような諸性質の結合体として考えることができる。「自己」は、2系列の事象、すなわち、成熟と個人・社会関係との相互作用の結果として生じる。成熟ということとは、文化の違い

によってそれほど差はないように考えられる。しかし、個人・社会系列は、文化によって大きな差の見られるものである。例えば、母親、保母、父、兄弟、等 子供と関係のあるさまざまな役割が、その文化に特徴的な役割規定に従って、その範囲内で個人差を發揮しながら、實現されている。

「自己」の発達に関して、彼は、恒常性原理、成熟、個人・社会関係、とならんで、固着という概念を強調する。意図的な訓練によるものであるにせよ無意図的なものであるにせよ、「自己」の構造が、あるレベルのまゝそれ以上の発展を妨げられることがある。とある段階で、超過学習、外傷等によって原始的な「自己」の段階に固着するとそれは社会的「自己」の発達は抑圧され、非常に複雑な成人の役割を實現、遂行することができなくなる。

以上に概略を述べてきた「自己」と役割との間の相互作用に関連して、彼は次のような

問題を提出している。1) 「自己」は経験の産物であるとするならば、ある特殊な役割あるいは役割群を長期にわたって遂行することは、「自己」にどのような変化をもたらすであろうか。2) 「自己」が異なることによつて、役割遂行がどのように異なるであろうか。3) 人が「自己」にそぐわないような役割遂行をするよう他人から期待(役割期待)されているような位置にある場合(自己・役割葛藤の場合)、「自己」と役割とは、どのようなことが生じるであろうか。この問題に関連して、もし人が同時に二つの位置を占め、しかも、それぞれの役割期待が一致しないような場合(役割・役割葛藤の場合)、どんなことが生じるであろうか。4) 「自己」と役割との相互作用の中から両者の効果を独立に取り出しうるであろうか。言いかえれば、役割と「自己」とは独立なものとして経験的に示されうるであろうか。これらは今後の研究で明らかにされるべき課題である。

以上述べてきたように、Sarbinの理論は「自己」と役割との二つの概念を中心にして、并人関係から社会全体の機能の仕方に至るまで、統一的に理解しようとする野心的な試みであると言いうことができる。

第5節 Horneyの理論——現代精神分析学理論における自己意識の位置

Horneyは自らの理論がFreud派心理学の枠組の中にあることを認める。しかし彼女はFreudの考え方をそのまま継承しようとするのではなく、その機械観的、生物学主義的な偏向を是正することによって、精神分析学を発展させようとするのである。

彼女の理論における主要な概念は「基本的不安 (basic anxiety)」である。これは、幼児が潜在的に敵意を含んだ社会において自己が孤立しており、何の援助も受けられないと感じていることである。この基本的不安は、周囲の人からの直接的間接的な支配、無関心と冷淡、一貫性のない行動、個人的要求の無視、非難的態度、信頼できる温かさの欠除、過保護、差別、等によってもたらされるものである (Horney, 1945)。一般的に言って、両親との関係をあやうくするようになるものは何であ

っても、この基本的不安を生じさせるのである。

このような基本的不安をもった幼児は、自らの孤立感と無力感とを解決してゆく為には、種々の方法を用いる。彼は、自分を拒否したり虐待した人に対して敵意を持ち、しかえしをしようとしたり、あるいは、自分が失ったと思う愛情を取り返す為には、より従順になったりあるだろう。また、自分の劣等感を補償する為には、自分について非現実的な理想化されたイメージを作りあげることが出来ないし、自分を愛してもらおうとして、おべっかをつかしたり、おどかしたり、同情バにうったえたりあるかもしれない。もし愛情を得ることができなければ、自分の無力感を補償する為には、他者を支配する力を得ようとしたり、競争的になって他者に打ち勝とうとしたり、あるいは、敵意を自分自身に向け、より一層自分をつまらぬものと考えたりあるだろう。

これらの方法のうち、どれかがくり返され

ているうちに、固定化してパーソナリティの一部となり、一つの欲求という形を取るようになる。これらの欲求は、非理性的な問題解決法である、という意味において「神経症的欲求 (neurotic need)」と名づけられている。彼女は、このような神経症的欲求として次の10を挙げている (Horney, 1942)。

1 愛情と是認を求めめる神経症的欲求。

2 自分の人生を共に生きてくれるようなパートナーを求めめる神経症的欲求。

3 自分の生活を狭い限界内に制限しようとする神経症的欲求。

4 権力を求めめる神経症的欲求。

5 他人を利用しようとする神経症的欲求。

6 威信を求めめる神経症的欲求。

7 賞賛を求めめる神経症的欲求。

8 何かを達成しようとする神経症的欲求。

9 自己充足と独立を求めめる神経症的欲求。

10 完全無欠さを求めめる神経症的欲求。

これら10種の欲求は、後には (1945)、次の三

つに大きく分類された。

1. 人々の方へ向かう (moving toward people) 欲求群 (例えば、愛情の欲求)。

2. 人々から離れる (moving away from people) 欲求群 (例えば、独立の欲求)。

3. 人々に対立する (moving against people) 欲求群 (例えば、権力の欲求)。

これらの欲求群は、それぞれ自分自身と他者とに対する基本的な方向づけを表わすものである。そして内的葛藤とは、これら基本的な方向づけの間に起こる葛藤なのである。正常な人なら葛藤を生じている複数の方角づけを統合することによって葛藤を解決することができるのであるが、神経症的な人は、内的不安が大きいため統合ができない。そのパーソナリティの一部として固着している一つの欲求群だけを満たすような行動をとり、他は抑圧してしまうのである。

以上述べてきたように、彼女の理論は外界のイメージと自己のイメージとを基盤にして

組立てられたものと考えることができる。この点において古典的精神分析学理論の、自我 超自我 といふ概念を用いた精神装置論とはかなり異なる、点も、である。Freudの影響を強く受けながらも、パーソナリティ理論において自己のイメージに重要な役割を与えるという傾向は、Adler (1924)、Erikson (1959) 等にも見られる点である。

第 3 章 自己意識と対人関係

—— 従来の実証的諸研究の概観

第 1 節 自己意識と対人関係との関連性

ここでは、主として、自己意識の諸側面と対人関係に関わる諸側面との間に見出された静的な関係について概観ある。

1 自己意識と対人関係の良好さとの関連性

< 自己評価 >

自己意識のあり方と、対人関係がうまくいくかどうかということとの関連性についての研究の中で、まず取り上げるべきなのは、自己評価と対人関係における適応との関連性についての諸研究であろう。心理的不適応の状態にある人は自己評価が低い、という多くの研究結果を見る時、多くの研究者が自己評

価の低い人は対人関係においても不適応であろうと予測したのは当然である。

Coopersmith (1959) は、自己評価の測定法の研究の一環として、102名の小学5、6年生を被験者とし、ソシオメトリックテストにおける被選択数と自己評価得点との関係を見ている。この結果、被選択数と自己評価得点との相関は、 $.37$ ($P < .01$)、アチーフメントテストの点数を恒常にした場合の偏相関は、 $.29$ ($P < .01$)であった。Turner & Vanderlippe (1958) は、自己の理想像と現実像とのズレの小さい人はソシオメトリックテストにおいて被選択数が大であることを明らかにしている。また夫婦関係についても Eastman (1958) は、結婚生活に幸福感を味わっている夫婦の場合、自己の理想像と現実像とのズレが小さく、不満足な結婚生活を送っている夫婦の場合、このズレが大きいことを明らかにしている。

しかし、これらの結果から、自己評価が高ければ対人関係は良好であり、低ければ対人

関係に問題が生じる、と早急に結論を出してはならない。Fey (1955) の研究によれば、自己受容(この場合、内容的には自己評価と同一である)は高くても他人受容の低い人は、仲間から嫌われるのである。また、McIntyre (1952) の研究においては、ソシオメトリックな人気と自己評価との関係は、はっきりしなかった。これらの結果は、自己評価の測定法が研究ごとに異なっているという問題もあるが、対人関係の良好さと自己評価との関係が直線的でなく曲線的である。すなわち、自己評価のレベルが高すぎても低すぎても対人関係において問題を生じやすく、適度なレベルの人が対人関係においてうまくゆくと示しているのではないだろうか。自己評価の低い人は対人関係においても適応しにくくであろうか。^註他人からの評価と比較して自己評価が高すぎる人も周囲から嫌われるだろうということは、当然考えられることである。

註) このような関係の生じるプロセスについては、第2部において考察する。

〈自己概念の安定性〉

自己意識の一つのとらえ方として、Brownfain (1952) は自己概念の安定性という側面を重視することとを主張している。そして彼は「安定性」の測度として、「最も好意的な見方をした場合の自己概念(肯定的自己概念)」と「最も非好意的な見方をした場合の自己概念(否定的自己概念)」との差を提唱し、この安定性が自己評価および不適応と関連性が深いことを仮説として述べている。この研究の中で彼は種々の適応指標と自己概念の安定性との関係を検討し、対人関係に關しては、自己概念の安定した人は仲間から種々の側面について好意的な評価を受けていることを明らかにしている。

〈自己概念と周囲の人達が彼について持っている概念との一致〉

社会的相互作用は、互いの行動についての互いの期待が正確である場合にはスムーズに

進行するが、不正確である場合には、相互作用が進行しなくなるか、進行しても、それに伴って種々の問題を生じることになる。周囲の人達が皆、彼をこのような人であると考えているのに、彼自身は、自分はそのような人間ではないと考え、自分のそうした考えに基づいて行動するとすれば、相互の期待の食い違いから、必然的に彼は孤立してしまおうであろう。Goslin (1962) はこのような問題意識をもって、中学生男女20人~30人のグループ、19グループについて研究した結果、グループの他のメンバー達から知覚されているのとは異なつた風に自分自身を知覚している子供、あるいは、他のメンバー達から自分がどのように知覚されているか予測できない子供は、グループ内で孤立していることを明らかにしている。しかし、この結果は、実際には孤立の原因を明らかにしたのか、結果を明らかにしたのかは、きりしない。周囲の人達と社会的相互作用をおこなえばおこなうほど、自

己に対する周囲の人達の見方と自分自身の見
方とが接近することが考えられるから、周囲
の人達に受け入れられている故に自己に対する
見方が周囲の人達と類似し、孤立している故
に自己に対する見方が周囲の人達と異なっ
てくる、ということも考えられるからである。

2. 自己の受容と他者の受容

Fromm (1947) は、自分自身への愛は他者への愛と矛盾あるものであるという。Karl Luther, Kant, Stirner, から Freud にまで至る考え方を批判し、他者のみならず我々自身が我々の感情や態度の対象であり、他者に対する態度と自らに対する態度とは矛盾あるどころか、根本的に連結したものである、と主張している。そして、他者を愛しうる者のみが自己を愛することができ、また逆に、自己を愛する者のみが他者を愛することができると強調している。また先にも述べたように、Symonds (1951) も第1種の自己愛について、これが他者への愛の基礎となるものであると主張している。この問題については自己受容と他者受容との関連性の問題として、実証的な研究がなされてきた。ここで用いる「自己受容」という言葉は Combs & Snygg (1959) や Rogers (1947) が用いる場合のように、「自己に関する一切の

体験を現象野に受け入れられ意識されること」を意味するものではなく、自己に対する是認満足と意味するものである。この意味における自己受容度は、自己評価と根本的な差異はないと考えられる。また「他者の受容」は、他者に対する是認的肯定的態度と意味するものである。

Sheerer (1949) と Stock (1949) は、心理療法をうけている患者について、自己受容と他者受容との関連性を研究している。Sheerer は、自己をどの程度受け入れ信頼しているかを測定する為の「自己態度尺度」と、他者をどの程度受け入れ信頼しているかを測定する為の「他者態度尺度」を作製し、心理治療が進行するにつれて自己と他者に対する態度がどのように変化してゆくかを研究した。自己受容は治療プロセスの初期から終期までかなり規則的に増大した。また他者受容も、自己受容ほど規則的ではなかったが、治療の進行とともに増大した。自己受容と他者受容とは實際上相

関してあり、特に治療プロセスの後半において密接な相関が見られた。Stockは心理治療プロセスにおける患者の発言内容を10のカテゴリーに分類し、また各発言内容から自己および他者に対する感情の強さを5段階に判定した。その結果、自分自身に対し否定的感情を持つている患者は、一般的に他者に対して否定的感情を持っており、自分自身に対する感情が肯定的方向に変化すると、他者に対する感情も肯定的方向に変化することが確認された。

SheererやStockの研究は心理療法のプロセスという特殊な場面におけるものであり、サンプル数も、どちらの場合も10ケースと少なかった。しかしPhillips(1951)、Berger(1952)その他の研究者達は、多数の正常人について自己態度尺度と他者態度尺度とを施行し、自己受容と他者受容との間に高い相関係数を得ている。両者の間に相関関係がないことを報告している研究(例えばZelen, 1954)も若干あ

るが、圧倒的に多くの研究において相関関係が見出されていることと考えると、初めに述べた Fromm や Symonds の考え方は支持されていると言ふことができよう。

3. 好悪感情と自他の概念

ある特定の他者に好意を持っているかどうか、あるいは彼が友人であるかどうか、ということによつて、その他者についての概念がどのように異なってくるのか、その概念は自己概念とどのような関係があるのか、ということが問題とされてきた。この問題に関して多くの研究がなされたが、それらの結果をまとめると、1) 好意を持っている他者を、自己に似たものとする傾向 (いわゆる assumed similarity 傾向) 2) 好意を持っている他者を、自己の理想像に近いものとする傾向 (いわゆる理想化傾向) が存在すると考えられる。

第1の傾向については、Davitz(1955)、Fiedler et al. (1952) 等が検討している。それらの研究結果は、友人(友人として選ばれた人、あるいはソシオメトリックテストで選択された人)同志の自己概念相互の類似は、ランダムに組合わされた人同志、あるいは嫌いな人同志の類似より大きくはないのに、友人はそうでない人より自分自身に類似していると考えられている、ということを示している。このように、友人を自分自身に似たものと考えやすいという傾向について、自分自身に似ていると考えた方が理解しやすく、予見可能になるから、友人を自らに似たものと考えるのである、という考え方や、友人関係というものは、個人としてその友人の中に自分自身との類似点を選択的に認知させるような効果を持つのである、という考え方が提出されてきた。しかし我々は、後述のように、第2の理想化傾向との関連でこの傾向を解釈すべきだと考える。

第2の傾向については、Thompson & Nishimura (1952)、Fiedler, et al. (1952)、Northway & Detweiler (1955) 等が検討している。それらの研究結果は、友人はそうでない人より、自己の理想像に似たものとして見られていることを示している。この傾向は、一般の人自身を自己の理想像と調和したものとして見る傾向があることを考えれば、友人を自分自身に類似したものとして見るという第1の傾向と無関係ではありえない。Lundy (1958) は、好きな人に対して自己の特徴を帰する傾向があるが(第1の傾向)、その傾向は望ましい特徴に関して著るしい(結果として第2の傾向をもたらし)ということを示している。この二つの関係の関係について、McKenna, et al (1956) は、友人の概念は被験者の自己概念より、理想的自己の概念の方により類似していることすなわち第1の傾向より第2の傾向の方が顕著であることを明らかにしている。また、Thompson & Nishimura (1952) によると友人の

概念と被験者の理想的自己の概念との類似の方が、被験者の自己概念と理想的自己の概念との類似より大きい。このような事実から考えると、個人が自分自身について考える際、社会的に望ましいとされている特徴を自分に認めようとする傾向がはたらくとき、親しい友人について考える場合にも同様な傾向がはたらくて、自分自身にも友人にも同じようなステレオタイプを与えるという結果となり、自己概念と友人の概念とが類似したのではないか、言いかえれば、友人を理想化して見ると、いう第2の傾向が、一般の人は自分自身を自己の理想像と調和したものと見ると、いう傾向とあり、また、友人を自分自身に似たものと見ると、いう第1の傾向をもたらしただのではないか、ということが考えられるのである。この点については、第2部第3章、第4章において、実際の資料を用いて検討する。

第2節 自己意識が社会的行動におよぼす影響

ここでは、主として、自己意識の諸側面に見られる違いが、どのような社会的行動(感情、認知等も含む)の違いをもたらすか、という問題に関する実験的研究について概観する。

1 対人感情および対人認知におよぼす影響

この問題は、個人の対人関係が、彼の自己意識のあり方によってどのように影響されていくか、というプロセスを分析する為には欠かせない、基本的なものである。しかし、この問題に関する研究は多くない。

Veldman & Worche (1961) は、自己評価のレベルによって、敵意感情の処理法がどのように異なってくるか、という点からこの問題を研究している。彼等は、防衛性の強さと自

己受容の程度（理想的自己像と現実的自己像との差として測定されており、自己評価と考えてよい）とによって、パーソナリティを四つのタイプに分ける。すなわち、1) 適応的（防衛性低く、自己受容度の高い者）、2) 抑圧的（防衛性高く、自己受容度の高い者）、3) 不安的（防衛性低く、自己受容度の低い者）、4) 歪曲的（防衛性高く、自己受容度の低い者）、である。これらのタイプに関して、1 「適応的」な人は攻撃的感情と敵意とを最も強く表出し、「抑圧的」な人は最も表出が少ない。2 「不安的」な人は攻撃不安（aggression-anxiety）を最も強く示し、「適応的」な人は最も少ない。3 自己受容度の低い人は敵意感情を転移させやすい。という仮説が立てられた。重要な意義のあるものとされた知能検査において、失敗を余儀なくさせる（記入しおわる前に時間がきたとして取り上げてしまう）ことによって敵意感情を生じさせるといった方法を用いて、実験が行なわれた。

結果は、彼等の仮説を支持するものであった。
Worchel & McCormick (1963) は、認知的不協和の状態におかれた個人が、その解決の為にどのような方法をとるか、自己評価のレベルと選択される解決方法とはどのような関係にあるのか、という問題について研究している。
彼等は Festinger (1957) によって、認知的不協和の問題を次のように定式化する。①二つの認知が互いに矛盾する場合不協和が生じる。②不協和の経験は不快である。③不協和を感じている人は、それを減少し協和な状態になろうとする。④不協和を減少する方法としては、a. 自分の信念を変化させる b. 不協和を生み出す人を避ける c. 類似の信念を持つている人によって自分の信念を確証してもらう d. 不協和の源泉を拒否する。等の方法が考えられる。不協和を減少する方法のうち実際にどのような方法をとるかということは、自己評価のレベルによっても規定されると彼等は考える。自己評価の低い人(理想的自己像と現実的自

己像との差が大きい人)は、自己卑下感を持ち、不安で不安定であり、他者の意見が自分の意見と一致するかどうかによって、自分の意見に対する確信の度合が大きな影響を受けると考えられる。従って、不協和の際、自分の信念を変化させて協和状態になろうとしたりやまいと考えられる。自己評価の高い人は、フラストレーション状態において直接的に攻撃感情を表出したりやまいから、不協和の源泉(この場合は意見の違う相手)に対する評価を下げることによって、協和状態になろうとしたりやまいと考えられる。このような考え方は、サクラに各被験者の意見を支持させたり反対させたりするという方法を用いた実験結果によって支持された。

Dittes (1959) は、個人の自己評価のレベルが集団参加のモチベーションと関係しているだろうと考え検討している。自己評価の低い人は、自分の自己評価のレベルを高める為には成功したり他者から受け入れられたりすること

とが必要であるから、自己評価の高い人より
集団から受け入れられたいという欲求が強いた
らうと彼は考える。もしそうなら、実際に集
団から受け入れられた場合、自己評価の低い人
の方がその集団に対し魅力を感じやすく、そ
の集団にとどまりたいと考えるであろうし、
集団から受け入れられなかった場合、自己評価
の低い人の方がその集団に対する魅力を減少
させやすく、その集団にとどまりたくないと
考えるであろう、という仮説を立てることが
できる。これらの仮説は彼の実験の結果によ
って大体支持された。この問題については、
第2部第1章において、さらに検討ある。

このように、自己評価のレベルが異なれば
他者に対する感情の持ち方、感情の表出の仕
方、等が異なってくることが明らかにされて
きた。現在までの研究は、まだ数も少なく断
片的なものである。しかし第1節で論じたと
ころの、対人関係の諸側面と自己評価との間
に見出された関連性についても、ここで述べ

に諸研究のように、自己評価のレベルの違いによって、具体的に他者の見え方、他者に対する感情の持ち方、その表出の仕方等がどのように異なってくるか、ということとを明らかにしてゆかない限り、そのような関連性が存在している必然性について、根拠をもった理解をあることは不可能であろう。

2. 被説得性におよぼす影響

マスメディアからのあるいは他者からの説得的コミュニケーションを受けた場合、どういふ人が説得されやすいであろうか。この問題を自己評価との関連で取り上げた研究がなされている。一般的に考えれば、自己評価の高い人は自分の判断に自信を持っており、心理的に安定しているので、説得されにくいと考えられる。被験者の意見を変化させるような説得的コミュニケーションを送るといふ方法を用いた Jamis (1954, 1955), Jamis &

Field (1959), Janis & Rife (1959) の研究においてこのような考え方を一応支持するような結果が得られた。しかし、いおれの研究においても自己評価の高い人ほど説得されにくいという傾向は、それほど大きなものではない。Lesser & Abelson (1959) は、2枚ずつ組になつた絵のどちらが好きか、という課題を用いて研究している。二つの実験条件が作られ一つの条件においては初めのいく組かの絵についてまず被験者に好みと言わせ、ついで実験者は被験者の好みと一致するように彼の好みを表明し、他の条件においては、被験者の好みと一致しないように彼の好みを表明した。続いて14組の絵について、実験者がまず彼の好みを言い、その後で被験者の好みを言わせ、両者が表明した好みの一致度を被説得性得点とした。その結果、自己評価の低い人が初めのいく組かの選択において実験者に支持された場合にのみ、その後での被説得性が高まる、ということが明らかになった。こ

の点について彼等は、自己評価の低い人は他者から承認されるといふことに対して敏感に反応し、他者と意見が一致しそうな場合にのみ自分の意見を変えるのであろうと述べている。

Brehm & Cohen (1962) は、この自己評価と被説得性との関係を、認知的不協和理論の文脈の中で考察している。彼等は次のように定式化する。1) 自己評価の高い人は、説得的コミュニケーションを与えられた場合、あるいは承諾を強制された場合、説得されたり承諾したりすることが少ない。2) 自己評価の高い人が強制によって承諾した場合には、自己評価の低い人が承諾した場合に較べて不協和が大きい。第一の点に関しては、これまで多くの研究が、自己評価の高い人の方が説得されにくいことを示している(上述の Lesser & Abelson の研究も、状況に関与する限定はあるがこの傾向に反するものではない)ことによつて支持される。また第二の点に関しては、自

分の態度に反することを行なったり、自分の態度を変えたりあることが普通でないような人であればあるほど、強制的に承諾させられたことによる不協和は大きくなるであろうから、(1)から当然この(2)が導き出されるのである。この問題に関しては、今後、前述の Lesser & Abelson の研究結果をも考慮し、もっと詳細に検討する必要がある。

第3節 他者との相互作用による自己意識 の形成と変様

ここでは、主として、他者との相互作用が自己意識をどのように形成、変様してゆくか、という問題に関する実証的研究について概観する。

1 両親の養育態度と自己意識

これまで多くの理論家が指摘してきたように、自己意識は他者との相互作用を通じて形成され変様されてゆくものである。それ故、個人の生活史の最も初期の段階から一貫して相互作用を行なってきた両親の養育態度、言いかえれば両親との相互作用の型が、個人の自己意識の重要な部分を形成してきたことは、当然考えられることである。

この問題に関しては、従来、少数の断片的な研究しか行なわれてこなかったのであるが、

最近 Coopersmith (1967) が、包括的で詳細な研究結果を報告している。彼は両親と子供との関係を理論的分析と因子分析の結果とに基づいて、1) 両親からの受容 (acceptance)、2) 両親の許容性と罰 (permissiveness and punishment)、3) 家庭内の民主的慣行 (democratic practices)、4) 独立性の訓練 (training for independence) の4次元でとらえ、それぞれの次元における両親—子供関係と、子供の自己評価のレベルとの関係を検討している。この研究に参加した80人余りの母親 (父親についての information は母子双方から間接的に得たものである) は、いずれも中産階級に属し、29才~54才 (メディアンは38.4才) であり、父親は母親より約3才年長であった。子供の方は公立小学校の5年生あるいは6年生であった。

両親からの受容の次元に関しては、母子の関係が緊密である場合、子供の考え方が家庭内の他の人と一致している場合、母親が子供の友人関係をよく知っている場合、等に子供

の自己評価が高いという傾向があり、自己評価の高い子供の母親は、「子供はつまらぬことで両親をわづらわしてはならない」という意見や「子供の問題に注意を払う場合に困ることほ、子供が沢山の話をでっちあげることであり」という意見に同意しない傾向があった。これらの結果から、母親から受容されている場合には、子供の自己評価が高いと言えよう。

両親の許容性に関しては、自己評価の高い子供の母親は自己評価の低い子供の母親より、「子供は厳格なしつけを受ける方が実際には幸福である」という意見に賛成する割合が多くなり、注意深く一貫して子供にきまりを守らせていると述べる割合も多かった。また罰に関しては、罰の回数ではなく罰のタイプと程度が子供の自己評価と関連しており、自己評価の高い子供の母親は、罰によって効果があるとして述べ、本人も当然罰されるべくして罰されることが多いと述べる傾向があった。

これらの結果から、両親が厳しいしつけを、
一貫して合理的に与えている場合には、子供の
自己評価が高いと言えよう。

民主的慣行に関しては、自己評価の高い子
供の母親は、両親の決定は確固としたもので
決定的なものである、と述べる傾向があるが、
「子供は両親の考え方に疑問を持つべきでは
ない」という意見には不賛成であり、「子供
は家族の計画に対して発言権を持つべきであ
る」という意見には賛成であった。また、子
供に何かをやらせたり承諾させたりする場合、
自己評価の高い子供の母親は、討論とかわけ
を話すとかいう方法を用いる傾向があり、自
己評価の低い子供の母親は、力とか専制的な
手段を用いる傾向があった。これらの結果か
ら、両親は毅然とした態度をとっているが、
子供にも相応の発言権を認めるような家庭の
場合には、子供の自己評価が高いと言えよう。
独立性の訓練に関しては、自己評価が中位
の子供の母親は、自己評価が低い子供あるい

は高い子供の母親に較べて、家庭外で子供が泊ることには心配である、と述べる割合が多く、また、子供のプライバシーは守らなくてもよい、と答える傾向があった。独立の訓練と子供の自己評価との関係が曲線的である、というこの結果について、Coopersmithは、中位の自己評価は不確実なものであり、少なくともその一部は依存的な経験の中から生じたのではないだろうか、と述べている。

この分野の研究においては、親の態度を研究者が操作するわけにはゆかないので、果して養育態度が原因となって子供の自己意識がそのように形成されてきたのか、あるいは、第3の有力な要因が存在して、養育態度と子供の自己意識との関連性を現象的にもたらしたのか、という点については、明白な結論を出すことが困難である。しかし、ここに述べたCoopersmithの研究のように、子供の自己意識の形成と関連のありそうな養育態度の型を包括的に明らかにしてゆくと同時に、両者の間

の関係について長期にわたる追跡研究を行なうことによつて、両変数の因果的な関係を明らかにあることができるであろう。

2. 他者からの承認・拒否と自己意識の変様

他者との間の相互作用は、承認あるいは否認の交換プロセスとしてとらえることもできる。このような承認と否認について、承認あるいは否認を受けた個人にそれぞれポジティブな社会的強化、ネガティブな社会的強化をもたらし、ポジティブに強化された態度の表出、行動、等を促進し、ネガティブに強化された態度の表出、行動、等を抑制することが知られている。個人の自己評価のレベルも、他者からの承認と否認とに、かなりの程度依存している。他者から承認されれば個人の自己評価のレベルは上昇し、否認されれば下降すること、は、多くの研究者が指摘するところである。

Harvey, et al (1957) は、他者から非好意的な評価を受けた場合の反応について研究している。重要な社会的性格面について、友人から非好意的に評価された場合と初対面の人から非好意的に評価された場合とで、さらに、その評価の非好意度(本人の行なった評価とのスレの大きさ)が大きい場合と小さい場合(4段階が設定された)とで、個人の反応がどのように異なってくるかが検討された。この結果、他の方向への反応によって非好意的評価を受けたことによる緊張を解消し、自己評価には変化が生じないだろうという彼等の予想に反して、非好意度が最少の場合でも自己評価の低下が見られた。この他に、非好意的評価をした人に対する評価を下げる傾向(これは評価者が初対面の人の場合に著るしい)を受けた評価を想起する場合、好意的な方向へゆがめて想起する傾向(これは評定者が友人で評定の非好意が小さい場合に著るしい)、他者からの評定として見せられたものは、実

際には評定者とされた人が行なった評定ではない(実験操作に疑念を持つわけである)と考える傾向(これは評定者が友人で評定の非好意度が大きい場合に著るしい)が見られた。Harvey(1962)は、より詳細ではあるが基本的には先の研究と同様な実験手続を用いて研究した結果、先の研究結果を確認し、さらに、個人の自己評価を確認するような、あなれち彼の自己評価と同じレベルの評価を初対面の人から与えられると自己評価が向上すること、友人から極端に非好意的な評価を与えられた場合には自己評価が著るしく低下すること、権威主義的な人ほど自己評価を低下させにくいこと、を明らかにした。Johnson(1966)も、否定的な評価の程度と、否定的評価に対する反応としての不十分な想起、同調(自己評価の低下)、評定者の拒否、評価されたテストの価値を低く見積ること、合理化、との関係を検討している。彼は、これまでの同調性に関する研究結果から、情報源があいまい

で、しかも事柄が自我関心の強いものである場合には、個人のそれまでの態度と余り大きくかけ離れた情報は同調を引起さないことが考えられるから、否定的な評価の程度とそれに対する同調性(自己評価の低下)との間には曲線的な関係が見られるであろう、と予想している。彼の実験結果は、この予想と裏付けられるものであった。

Videbeck (1960) は、人の自己概念は、他者からの自己に対する諸反応によって学習されてきたものであると考え、1) 自己のある特性に関して他者が好意的な反応をえる場合、その特性に関する彼の自己評価は上昇し、(彼の考える理想方向へ移動し)、非好意的な反応をえる場合、その特性に関する彼の自己評価は下降するだろう、2) 好意的な反応と非好意的な反応とが、承認か否認かという点以外においては差がない場合、両反応の引起する自己評価の変動量は絶対値が同じであろう、3) 他者の好意的および非好意的反応は、評

価を受けた特性と機能的に類似した特性に関する自己評価にまで影響をおよぼすであろうという三つの仮説を立て実験を行なった。この実験は、手続上、好意的反応と非好意的反応とを、方向は逆でしかも同じ強さにする問題とか、関連特性（評価を受けた特性と機能的に類似のもの）や無関連特性の選抜の問題とか、が論議を呼ぶであろうが、一応、仮説1と3とは実験結果によって支持された。仮説2に関しては、非好意的反応を受け自己評価を下降させる変化量の方が、ずっと大きいものであった。Maehr, et al. (1962)は、このVidebeckの実験を追試している。両研究の主要な相異点は、Videbeckの研究においては、批判特性（好意的あるいは非好意的反応を直接受ける特性）は詩の上手下手であったのに対し、この研究では、体の各部分の協応性と敏捷性であった、という点である。結果は、Videbeckの第2の仮説を支持したという点以外、Videbeckの結果と同様であった。しかし、好意的反応

と非好意的反応とが方向は逆で強さは等しいものであったという保障はどこにもないのであるから、Videbeckの第2の仮説について論ずることは意味のないことである。

ここに述べた研究は、いずれも他者からの承認あるいは否認によって、自己評価が変動することを実証したものである。Harvey等の研究の系列は、否認された場合の緊張解消法の一つとして自己評価の低下を取り上げたものであり、Videbeck等の研究の系列は、承認されたり否認されたりすることによる自己評価の変動が、自己概念のどの部分にまでおよぶかに関わるものであった。これらの研究を発展させてゆくことによって、社会生活において見られる種々のタイプの自己意識の変動の問題、例えば、失意とが得意、社会的役割に応じた自己意識の変様等の問題を明らかにしてゆくことができるであろう。

引用文献

1. Adler, A. *The practice and theory of individual psychology*. New York: Harcourt Brace, 1924.
2. Allport, G. W. "The ego in contemporary psychology." *Psychol. Rev.*, 1943, 50, 451~478.
3. Berger, E. M. "The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others." *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1952, 47, 778~782.
4. Bertocci, P. A. "The psychological self, the ego and personality." *Psychol. Rev.*, 1945, 52, 91~99.
5. Beth, M. "Zur Psychologie des Ich." *Arch. f. d. ges. Psychol.*, 1933, 88, 323~376.
6. Brehm, J. W., & Cohen, A. R. *Explorations in cognitive dissonance*. New York: Wiley, 1962.
7. Brownfain, J. J. "Stability of the self-concept as a dimension of personality." *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1952, 47, 597~606.
8. Bugental, J. F. T., & Zelen, S. I. "Investigations into the self-concept. I. The W-A-Y Technique." *J. pers.*, 1950, 18, 483~498.

9. Calvin, A.D., & Holtzman, W.H. "Adjustment and the discrepancy between self concept and inferred self" *J. consult Psychol.*, 1953, 17, 39~44
10. Cantril, H. *The psychology of social movements*. New York: John Wiley & Sons, 1941
11. Cartwright, R.D. "Effects of psychotherapy on self-consistency" *J. counsel Psychol.*, 1957, 4, 15~22
12. Combs, A.W., & Snygg, D. *Individual Behavior - A perceptual approach to behavior*. New York: Harper, 1959
13. Cooley, C.H. "A study of the early use of self-words by a child" *Psychol. Rev.*, 1908, 15, 339~359
14. Cooley, C.H. *Human nature and the social order*. New York: Charles Scribner's Sons, 1922
15. Coopersmith, S. "A method for determining types of self-esteem" *J. abnorm soc Psychol.*, 1959, 59, 87~94
16. Coopersmith, S. *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: Freeman & Co. 1967
17. Dai, B. "A socio-psychiatric approach to personality organization" *Amer social Rev.* 1952, 17, 44~49
18. Davitz, J.R. "Social perception and sociometric choice of children"

- J. abnorm. soc. Psychol., 1955, 50, 173~176.
19. Diggory, J. C. Self-evaluation — concepts and studies. New York: John Wiley & Sons, 1966.
20. Dittes, J. F. "Attractiveness of group as a function of self-esteem and acceptance by group." J. abnorm. soc. Psychol., 1959, 59, 77~82.
21. Eastman, D. "Self-acceptance and marital happiness." J. consult. Psychol., 1958, 22, 95~99.
22. Erikson, E. "Identity and the life cycle." Psychological Issues, Monograph 1, Vol. 1, No. 1, 1959.
23. Festinger, L. The theory of cognitive dissonance. New York: Harper & Row, 1957.
24. Fey, W. F. "Acceptance by others and its relation to acceptance of self and others." J. abnorm. soc. Psychol., 1955, 50, 274~276.
25. Fiedler, F. E., Warrington, W. G., & Blaisdell, F. J. "Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in a social group." J. abnorm. soc. Psychol., 1952, 47, 790~796.
26. Fromm, E. Man for himself. New York: Binehart, 1947 (谷口早坂訳「人間における自由」創元社 1955)
27. Goffman, E. The presentation of self in everyday life. New York: Doubleday, 1959.

28. Gordon, C. "Self-conceptions: configurations of content" In Gordon & Gergen (eds) *The self in social interaction*, vol 1. New York: John Wiley & Sons, 1968, p.115 ~ 136.
29. Goslin, D.A. "Accuracy of self perception and social acceptance." *Sociometry* 1962, 25, 283 ~ 296.
30. Hall, C.S. & Lindzey, G. *Theories of personality* New York: John Wiley & Sons, 1957.
31. Harvey, O. J. "Personality factors in resolution of conceptual incongruities." *Sociometry*, 1962, 25, 336 ~ 352.
32. Harvey, O. J., Kelley, H.H., & Shapiro, M.M. "Reactions to unfavorable evaluations of the self made by other persons." *J. pers.*, 1957, 25, 398 ~ 411.
33. Horney, K. *Self analysis*. New York: Norton, 1942.
34. Horney, K., *Our Inner Conflict*. New York: Norton, 1945.
35. Hull, C.L. *Principles of behavior - an introduction to behavior theory*. New York: Appleton Century Crafts, 1943. (能見岡本訳「行動の原理」誠信書房 1960.)
36. James, W. *Principles of psychology*. 2 vols. New York: Henry Holt, 1890.
37. James, W. *Psychology - briefer course*. New York: Henry Holt, 1891.

(今田訳「心理学」上下、岩波文庫、1956)

38. Janis, I. I. "Personality correlates of susceptibility to persuasion." *J. pers.* 1954, 22, 504~518.
39. Janis, I. I. "Anxiety indices related to susceptibility to persuasion." *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1955, 51, 663~667.
40. Janis, I. I., & Field, P. B. "Sex differences and personality factors related to persuasibility." In Hovland & Janis (eds) *Personality and persuasibility*. New Haven: Yale Univ. Press, 1959, Pp. 55~68.
41. Janis, I. I., & Rife, D. "Persuasibility and emotional disorder." In Hovland & Janis (eds) *Personality and persuasibility*. New Haven: Yale Univ. Press, 1959. Pp. 121~137.
42. Johnson, H. H. "Some effects of discrepancy level on responses to negative information about one's self." *Sociometry*, 1966, 29, 52~66.
43. Jung, C. G. *The development of personality*. New York: Pantheon, 1953.
44. Kelman, H. C., & Parloff, M. B. "Interrelations among three criteria of improvement in group therapy: comfort, effectiveness, and self-awareness." *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1957, 54, 281~288.
45. 北村晴朗「自我の心理」誠信書房 1962.

46. Koffka, K. Principles of Gestalt psychology. New York: Harcourt, Brace, 1935.
47. Köhler, W. Gestalt psychology. New York: Horace Liveright, 1929.
48. Kuhn, M.H., & McPartland, T.S. "An empirical investigation of self-attitudes." Amer. sociol. Rev., 1954, 19, 68~76.
49. Le Dantec, F. L'égoïsme, seule base de toute société. Paris: Flammarion, 1916.
50. Lesser, G.S., & Abelson, R.P. "Personality correlates of persuasibility in children." In Hovland & Janis (eds), Personality and persuasibility. New Haven: Yale Univ. Press, 1959. P. 187~221.
51. Lewin, K. Principles of topological psychology. New York: McGraw-Hill, 1936.
52. Lundy, R.M. "Self perceptions regarding masculinity-femininity and descriptions of same and opposite sex sociometric choices." Sociometry, 1958, 21, 238~246.
53. McDougall, W. The energies of men. New York: Scribners, 1933.
54. McIntyre, C.J. "Acceptance by others and its relation to acceptance of self and others." J. abnorm. soc. Psychol., 1952, 47, 624~626.
55. McKenna, H.V., Hofstaetter, P.R., & O'Connor, J.P. "The concept of the ideal self and of the friend." J. pers., 1956, 24, 262~271.
56. Maehr, M.L., Mensing, J., & Najzger, S. "Concept of self and

- the reactions of others." *Sociometry*, 1962, 25, 353~357
57. Mead, G.H. "A behavioristic account of significant symbol" *J. Philosophy*, 1922, 19, 157~163.
58. Mead, G.H. *Mind, Self and Society*. Chicago: Univ. Chicago Press, 1934.
59. Miller, D.R. "The study of social relationships: situation, identity, and social interaction." In Koch (ed) *Psychology: a study of science*. ^{New York: McGraw-Hill 1963} Vol. 5 Pp. 639~737.
60. Moore, J.S. "The problem of the self" *Phil. Rev.*, 1933, 42, 487~491
61. 長島貞夫他「自我と適応の関係についての研究(1)」*東京教育大学教育学部紀要* 1966. 12巻, 85~106
62. 長島貞夫他「自我と適応の関係についての研究(2)」*東京教育大学教育学部紀要* 1967. 13巻, 59~84.
63. Newcomb T.M., *Social psychology*. New York: Dryden Press, 1950.
(森下成訳「社会心理学」培風館 1956.)
64. Northway, M.L. & Detweiler, J. "Children's perception of friends and nonfriends." *Sociometry*, 1956, 18, 527~531
65. Oesterreich T.K. *Phenomenologie des Tich im ihren Grundprobleme*. Leipzig: J.A. Barth, 1910.
66. Osgood, C.E., Suci, G.J., & Tannenbaum, P.H. *The measurement*

- of meaning Urbana, Ill : Univ of Illinois Press, 1957
67. Phillips, E. L. "Attitudes toward self and others: a brief questionnaire report." *J. consult. Psychol.*, 1951, 15, 79~81.
68. Rogers, C. R. "Some observations on the organization of personality." *Amer. Psychologist*, 1947, 2, 358~368.
69. Rogers, C. R. *Client-centered therapy - its current practice, implications and theory*. Boston: Houghton, 1951 (友田訳「精神療法」ロジャース選集第2巻 岩崎書店 1962.)
70. Rogers, C. R. "Significance of the self-regarding attitudes and perceptions." In Gorlow & Katkovsky (eds), *Readings in the psychology of adjustment*, 1959(a) (伊東編訳「パーソナリティの理論」ロジャース全集第8巻第2章 岩崎学術出版 1967)
71. Rogers, C. R. "A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships as developed in the client-centered framework." In Koch (ed.) *Psychology: a study of science*, Vol. 3. New York: McGraw-Hill 1959(b)
72. Sarbin, T. R. "Role theory." In Lindzey (ed.) *Handbook of social psychology* vol. 1. Cambridge: Addison-Wesley 1954. (土芥訳「役割の理論」社会心理学講座 みおろ書房 1956)
73. Scheerer, E. T. "An analysis of the relationship between acceptance of

- and respect for self, and acceptance of and respect for others in ten counseling cases." *J. consult Psychol.*, 1949, 13, 169~175
74. Sherif, M. *The psychology of social norms*. New York: Harper & Bros., 1936.
75. Shibutani, T. *Society and Personality: an interactionist approach to social psychology*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall, 1961.
76. Smith, M. B. "The phenomenological approach in personality theory: some critical remarks." *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1950, 45, 516~522
77. Snygg, D., & Combs, A. W. *Individual behavior: a new frame of reference for psychology*. New York: Harper, 1949.
78. Stirner, M. *The ego and his own*. (Transl. by Byington.) London: A. C. Fifield, 1912.
79. Stock, D. "An investigation into the intercorrelations between the self-concept and feelings directed toward other persons and groups." *J. consult. Psychol.*, 1949, 13, 176~180.
80. Symonds, P. M. *The ego and the self*. New York: Appleton, 1951.
81. Thompson, W. R., & Nishimura, R. "Some determinants of friendship." *J. pers.*, 1952, 20, 305~314.
82. Turner, R. H., & Vanderlippe, R. H. "Self-ideal congruence as an index of adjustment." *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1958, 57, 202~206.

83. Vargas, M. J. "Changes in self-awareness during client-centered therapy." In Rogers & Dymond (eds.) *Psychotherapy and personality change*. Chicago: Univ. of Chicago Press, 1954.
84. Veldman, D. J. & Worchel, P. "Defensiveness and self-acceptance in the management of hostility." *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1961, 63, 319~323.
85. Videbeck, R. "Self-conception and the reaction of others." *Sociometry*, 1960, 22, 351~359.
86. Worchel, P. & McCormick, B. L. "Self-concept and dissonance reduction." *J. pers.* 1963, 31, 588~599.
87. Wylie, R. C. *The self concept a critical survey of pertinent research literature*. Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1961.
88. Zelen, S. L. "Acceptance and acceptability. An examination of social reciprocity." *J. consult. Psychol.*, 1954, 18, 316.

* * * *

89. 依田新 山下栄一「自己自己概念」依田他監修「児童心理学の進歩1964年版」
第12章 B. 金沢書房 1964.
90. 我妻洋「自我の社会心理」誠信書房 1964.

第 2 部

實 証 的 研 究

序

この第2部において報告する4研究は、いずれも、自己意識のあり方の差異によって、その人の対人関係のあり方がどのように影響されるか、という問題を説明しようとするものである。初めの2章(第1章・第2章)で報告する研究は、自己評価のレベルが異なれば、他者が自己に対してなした言動の受取り方が異なり、また、内容の等しい社会的相互作用があったとしても、その相手に対して感じる魅力度が異なってくる、ということも明らかにし、そういう結果の生じるプロセスについて考察したものである。後の2章(第3章・第4章)で報告する研究は、個人の自己概念と、これまでの社会的交渉を通じてすでにできあがっている知人(他者)についての概念との関連性を種々の側面について検討し、他者を認識し概念化する場合、いかに自

己概念が関与しているかについて考察したものである。この2章においては、特に、これまでの諸研究において指摘されてきた assumed similarity に関する傾向と理想化傾向について再検討を加え、両者間の関係を明らかにすると同時に、一般的に、自己評価のレベルの高低によって、自他に関する認識空間の構造がどのように異なるかを検討した。

これらの研究を通じて一貫して考察の対象となったのは、自己に対する意識内容が異なることによって他者に関する意識内容がどのように異なってくるか、という問題と、自己評価の低い人は何故に対人関係においてうまくゆかないか、という問題である。これらの問題は、各章において、それぞれの研究目標との関連で論じられる。

最後に第5章において、これまでの4章において論じられたことがらを、自己意識と対人関係との関連性という視点から五つの命題の形にまとめ、この第2部の結論とした。

資料

第 1 章

2者関係に及ぼす自己評価の効果

— 他者からの働きかけに対する反応を規定する要因として —

京 都 大 学

梶 田 徹

個人が自己をどのように見ているかという自己概念と社会的相互作用との間の関係について、最近数多くの研究がなされている。そして、多くの研究者達が自己概念が社会的相互作用の中で形成、変容されること、また、ひるがえってその自己概念が社会的相互作用を規定してゆくことを主張している。

この自己概念について、これまで大きく分けて2つの方向からの研究がなされてきた。即ち、①自己概念の構造を問題にするもの、②自己概念を1つの次元でとらえて他の諸変数との間の関係を見ようとするものである。後者の研究においては、自己満足度 (self-satisfaction)、自己受容 (self-acceptance)、自己に対する好意 (self-favorability)、自己に対する態度 (self-attitude)、自己評価 (self-esteem) 等の概念が用いられてきた。Wylie (1961) は、これらの諸概念は必ずしも同意語ではなく、意図する所はそれぞれ多少異なっているにもかかわらず、どの概念も自己に対する一般的、包括的な評価的態度 (evaluative attitude) を表わしている点で共通であると考え、self-regarding attitude と総称している。

本研究では自己評価を問題にするのであるが、ここでこの自己評価を、自己に対してどの程度肯定的であるか否定的であるか、すなわち自己に対する満足感の程度と定義しておきたい。このような意味における自己評価はこれまで2つの考え方の下に測定されてきた。1つは現実の自己像 (actual self) と理想的な自己像 (ideal self) との間の食い違いの大きさ ([Self-Ideal] discrepancies)、あるいは両自己像の相関 (self-ideal correlation) を問題にする考え方である。これは、こうありたいと望んでいる姿

から現実の自己がどの位ずれていると意識しているかを測定することによって、どの位現在の自己に満足しているかを間接的に測定しようとするものである。もう1つは現実の自己の像だけを問題にするものである。これは現実の自己を肯定的に見ているか否定的に見ているかという自己に対する態度を、自己以外の対象に対する態度を測定するのと同様、直接的に測定しようとするものである。この両者の間の関係はまだ十分に明らかにされていないが、同一のものとして考えるには問題が多いので、一応区別して考えたい。ここでは後者の測定手続きによる自己評価、すなわち直接的に測定された自己評価を問題にすることにする。

対人関係とこのような自己評価との間の関係について、これまでいくつかの研究が行なわれてきた。この分野で取扱われる問題は、便宜的に3つに分けることができよう。まず第一は自己評価と一般的な他者に対する態度との間の関係についての問題である。この問題については、自己評価と一般的な他者に対する態度との相関が高いこと、すなわち自己を肯定的に見ている人は一般的に他者に対しても肯定的であり、逆に、自己を否定的に見ている人は一般的に他者に対しても否定的であるという関係が明らかにされた (Berger 1952, Fey 1954, Williams 1962 etc.)。この関係は、一時点における静的な相互関係からだけでなく、セラピーあるいは成功経験による自己評価の変化に伴って一般的な他者に対する態度が変化するかどうかという点からも研究された (Stock 1949, Diller 1954)。その結果によっても、自己評価が変化すると一般的な他者に対する態度も同じ方向に変化することが発見されている。

第2は他者からの評価、承認等の働きかけに対する反応として自己評価がどのように変化し、またその他者への感情がどう変化するかという問題である。この問題については、他者から肯定的評価を受けると自己に対して肯定的になり (Maecher et. al. 1962)、否定的評価を受けると自己に対する評価が下がる (Harvey et. al. 1957, Harvey 1962, Maecher et. al. 1962) ということが明らかにされた。また、他者から承認されるとその他者に対する態度が好意的になり (Deutsch & Solomon 1959, Jones et. al. 1962)、承認されなかったり否定的な評価を受けると、その他者に対する態度が非好意的な方向へ変化する (Harvey et. al. 1957, Deutsch & Solomon 1959, Harvey 1962, Jones et. al. 1962) ということが明らかにされた。

第3は他者からの働きかけに対して反応する際、自己評価のレベルの差異によってどのような反応の差異が見られるかという問題である。この問題については Dittes (1959b) が集団からの受容の場合について研究をおこなっている。そして受容された場合は集団に大きな魅力を感じ、拒否された場合集団に対する魅力が減るが、その傾向は自己評価の低い人に著しいという結果を報告している。

このように、対人関係が自己評価との関連においていくつかの角度から研究されてきたが、自己評価のレベルの差異が自己と相互作用を営んでいる他者への反応をどのように規定しているかという第3の問題はまだ必ずしも明らかにされたとはいえない。この点について若干の考察を加えるのが本研究の目的である。

問 題

Dittes (1959a) (1959b) は、①人は自己評価を高いレベルに保ちたいという欲求を持ち、②課題遂行において成功したり、他者から受容されたりすることが自己評価を維持し高める手段として役立つ、とするならば、自己評価の低い人は自分の自己評価を高める為に積極的に成功や受容を望まずだと考える。そこから彼は、自己評価の程度は集団の他の成員から受容されたいという欲求の程度を反映しているものと考えた。一方、集団に対する魅力が、Cartwright & Zander (1953) の言うように ① その集団成員の特

定の欲求がその集団によって満足させられる度合と、②その欲求の強さ、によって決定されるとするなら、「受容に対する欲求」は集団によって満足される欲求であるところから、ある集団成員の受容に対する欲求の強さ (= 自己評価の程度) とその欲求の満足、不満足 (= 受容、非受容) が個人に対するその集団の魅力の規定するだろうという考えを展開し、以上3つの変数間の仮説的關係を Fig. 1 のようなものとして述

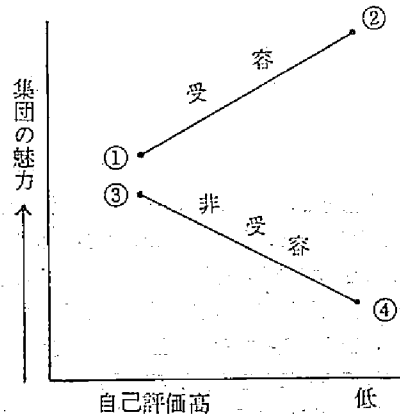


Fig. 1. Dittes の仮説の図式的提示。

べている。そしてこの図式を大体支持するような実験結果を報告している。(彼のデータでは③-①、③-④、①③の差-③④の差、の間に有位差があり、④-②、①-③、の間には有位差がなかった)。尚、Dittes の場合自己評価の指標として ①適応感と自己評価に関する11項目の6ポイント尺度(実験前)、②実験セッションにおける集団での適応感(実験後)、③集団成員として望ましいかどうかについての他の成員からの3回の評定(実験中)、という3つの尺度の合成得点が用いられた。

Dittes の説に従うなら2者関係においても当然同様の関係が見られるはずである。すなわち2者関係において①相手から受容された場合は受容されない場合より相手に大きな魅力を感じ、接触を保とうとする。②自己評価の低い人が相手から受容された場合、自己評価の高い人に較べて相手により大きな魅力を感じ、接触を保とうとする。③逆に、自己評価の低い人が相手から受容されなかった場合、自己評価の高い人に較べて相手により小さな魅力を感じ、相手を避けようとする。こういった傾向が見られるであろう。このように Fig. 1 の仮説的図式が2者関係にもあてはまるものと考えられる。

方 法

〈被験者〉京都市内の高校一年生男子68名。

〈実験期日〉1965年5月上旬。

〈手 続 き〉要約すれば、1. 「私の理想」という題での作文と自己評価に関する評定、2. 作文についての面接（受容 or 非受容の操作）、3. 相手の魅力及び知覚された受容の程度に関する評定、の順で実験がおこなわれた。詳細を述べると、

1. 被験者は1度に10名内外が1室に入れられる。そして、実験を行なった高校の先生が大要次のようなインストラクションをする。「大学から先生が来られて、君達がどんな理想をもっているか、どういう人になりたいと思っているか調査されます。まず『私の理想』という題で作文を書いて下さい。作文が書けたらこの質問紙（自己評価尺度）に記入して下さい。記入できたら作文と質問紙を持って別室に行ってください。そこで簡単な面接があります。」なお、質問紙の記入の仕方はよく説明され、個人的な質問に応じてやり、記入の仕方誤りや脱落のないようにされた。

2. 面接は作文を書き上げた順番に1人ずつ行なわれ、その他の者は室の外で自分の順番を待っている。面接者は室に入って来た被験者に対し、乱数表によるランダムな順序で受容的あるいは非受容的な面接を行なう。面接時間は約5分間、受容条件と非受容条件とで面接時間に差を生じないように留意した。

受容条件の場合：室に入って来た被験者から作文を受取り目を通す。次いで被験者の顔と作文とを交互に見ながら、「仲々面白い。君の考えはとても重要だと思ふ。こういう考え方をする人がこれからどんどん増えていかなければだめだ。良い資料が得られて感謝しています。」と云う。面接者の上述の言葉の途中あるいは後で被験者の方から話す場合は、面接者は余計な言葉を云わぬよう注意しながら「うん、うん、」と相づちをうつ。最後に大型封とうと質問票（相手の魅力についての尺度、知覚された受容の程度についての尺度、感想欄から成っている。）を手渡し、この質問票に別室で記入して封とうに入れ、封をして指定された箱に入れるように云う。また、この質問票は大学の別の先生だけが見るのであって、面接者も見ることはいかならない旨聴調する。これは、面接者に対する魅力の程度等を記入する際、被験者が防衛的態度で記入せぬようにとの理由からである。尚、受容条件にあっては、面接

中面接者は常に微笑を絶やさぬよう留意する。

非受容条件の場合：入って来た被験者から作文を受取り目を通す。しばらく沈黙した後、「こういう考えはありふれている。もう少し何とか書けないのか。それに字がまちがっている。（あるいは字が汚ない）。（少し間をおいて）まあいいでしょう。」と云う。面接者の上述の言葉の中途あるいは後で被験者が弁解あるいは説明を試みても無視する。ついで大型封とうと質問票を手渡し、受容条件の場合と同様の説明をする。尚、面接中面接者は常に厳しい顔つきを保つよう留意する。

3. 被験者は封とうと質問票を持って別室に行き、質問票に記入し、封とうに入れ封をし、指定された箱に入れて帰る。被験者は後日実験目的その他についての説明を受けた。

〈変数の操作及び測定尺度〉

1. 受容、非受容

この実験においては1対1の面接状況の際にとられる面接者の被験者に対する態度によって操作された。受容条件の場合には、面接者は被験者の意見に積極的な興味を示し、それを承認し、その重要性を認めるような発言がなされた。尚その際、相手の顔をできるだけ見ること、及び微笑を絶やさぬことに留意された。又、非受容条件の場合には、面接者は相手の意見に興味を示さず、積極的に承認せず、その重要性を認めないような発言がなされた。尚その際、微笑を浮かべぬ厳しい顔を保つよう留意された。この実験においては1人の面接者が全被験者を面接した。この実験を通じて受容、非受容の変数の操作、分離がうまくいったかどうかは、「知覚された受容」尺度によって後程確認された。発言内容その他については〈手続き〉の項を参照されたい。

2. 自己評価

Dymond (1954) の適応score の項目を参考にし、自己に対する肯定的あるいは否定的態度を表わしていると思われる12項目（7ポイントで評定）をもって尺度を作った。そして項目分析の結果10項目の得点の合

注1) この研究においては、自己評価尺度、魅力尺度、知覚された受容の尺度の3尺度とも、尺度得点（各項目得点を合計したもの）と各項目得点との間の二系列相関係数（bi-serial correlation）を求め、それを Guilford (1954) の公式で修正し、1%以下のレベルで有意な項目をもって尺度を構成した。

計をもって自己評価得点とした。全被験者の自己評価得点の平均は42.78, 分散は61.09であった。この得点によって被験者を2群に分け, 高自己評価群(H), 低自己評価群(L)とした。

自己評価尺度の項目(項目分析の結果残ったもの)は次の通りである。

<自己評価尺度>

- ① 私はたいていの人に好かれる。
- ②* 私は自分をたよりないと感じる。
- ③ 私はいつも自分で決心をし, それをやり通す。
- ④ 私は落ち着きがある。
- ⑤* 私は自分の心が不安定だと感じる。
- ⑥ 私は何でも一生けんめいやる方である。
- ⑦ 私はおおらかな広い心の持主である。
- ⑧ 私は積極的な人間である。
- ⑨ 私は責任感が強い。
- ⑩ 私は自分自身に満足している。

* 逆点項目

3. 相手に感じる魅力

この研究においては「魅力」という言葉を, 相手に対する単なる評価としてではなく, 相手に対する接近回避, あるいは相手と接触を続けるかどうかという行動の傾性として考える。こういう意味における「相手の魅力」を測定する為に項目分析をすました5項目(7ポイントで評定)からなる尺度が用いられた。項目は次の通りである。

<魅力尺度>

面接した相手の人についてどう思いますか。

- ① 機会があれば1度ゆっくり話してみたいと思う。
- ② 機会があればこれからも来てほしいと思う。
- ③ 機会があれば個人的な相談をしたい。
- ④* 気があいそうにない。
- ⑤ これからこういう調査があればもう1度協力したい。

* 逆点項目

4. 知覚された受容

受容, 非受容の操作を被験者がどのように受取ったかを見るために「知覚された受容の尺度」が作られた。この尺度も項目分析をすました5項目(7ポイントで評定)で構成された。項目は次の通りである。

<知覚された受容の尺度>

面接をした相手の人は———

- ① あなたの考えに賛成しているように感じましたか。
- ② あなたの考えを重要なものと感じているように感じましたか。
- ③ あなたの考えを認めてくれたように思いますか。
- ④ あなたの考えに興味をもっているように見えましたか。
- ⑤ あなたに対して暖かい態度で接しているように見えましたか。

結 果

1. 被験者に受取られた受容の程度

まず, この研究においてただ1つ外的に操作された受容, 非受容の変数について, その操作が成功したかどうか検討されなければならない。

各条件ごとの, 知覚された受容に関する尺度の得点は Table 1 の通りである。これを岩原の「細胞の大きさ」が異なり, しかも周辺度数に比例しない場合」

Table 1
知覚された受容の程度

操 作	受 容		非 受 容	
	H	L	H	L
自己評価				
被験者数	17	17	16	15
平 均	28.1	26.7	21.8	18.1
分 散	21.56	16.19	20.57	30.72

Table 2
Table 1 の分散分析

変 動 因	SS	df	MS	F ₀
操 作 (1)	55.51	1	55.51	40.82**
自己評価(2)	6.51	1	6.51	4.79*
(1) × (2)	1.31	1	1.31	—
e	82.84	61	1.36	

64

** 1%レベルで * 5%レベルでそれぞれ有意

(岩原 (1957) P.298) のモデルに従って分散分析した。その結果が Table 2 である。受容, 非受容の操作については1%レベルで, 自己評価の高低については5%レベルで有意な効果が見られる。

以上の結果, 受容, 非受容の操作が成功したことが被験者の知覚のレベルで確認され, 又, その知覚の仕方に自己評価の高低によって差がある(自己評価の高い人は低い人に較べて受容されたと感じやすい) ことが示された。

2. 对人的魅力

相手の魅力についての結果は Table 3 の通りである。これを先述の岩原のモデルに従って分散分析すると(各条件間の分散の差が有意でないことはパートレット法により確かめられた), 受容, 非受容の操作, 及び自己評価の高低がいずれも1%レベルで有意な効

Table 3
相手に感じる魅力

操 作	受 容		非 受 容	
	H	L	H	L
自己評価				
被験者数	17	17	16	15
平 均	26.1	23.1	23.4	19.0
分 散	17.38	11.05	30.76	36.93

Table 4
Table 3の分散分析

変 動 因	SS	df	MS	Fo
操 作 (1)	11.56	1	11.56	7.97**
自己評価(2)	13.69	1	13.69	9.44**
(1) × (2)	0.49	1	0.49	—
e	88.43	61	1.45	

64

**1%レベルで有意

果を持っていた。すなわち, 受容された場合は受容されなかった場合に較べて相手により多くの魅力を感じ, 又, 自己評価の高い人は低い人に較べて相手により多くの魅力を感じるということが示された。しかし Dittes の仮説から期待されていた 兩要因間の相互作用

用は見られなかった。

ここで, 受容, 非受容の「操作」の代りに「知覚」された受容の程度を要因として考えて(知覚された受容に関する尺度の得点によって被験者を3分し, 高受容群, 中受容群, 低受容群の3群を作る) データを解釈しようとして試みた。その結果が Table 5 である。パートレット法で分散の等質性を検討した後分散分析した。Table 6 に示されているように, 受容, 非受容

Table 5
受容の知覚を要因とした場合の对人的魅力

受容の知覚	H		M		L	
	H	L	H	L	H	L
自己評価						
被験者数	12	10	12	7	8	16
平 均	25.7	25.5	25.0	21.7	21.9	19.1
分 散	25.34	17.45	23.33	4.25	9.52	37.07

Table 6
Table 5 の分散分析

変 動 因	SS	df	MS	Fo
受容の知覚(1)	26.13	2	13.07	5.27**
自己評価(2)	6.61	1	6.61	2.67
(1) × (2)	2.77	2	1.39	—
e	146.55	59	2.48	

64

**1%レベルで有意

の知覚だけが有意な効果を持っていた。すなわち, 受容されたと受取った人はそうでない人より相手に対して魅力を感じる, ということが示された。操作を要因として分析したときには1%レベルで有意であった自己評価の要因の効果が, 知覚を要因とした場合消えてしまうという事実は興味深い。

考 察

結果に明らかなように, 本研究においては相手に感じる魅力に対して, 受容, 非受容の要因と自己評価の要因とが別々に効果を持ち, 兩要因間の相互作用は見

られなかった。この結果は Dittes (1959a) (1959b) の研究から引き出された3つの仮説、すなわち①受容された場合は受容されない場合より相手に対し魅力を感じる。②自己評価の低い人が相手から受容された場合、自己評価の高い人が受容された場合より相手に対し魅力を感じる。③自己評価の低い人が相手から受容されなかった場合、自己評価の高い人の場合より相手に感じる魅力が少ない。の中の②を否定するものであった。そして又、彼の実際結果(受容された場合、その集団に対する魅力は自己評価の高低で有意な差はなかった)とも若干くいちがう。

この2つの実験結果に見られるくいちがいに関してまず両研究における「自己評価」、「受容」及び「魅力」という概念の内容、操作を比較してみなくてはならない。

自己評価測定の手続きは Dittes の場合実験前後の自己評価及び実験中の他者からの評定の3つの得点をプラスしたものであった。この3つの評定の中、実験前になされた適応感及び自己評価に関する項目を用いての評定が本研究における測定と内容的操作的に類似しているだけである。しかし Dittes は3つの得点が互いに高い相関をもっていたからこそ合計して1つの得点としたのであるから、実験前の評定が本研究での評定と基本的に同じものを測定しているとしたら、自己評価について高低2群、あるいは高、中、低3群を作る際、両研究の測定によってそう大きな差異が生じるとは考えられない。

次に「魅力」について考えてみれば、Dittes の場合①もしもう1度招かれるような場合、このグループで仕事をしたいと思いませんか。それとも、もうこのグループに参加するのはいやですか。②この実験に参加することをどの程度好みますか。③もし実験者がこのセッションの記録を調べた後再びこのグループが招かれる場合、あなたが除外されていたとしたらどの位失望を感じるでしょうか。の3項目で測定された。これを本研究において用いられた項目と較べてみるならば、受容してくれた、あるいは受容してくれなかった相手あるいは相手達と今後も接触を続けたいという気持がどの程度強いものかということ測定している点において基本的に変わりはないと思われる。それ故、この「魅力」の測定のくいちがいが2つの研究結果の間に見られるくいちがいを生んだとは考えられない。

最後に「受容」についてであるが、これは Dittes

の場合「その討議集団の成員としての望ましき」について他の成員が行なった評定を見せられる、というものであったのに対し、本研究の場合、自分の将来の希望に相手が興味を示し、その考えに賛同し、その重要性を認めるというものであった。この2つの「受容」を較べてみるとその内容がかなり異なっているように考えられるが、どちらも「自己の重要性が他の人に認められる」という点では共通であると考えられる。結果から見ても、どちらの「受容」であっても受容された場合今後その相手(達)と接触を続けたいと表明し、受容されない場合は接触を続けることに消極的な気持を表明するという基本的な機能は同一なのであるから、この「受容」の差異から結果の差異を説明することは困難であろう。

では両実験で何が異っていたのであろうか。種々の違いをあげることができであろうが、主要なものは次の2つの状況の違いであろう。すなわち、①2人関係であるか5人あるいは6人の集団であるかの違い。②目上の人から受容されるのか仲間から受容されるのかという違い、である。しかしこの2つの違いが果して両研究の結果の間のくいちがいをもたらす原因になったかどうかは現在までの諸研究のデータでは、はっきりとしないので、今後の研究に待ちたい。2者関係のプロセスと5人あるいは6人の小集団のプロセスの異同についての研究、状況及び自己評価のレベルと自我防衛的反応の間の関係についての研究等が進められてゆけば問題点も明らかになってゆくものと思われる。

以上 Dittes の実験結果とのくいちがいについて若干の考察をしてきたわけであるが、ここで彼の仮説及びその前提となっている考え方に少しばかり検討を加えたい。

本実験では、自己評価の低い人が相手から受容された場合、自己評価の高い人の場合より相手に対し魅力を感じる、という仮説は支持されず、これと逆の結果が得られた。この事実からこの仮説の前提となった考え方、すなわち①自己評価は受容に対する欲求の程度を表わしている。②受容に対する欲求が強ければ強い程受容された場合受容してくれた人達に魅力を感じ、受容されなかった場合その相手の人達から離れてゆこうとする。の2つの考え方が検討されなければならない。本研究の実験結果が仮説2を否定しているところから考えれば、この2つの前提の中少なくとも共1つは誤りであるか、あるいは他の限定条件を付けること

によってのみ成り立つものである。

Dittes は自己評価の低い人の方が高い人より自己評価のレベルを上げたいという欲求が強いとして、自己評価のレベルを上げるのに役立つ他者からの受容をより強く望むとしたわけであるが、自己評価の低い人は又同じ理由で他者から拒否されることをより強く恐れると思われる。それ故状況によっては、他者から受容されても真に受容されたとは受取らず、相手に対する警戒心を持続けるということも考えられる。又、受容されたと感じた場合でも、対人関係が続けば拒否される可能性もあるとしてそれ以後の対人関係を続けることを望まないかもしれない。このように考えてゆけば、Dittes の考え方を生かすためには多くの限定条件が必要であることが明らかになってくる。具体的にどのような条件を考えなければならないかについては今後の研究に待ちたい。

では Dittes の考え方を離れて、本研究の結果を総合しようとすればどうなるであろうか。本研究の結果を総合し図式化したのが Fig. 2 である。この図式を簡単に説明すれば、受容されたか受容されなかったかという状況の知覚に対して自己評価のレベルが影響を与え、その知覚された受容の程度によって相手に感じ

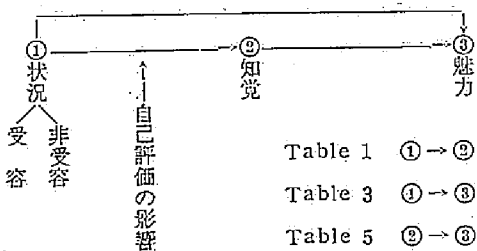


Fig. 2. 本研究の実験結果の総合と解釈。

る魅力が決定される、ということである。このような結果から、自己評価の低い人は相手から受容されなかったと感じやすく、その結果相手に魅力を感じるものが少なく、従って又、相手からも受容されにくく、そして一層受容されなかったと感じ……という悪循環をくりかえして、だんだん対人関係において不適応になってゆくことが予想される。自己評価と他者に対する態度との間の相関が高いという事実もこれによって説明できると思われる。

以上のように本実験の結果から見ると、自己評価のレベルは他者と自己との関係を認知する際の一定の偏

りをもたらすもの、すなわち自己を包みこんでいる状況を認知する際の1つの枠組として働いているものとして考えることができる。どのように枠組が機能しているかの詳細は今後の研究に待たねばならないが、一つの方向として、自己評価のレベルと他者が自己に対してどのようにふるまうだろうという予想あるいは期待との関係、又、その期待が満たされた場合、満たされなかった場合の反応について研究を進めることでこの問題が明らかにされるのではないかと考えられる。

要 約

2者関係において、相手から受容されたり受容されなかったりする際、自己評価のレベルによって相手に対する反応がどのように異なるか、という問題について実験が行なわれ、その結果の解釈について若干の考察がなされた、そして、自己評価のレベルは状況の受取り方の枠組を形作っているものとする考え方が示された。

実験結果は次の通りである。

- ①操作された受容、非受容と被験者の自己評価のレベルがどちらも相手に感じる魅力の程度に対して効果を持つ。すなわち、受容された場合は相手に魅力を感じ、又自己評価の高い人の方が相手に魅力を感じやすい。尚、両要因間の相互作用の効果は見られなかった。
- ②受容されたと感じるかどうかがという受取り方は自己評価のレベルによって影響を受ける。すなわち、自己評価の高い人は受容されたと感じやすい。
- ③自己評価のレベルに関係なく、受容されたと感じた人は相手に対して魅力を感じやすい。

文 献

Berger, E.M. 1952 "The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others." *J. abnorm. soc. Psychol.*, 47, 778-782.
 Cartwright, D., & Zander, A. 1953 "Group cohesiveness: Introduction." In D.

- Cartwright & A. Zander (Eds.), *Group dynamics*. Evanston: Row, Peterson, 73—91.
- Deutsch, M., & Solomon, L. 1959 "Reaction to evaluations by others as influenced by self-evaluations." *Sociometry*, 22, 93—112.
- Diller, L. 1954 "Conscious and unconscious self-attitudes after success and failure." *J. Pers.*, 23, 1—12.
- Dittes, J. E. 1959 "Effect of changes in self-esteem upon impulsiveness and deliberation in making judgments." *J. abnorm. soc. Psychol.*, 58, 348—356. (a)
- Dittes, J. E. 1959 "Attractiveness of group as function of self-esteem and acceptance by group." *J. abnorm. soc. Psychol.* 59, 77—82. (b)
- Dymond, R. F. 1954 "Adjustment changes over therapy from self-sorts." Rogers, C. R., & Dymond, R. F. (Eds.)-*Psychotherapy and Personality Change*. Chicago: University of Chicago Press, 76—84. (伊藤博訳「自己分類法によって検討した治療による適応の転換」ロージャース選書第5巻「人格転換の心理」岩崎書店、1962、第5章 P.91~108)
- Fey, W. F. 1954 "Acceptance of self and others, and its relation to therapy readiness." *J. clin. Psychol.*, 10, 269—271.
- Guilford, J. P. 1954 *Psychometric Methods*, New York: McGraw-Hill, (秋重發治監訳「精神測定法」培風館 1959)
- Harvey, O. J. 1962 "Personality factors in resolution of conceptual incongruities." *Sociometry*, 25, 336—352.
- Harvey, O. J., Kelley, H. H., & Shapiro, M. M. 1957 "Reactions to unfavorable evaluations of the self made by other persons." *J. Pers.* 25, 393—411.
- 岩原信九郎・1957「教育と心理のための推計学」日本文化科学社
- Jones, E. E., Gergen, K. J., & Davis, K. E. 1962 "Some determinants of reactions to being approved or disapproved as a person." *Psychol. Monogr.*, 76, (2 Whole No. 521) 17. Maehrer, M. L., Mensing, J., & Nafziger, S. 1962 "Concept of self and the reaction of others." *Sociometry*, 25, 353—357.
- Stock, D. 1949 "An investigation into the intercorrelations between the self-concept and feelings directed toward other persons and groups." *J. consult. Psychol.*, 13, 176—180.
- Williams, J. E. 1962 "Acceptance by others and its relationship to acceptance of self and others: A repeat of Fey's study." *J. abnorm. soc. Psychol.* 65, 438—442.
- Wylie, R. C. 1961 *The Self Concept — A critical survey of pertinent research literature*, Lincoln, Neb: University of Nebraska Press,

第2章

自己評価と自己のパフォーマンスの評価

—他者に感じる魅力を規定する要因として—

国立教育研究所¹

梶 田 敏 一

自己をどの程度肯定的に見ているかという自己評価と、他者に対する一般的な肯定的否定的態度との間の関係について、Scheerer (1949), Stock (1949), Phillips (1951), Berger (1952) 等は、心理療法の過程にある患者および正常人において、両者の間に正の相関を見出している。このことは、自己を肯定的に見ている人は一般的に他者に対しても肯定的であり、逆に、自己を否定的に見ている人は一般的に他者に対しても否定的である、という関係を示すものである。さらに Fey (1955) は、自己評価と他人受容、自己評価と他者からの受容の推測 (estimated acceptance by others) の間にはそれぞれ高い正の相関があるのに、自己評価と他者からの実際の受容 (actual acceptance by others) の間の相関が低い、すなわち、自己評価の高い人は他者を肯定的に見ているという傾向があり、また他者からも受容されていると感じているが、他者からの実際の受容との関係はあまりないということを見出している。

これらの諸研究によって、個人の自己評価と他者に対する一般的な態度との間の密接な関係が明らかにされてきた。しかし、何故そのような関係が見られるのか、そこにはどのようなメカニズムが存在するのか、という点については必ずしも明らかでない。他者に対する好意的あるいは非好意的感情は、その他者との相互作用の結果と考えられる。それならば、この社会的相互作用の中で個人の自己評価がどのような役割を果たしているかを明らかにすることによって、自己評価と他者に対する態度との間に密接な関係をもたらすメカニズムについて明らかにすることができるのではなからうか。現実の社会的相互作用は、個人Aが個人Bに何らかの働きかけを行ない、その働きかけに対してBがAに反応し、その反応にAが反応し……という相互規定的、往復の反応のプロセスとして考えられるが、本稿では一方からの働きかけに対し他方がどのように受取り、反応するか、という点に

限って考察したい。

他者からの働きかけに対して反応する際、個人の自己評価がどのような役割を果たすかについて考察したものに Dittes (1959) の研究がある。彼は、集団から受容された場合、人は集団に魅力を感じ、また拒否された場合魅力を低くするという傾向があるが、この傾向は自己評価の低い人に著しいだろう、という仮説を検証するために実験的研究を行なった。そしてこの仮説は集団から拒否される条件において支持された。筆者 (梶田, 1966) は先にこの Dittes の仮説における集団を他者に置きかえ、2者関係においてこの仮説を検討した。その結果、この仮説は少なくとも相互に年齢、立場の異なる2者の関係には妥当しないことを明らかにした。そして、むしろ他者からの働きかけを認知する際自己評価を確認するような認知の仕方をし、その認知された内容に応じて反応するというプロセスによって自己評価が他者に対する反応を規定してゆく、と考えた方がよいのではないかという示唆をした。自己評価が他者からの働きかけを認知する仕方に影響し、その認知された内容に従って他者に対する態度を形成、変容させると考えるならば、先述の諸研究で得られた自己評価と他者に対する態度の間の相関関係は、社会的相互作用において他者からの働きかけを認知する際に生じる自己評価の高い人と低い人との差異を反映したものと考えられることができる。この点については後で検討する。

ところで、自己評価が他者からの受容・拒否、承認・非承認、高い評価・低い評価等の働きかけに対する反応をどのように規定しているかを検討する際、自己評価と密接な関係を持っているものとして、他者からの承認、評価等の対象となる自己の特定のパフォーマンス (仕事の結果、業績)、所有物等々に対する自己の評価についても考慮しなくてはならない。自己の全属性に対する全体的評価としての自己評価が、特定の状況を越えた1つの性格特性として考えられるのに対し、特定の状況において問題となる自己の特定のパフォーマンスや所有物等

¹ 本研究は、筆者が京都大学大学院に在籍中に行なったものである。

に対する自己の評価は、その時々状況に規定されるところの大きいものとして考えられる。確かに、James (1891) も指摘するように、自己そのものに対する評価と、自己のパフォーマンスや所有物等に対する評価とは深い関連を持ち、後者が前者の形成、変容に影響し、また前者も後者を規定していると考えられるが、問題を明確にするためには両者を区別して問題とすべきである。

他者が自己のパフォーマンスについて批評する場合、自己のパフォーマンスについての他者の評価と、自己がそのパフォーマンスに対して持っている評価とは Festinger (1957) 等の述べる2つの認知的要素として考えることができる。複数の認知的要素相互の間の均衡・不均衡、一致・不一致を問題としたいいわゆる認知的均衡モデルとしてこれまでいくつかの理論が提出されてきた。これらの理論によると、相互に関連した認知的要素相互間の不均衡や不一致は心理的に不快であるから、この不均衡を低減し均衡を獲得するよう人は動機づけられ、また人は不均衡を増大させられると思われる状況や情報を回避しようとする。こういう考え方からすれば、自己のパフォーマンスに対する他者からの批評を認知する際自己の評価と一致するように認知する傾向があり、認知された自他の評価の食い違いが大きい場合その状況を回避しようとする傾向があり、従ってその他者をも回避する傾向があると考えられる。

以上述べてきたところを中心として次のような仮定を立てる。

仮定 I-a: 人は自己評価を確認するような認知の仕方をする。すなわち、他者からの働きかけを認知する際自己評価のレベルを投影して認知する。

仮定 I-b: 他者からの評価がどの程度であったかという認知に応じて他者に感じる魅力が決定される。

仮定 II-a: 人は自己のパフォーマンスに対する自他の評価の食い違いが小さくなるように他者からの評価を認知する。

仮定 II-b: 自己のパフォーマンスに対する自他の評価の食い違いが小さければ他者に魅力を感じ、大きければ小さな魅力しか感じない。

仮定 II-c: 自己のパフォーマンスに対する他者の評価が自己の持っている評価より上であれば受容されたと感じて他者に魅力を感じる。自己の持っている評価より下であれば受容されなかったと感じ、他者に感じる魅力が小さい。

本報告では以上の仮定を3つの実験において検討する。なお、自己評価および自己のパフォーマンスの評価が他者からの働きかけの受取り方およびそれに対する反応にどのような効果を及ぼしているかを見るために、他者からの働きかけ以前に評定された自己評価および自己のパフォーマンスの評価の尺度得点と、働きかけの後に

評定された各尺度の得点との間の相関を用いる。自己評価および自己のパフォーマンスの評価が各従属変数に対して持つ効果が直線的であると仮定するなら、自己評価および自己のパフォーマンスの評価と各従属変数との間の相関関係の有無によってその効果の有無を見ることが出来る。また相互に密接な関係を持つと思われる自己評価の効果と自己のパフォーマンスの評価の効果とを区別して問題とするために、自己のパフォーマンスの評価を恒常にした場合の自己評価と各従属変数との偏相関、および、自己評価を恒常にした場合の自己のパフォーマンスの評価と各従属変数との偏相関を求めて論ずることにする。

実験 I

目的

他者からの働きかけについて種々の受取り方が可能な場合、自己のパフォーマンスについてなされた他者からの評価の認知、およびその他者に感じる魅力、自己評価および自己のパフォーマンス評価の要因がどのように規定しているかについて検討する。

実験仮説

(1-1): 他者から高い評価を受ける受容条件においては他の他者に大きな魅力を感じ、低い評価を受ける非受容条件においては他の他者に感じる魅力が小さいだろう。

(1-2): 受容、非受容両条件において、自己評価の高い人ほど他者から高く評価されたと認知するだろう。

(仮定 I-a より)

(1-3): 受容、非受容両条件において、自己評価の高い人ほど他者に魅力を感じるだろう。(仮定 I-a, I-b より)

(1-4): 受容、非受容両条件において、自己のパフォーマンスの評価が高い人も低い人も、他者からどの程度評価されたと認知するかに関しては明らかな差がないであろう。(仮定 II-a より自己のパフォーマンスを高く評価している人は他者から高い評価を受けたと認知する傾向があると考えられるが、また仮定 II-c より自己のパフォーマンスを高く評価している人は他者から高く評価されなかったと感じやすい。これら2つの傾向が互いに他の傾向を打消すように働らくと考えられる。)

(1-5): 受容条件では自己のパフォーマンスを高く評価している人の方がいくぶん他者に魅力を感じやすく、非受容条件では自己のパフォーマンスを低く評価している人の方がいくぶん他者に魅力を感じやすいだろう。(実験仮説 1-4 で述べたように、仮定 II-a と II-c とから自己のパフォーマンスの評価と他者からどのように評価されたと認知するかということの間には明らかな関係はみられないだろう。その限りでは自己のパフォー

ンスの評価と他者に感じる魅力との間にも明らかな関係は見られないだろうと考えられるが、仮定 II-b より、受容条件では他者からの評価が高い故、自己のパフォーマンスを高く評価しているの方が自他の評価の食い違いが小さくなり、従って他者に魅力を感じやすく、非受容条件では自己のパフォーマンスを高く評価している人は自他の評価の食い違いが大きくなり、他者に魅力を感じる事が少なくなると考えられる。しかし、仮定 II-a, II-b, II-c の効果の相対的強さが異なっているだろうから、はっきりした傾向は見られないだろう。

方法

被験者 高校1年生男子 90 名。

手続き 自己のパフォーマンスの評価として自己の書いた作文に対する評価を用い、その作文の評価をめぐる自他の相互作用状況を作る。この実験では被験者より年長の初対面の人(大学院生)が面接において口頭であまいな表現を用いてその作文を評価する。

実験は次の順序で行なわれた。①「私の理想」という題での作文(30分間)。②「自己評価」および「自己の書いた作文の評価」の尺度の評定。③別室で個別に受容的(作文に対して高い評価を受ける)あるいは非受容的(低い評価を受ける)な面接(約2分間)。④「面接者に感じる魅力」、「自己の書いた作文の評価」および「認知された受容」の尺度の評定。

面接は名簿の順に行なわれた。被験者は同一の面接者からランダムな順番に受容的あるいは非受容的いずれかの面接を受ける。受容条件と非受容条件とで面接時間に差を生じないように留意された。受容条件の場合、面接者は部屋に入って来た被験者から作文を受取り目を通してから、「なかなか面白い、こういう考え方をする人がこれからどんどん出てこなくてはだめだ」という。そして「何かこの作文につけ加えたいことはありませんか」とたずねる。面接者の発言の途中あるいは後で被験者が話し出す場合は、余計な言葉を差しささないよう注意しながら相づちをうつ。非受容条件の場合、面接者は被験者から作文を受取り目を通す。しばらく沈黙した後「こういう考えはありふれている。もう少し他に何か恐くことはなかったのですか。」という。そして「何かこの作文につけ加えたいことはありませんか。」とたずねる。面接者の発言の中途あるいは後で被験者が弁解や説明を試みても無視する。

この実験で用いられた測定尺度については次の通りである。「自己評価」の尺度は Dymond (1954) の適応スコアの項目を参考にし、自己に対する肯定的、否定的態度をあらわしていると思われる「私は自分自身に満足している」「私の将来は明るいものだと思う」等 20 項目をもって尺度を構成した。この尺度と先に筆者(梶田, 1966) が用いた 10 項目からなる自己評価尺度との相関は $r =$

TABLE 1

受容、非受容の効果(実験 I)

条 件	受 容	非 受 容	
"	44	46	
受容の認知	22.2 ($S^2=12.3$)	12.0 ($S^2=15.8$)	***
他者の魅力	32.4 ($S^2=13.0$)	26.4 ($S^2=60.0$)	***
作文評価の変動値	+0.98 ($S^2=10.5$)	-2.70 ($S^2=17.6$)	***

*** 条件差 0.1% レベルで有意

TABLE 2

受容条件における変数間の相関(実験 I)

	作 評	認 知	魅 力	作 評 差
自 評	0.408**	0.565***	0.225	0.006
作 評		0.453**	0.156	-0.329*
認 知			0.348*	0.110
魅 力				0.207

ただし、自評：自己評価、作評：自己の作文の評価、認知：他者からの受容の認知、魅力：他者の魅力、作評差：作文評価変動値

*** 0.1% レベルで ** 1% レベルで * 5% レベルで、それぞれ有意

TABLE 3

非受容条件における変数間の相関(実験 I)

	作 評	認 知	魅 力	作 評 差
自 評	0.406**	0.348*	0.332*	0.347*
作 評		0.163	0.061	-0.066
認 知			0.290	0.323*
魅 力				0.014

** 1% レベルで * 5% レベルで それぞれ有意

0.901 ($n=84$) であった。なお、この実験で用いた尺度は全て尺度得点と各項目得点との間の二系列相関係数を求め、それを Guilford (1954) の公式で修正し、1% 以下のレベルで有意な項目をもって尺度を構成した。いずれの項目も 7 ポイントで評定する。「自己の作文の評価」の尺度は「他の人に自信をもって示したいと思う」「すぐれたものだと思う」等 7 項目で構成された。「他者に感じる魅力」の尺度については、「魅力」ということを他者に対する接近一回避、あるいは他者と今後接触を続けるかどうかという行動の傾性として考え、「機会があればゆっくり話してみたい」「何か面白いことがある時にはさそいたい」等 7 項目で尺度を構成した。「認知された受容」の尺度については「あなたの考えを重要なものと感じているようでしたか」等 4 項目が用いられた。

結果と考察

受容、非受容の面接の効果 Table 1 に示されているように、他者からどのように評価されたと認知したかということに関しても、他者に感じる魅力に関しても、また自己の作文評価の変動値（面接後の値—面接前の値）に関しても条件間に有意差があった。このことから被験者違が実験者の意図したように各条件を受取ったことは明らかである。また受容された場合はその他者に大きな魅力を感じ、受容されない場合は小さな魅力しか感じないという結果が得られたが、これは実験仮説 I-1 を支持するものである。

自己評価の効果 自己評価、自己の作文の評価、他者からの受容の認知、他者に感じる魅力、および自己の作文評価の変動値、相互の間の原相関係数は Table 2, Table 3 に示されている。自己評価と自己の作文の評価との関係は予想通り強い、自己の作文の評価を恒常にした場合の自己評価と他者からの受容の認知との偏相関は受容条件で 0.467 (1% レベルで有意) 非受容条件で 0.312 (5% レベルで有意) であり、自己評価と他者に感じる魅力との偏相関は受容条件で 0.212 (N.S.) 非受容条件で 0.336 (5% レベルで有意) であった。これらの結果は、自己評価の高い人ほど他者から高く評価されたと受取りやすいという仮説 1-2 を支持するものであり、また、受容条件における偏相関の値がやや低かったが、自己評価の高い人ほど他者に魅力を感じやすいという仮説 1-3 を一応支持するものと考えられる (Table 10 を参照)。

自己のパフォーマンス評価の効果 自己評価を恒常にした場合の自己の作文の評価と他者からの受容の認知との偏相関は、受容条件で 0.295 ($0.10 > p > 0.05$) 非受容条件で 0.026 であった。この他者からの受容の認知には自己のパフォーマンス評価のレベルの投影という仮定 II-a の効果と自己のパフォーマンス評価のレベルを基準として認知するという仮定 II-c の効果が互いに他を打消しあうように機能すると仮説 1-4 で考えられたが、受容条件では仮定 II-a の効果が相対的に強かったと考えられる。自己の作文の評価と他者に感じる魅力との偏相関は受容条件で 0.059, 非受容条件で -0.086 であった。この結果は仮説 1-5 を否定するものではないが、この結果のみから仮説の背後にある仮定 II-a, II-b, II-c を積極的に実証することはできない。(Table 11 を参照)

実験 II

目的

他者からどのように働きかけられたかについて解釈の余地が小さい場合、自己のパフォーマンスを評価した他者に感じる魅力、自己評価および自己のパフォーマンスの評価の要因がどのように規定しているかについて検

討する。具体的には、対面状況で相互作用する場合と、この実験のように尺度上に記入した評点を見せられることによって間接的に相互作用する場合とでどのような差異が生じるかを、実験 I の結果と比較することによって検討する。

実験仮説

(2-1): 他者から受容されればその他者に感じる魅力を高め、受容されない場合その他者に感じる魅力を低めるだろう。

(2-2): 受容、非受容両条件において、自己評価は他者に感じる魅力に影響しないだろう。(仮定 I-a, および I-b より、他者からどのように働きかけられたか解釈の余地の少ない場合、自己評価が効果を及ぼす余地も少ないと考えられる。)

(2-3): 受容条件においては自己のパフォーマンスの評価と他者に感じる魅力との間にははっきりした関係はないだろう。非受容条件においては自己のパフォーマンスを高く評価している人の方が他者に感じる魅力を低くしやすいだろう。(他者からどのように働きかけられたかについて解釈の余地が少ないのであるから仮定 II-a の効果は他の効果に較べて小さいと考えられる。仮定 II-b より受容条件では自己のパフォーマンスを高く評価している人の方が他者に魅力を感じやすく、非受容条件では自己のパフォーマンスを低く評価している人の方が他者に魅力を感じやすい。一方仮定 II-c より受容、非受容両条件において、自己のパフォーマンスを低く評価している人の方が他者に魅力を感じやすい。受容条件では2つの傾向が打消す方向に働き、非受容条件では同方向に働く故上述のような仮説となる。)

方法

被験者 高校1年生男子 37 名。

手続き 実験 I 同様自己のパフォーマンスの評価として自己の書いた作文の評価を用い、その作文の評価をめぐる自他の相互作用状況を作る。この実験では被験者より年長の初対面の人 (大学院生) が尺度上に記入した評点を見せることによってその作文を評価する。

実験は次の順序で行なわれた。①「私の理想」という題での作文 (30 分間)。②実験者 1 が自己紹介の後、作文を評価するためと称して被験者達の作文を別室に持ってゆく。実験者 2 は被験者達に、実験者 1 についての第 1 印象に基づいて「他者 (実験者 1) に感じる魅力」を評定するよう求める。③「自己評価」および「自己の書いた作文の評価」の尺度の評定。④鉛筆の使い道について「書く」以外のどのような使い道があるか出来るだけ多く書く、という課題を行なう (30 分間)。⑤実験者 1 が各被験者の作文を 4 項目について評価した紙を各被験者に配る。(各被験者はランダムに高い評価あるいは低い評価を与えられている)。⑥「他者 (実験者 1) に感じ

る魅力」「自己の書いた作文の評価」の尺度の評定。

この実験では被験者の作文を4項目（重要か否か、すぐれたものか否か、興味深いものか否か、ありふれたものか否か）について7段階で評価した紙を見せることによって、受容非受容の操作がなされた。この評価は偽のものであって、受容条件の人には6, 7, 6, 6, (ただし、各項目の評点は1-7であり、最も重要、すぐれた、興味深い、ありふれていない、の評点を7とする), 非受容条件の人には、4, 3, 3, 3, の点数が与えられた。

自己評価、自己の作文の評価、他者に感じる魅力、を測定する各尺度は実験Iと同じものである。

結果と考察

受容、非受容の操作の効果 Table 4 に示されているように、他者に感じる魅力の変動値（操作後の値-操作前の値）にも作文評価の変動値にも条件差があった。受容条件ではそのような働きかけをした他者に感じる魅力が高くなり、非受容条件では低くなるという結果が得られたが、これは実験Iの結果と一致するものであり、また仮説 2-1 を支持するものである。

自己評価の効果 実験操作前に測定された自己評価、自己の作文の評価および他者に感じる魅力の3変数と自己の作文評価変動値および他者に感じる魅力の変動値相互の間の原相関係数は Table 5, Table 6, に示されている。自己の作文の評価（前）および他者に感じる魅力（前）を恒常にした場合の、自己評価と他者に感じる魅力の変動値の間の偏相関は受容条件で-0.316, 非受容条件で-0.049 であった。仮説 2-2 からはこの偏相関が0に近いことが期待される。従って非受容条件では仮説が支持されたものと考えられる。しかし、-0.316 という値は α が小さいため有意ではないが、人から受容られた場合自己評価の低い人の方が他者に感じる魅力を高くしやすい、という関係を説明する新しい機能を考えなくてはならないかもしれない。実験Iと実験IIの結果を総合的に考えれば、他者からの働きかけの内容について解釈の余地を小さく制限すると、自己評価と他者に感じる魅力との相関が負の方向へ変化したのであるから、人は自己評価を確認するような認知の仕方をするという仮定 I-a は支持されたものと考えられる。(Table 10 を参照)

自己のパフォーマンス評価の効果 自己評価と他者に感じる魅力（前）を恒常にした場合、自己の作文の評価（前）と他者に感じる魅力の変動値との偏相関は受容条件で 0.262, 非受容条件で 0.154 であった。仮説 2-3 からはこの偏相関係数が受容条件では0に近く、非受容条件では負になることが期待される。従ってこの仮説は支持されていない。この場合、次の3つの可能性が考えられるであろう。すなわち、①仮説を引き出した仮定が誤っていた。②仮定は誤っていないが、この実験状況で

TABLE 4
受容、非受容の効果 (実験II)

条 件	受 容	非 受 容	
"	19	18	
他者の魅力変動値	+4.26 ($S^2=30.1$)	-1.94 ($S^2=29.2$)	***
作文評価の変動値	+1.42 ($S^2=11.9$)	-4.94 ($S^2=35.4$)	***

*** 0.1% レベルで条件差有意

TABLE 5
受容条件における変数間の相関 (実験II)

	作 評	魅 力 (I)	魅 力 差	作 評 差
自 評	0.265	-0.002	-0.147	0.017
作 評		0.006	0.099	-0.538*
魅力(I)			-0.809***	-0.072
魅力差				-0.134

ただし、魅力(I)：他者の魅力（操作前）

魅力差：他者の魅力の変動値

*** 0.1% レベルで * 5% レベルで それぞれ有意

TABLE 6
非受容条件における変数間の相関 (実験II)

	作 評	魅 力 (I)	魅 力 差	作 評 差
自 評	0.570*	-0.432	0.133	0.405
作 評		-0.305	0.211	-0.108
魅力(I)			-0.235	-0.210
魅力差				-0.142

* 5% レベルで有意

は仮定された機能以外の機能加っていた。③実験状況が不自然なため結果が混乱した、の3つである。ここではそのいずれであるかの結論を出すことをせず、実験IIIの結果を見た上で、3つの実験結果の比較から結論を出すことにしたい。(Table 11 を参照)

実 験 III

目 的

他者からどのように働きかけられたかについて解釈の余地が小さい場合、自己のパフォーマンスに一定の評価を下した他者に感じる魅力、自己評価および自己のパフォーマンス評価の要因がどのように規定しているかについて検討する。特に、実験IIと異なり、評価される場合に伴う緊張が小さくなるように、友人同志評価しあうという状況を作り、そのような状況においても仮定から引き出された実験IIと同様の仮説が妥当するかどうかを検討したい。

実験仮説

実験Ⅱにおける仮説 2-1, 2-2, 2-3, と同じである。

方法

被験者 高校1年生男子 82名。

手続き 概要は実験Ⅱと同様である。ただ実験Ⅰおよび実験Ⅱでは評価を与える人が年長の初対面の人だったのに対し、この実験においては同じクラスで平常つきあっている友人である点が異なるので、それに伴って手続きも若干異なる。

実験は次の順序で行なわれた。①ランダムに同じクラスの2人を一組とし、互いに自分の相手の番号と名前を確認した後、組になっている2人は別れて別々の部屋に入る。②「私の理想」という題での作文(30分間)。③「自己評価」、「自己の書いた作文の評価」および「相手(他者)に感じる魅力」の尺度の評定。④2部屋に別れている相手同志で作文を交換し、相手の作文を5項目(実験Ⅱで作文の批評のために用いた重要か否か等4項目に相手の考え方に賛成か否か、という項目を加えたもの)について7段階で評定。⑤相手の作文についての評定を交換し、自分の作文についてなされた評定を見る。実際には途中ですりかえられて=セの評定を見せられる。各項目において評価の高い方を7とすれば、受容条件においては6, 6, 7, 7, 7, と、また非受容条件においては3, 3, 4, 3, 4, と評定されていた。

測定尺度については、自己評価および自己の作文の評価の尺度は実験Ⅰ, Ⅱと同じであるが、他者の魅力尺度

TABLE 7

受容, 非受容の効果(実験Ⅲ)

条 件	受 容	非 受 容	
"	42	40	
他者の魅力変動値	+3.05 ($S^2=12.8$)	-1.70 ($S^2=11.3$)	***
作文評価の変動値	+1.67 ($S^2=20.5$)	-1.42 ($S^2=28.4$)	**

*** 0.1% レベルで ** 1% レベルで条件差は有意

の項目が若干異なる。実験Ⅰ, Ⅱと共通の項目は4つであり、新しく2項目をつけ加えて6項目からなる尺度が用いられた。

結果と考察

受容, 非受容の操作の効果 Table 7 に示されているように、他者に感じる魅力の変動値にも作文評価の変動値にも条件差があった。受容条件ではそのような働きかけをした他者に感じる魅力が高くなり、非受容条件では低くなるという結果が得られたが、これは実験Ⅰ, Ⅱの結果と一致するものであり、仮説 2-1 を支持するものである。

自己評価の効果 実験操作前に測定された自己評価、自己の作文の評価、他者の作文の評価、他者に感じる魅力の4変数および自己の作文評価の変動値、他者に感じる魅力の変動値、以上6変数相互の間の原相関係数は Table 8, Table 9 に示されている。自己の作文の評価

TABLE 8

受容条件における変数間の相関(実験Ⅲ)

	作 評	他 作 評	魅力(I)	魅力差	作 評 差
自 評	0.354*	-0.084	-0.045	-0.022	0.197
作 評		0.236	0.134	-0.145	-0.257
他 作 評			0.318*	-0.205	0.153
魅 力 (I)				-0.565***	0.068
魅 力 差					0.113

ただし、他作評：他者の作文の評価、*** 0.1% レベルで *5% レベルでそれぞれ有意

TABLE 9

非受容条件における変数間の相関(実験Ⅲ)

	作 評	他 作 評	魅力(I)	魅力差	作 評 差
自 評	0.355*	0.146	0.467**	-0.154	-0.142
作 評		0.063	-0.036	-0.246	-0.413**
他 作 評			0.467**	-0.082	-0.310*
魅 力 (I)				-0.234	-0.126
魅 力 差					-0.014

** 1% レベルで *5% レベルで それぞれ有意

TABLE 10
自己評価と他者に感じる魅力

条 件	実 験 I				実 験 II		実 験 III	
	受 容		非 受 容		受 容	非受容	受 容	非受容
仮 定 的 効 果	I-a +	I-b (±)	I-a +	I-b (±)	I-b (±)	I-b (±)	I-b (±)	I-b (±)
偏 相 関	0.212		0.336		-0.316	-0.049	-0.033	0.056

TABLE 11
自己のパフォーマンス評価と他者に感じる魅力

条 件	実 験 I						実 験 II				実 験 III			
	受 容			非 受 容			受 容		非 受 容		受 容		非 受 容	
仮 定 的 効 果	II-a +	II-b +	II-c -	II-a +	II-b -	II-c -	II-b +	II-c -	II-b -	II-c -	II-b +	II-c -	II-b -	II-c -
偏 相 関	0.059			-0.086			0.262		0.154		-0.061		-0.266	

(前)、他者の作文の評価、他者に感じる魅力(前)の3変数を恒常にした場合、自己評価と他者に感じる魅力の変動値との偏相関は受容条件で-0.033、非受容条件で0.056であった。仮説2-2からは受容、非受容両条件においてこの偏相関が0に近いことが期待された。従って、この結果は仮説を支持するものといえよう。

自己のパフォーマンス評価の効果 自己評価、他者の作文の評価、および他者に感じる魅力(前)の3変数を恒常にした場合、自己の作文の評価(前)と他者に感じる魅力の変動値との偏相関は受容条件で-0.061、非受容条件で-0.266であった。仮説2-3からはこの偏相関が受容条件では0に近く、非受容条件では負になることが期待される。従って、仮説は一応支持されたものと考えられる。

総合的考察

自己評価の効果

自己評価と他者に感じる魅力との関係について、実験I、II、IIIの仮説と結果とがTable 10に示されている。これによると実験IIの受容条件を除いては仮説が大体支持されたと考えられる。それでは、この実験IIの受容条件における結果をどのように考えたらよいであろうか。先の仮定においては、自己評価に関する機能として、他者の自己に対する発言や態度を受取る際自己評価のレベルを投影して受取るという機能だけを考えた。ここで各実験における受容条件と非受容条件の結果とを較べてみると、実験IIの結果ほど顕著ではないが実験Iにおいても実験IIIにおいても受容条件の結果は非受容条件の結果に較べて負の方向への偏りを示している。このことから

受容条件においては、自己評価の低い人ほど相手に魅力を感じやすい、というもう1つの機能があるのではないかという推定ができる。この機能は、実験IIで大きく働いている点から考えれば、他者の態度を認知する際に働らくというより、主として認知された内容に反応する際に働らくと考えた方がよいであろうし、また相互作用する相手が目上であるといったように、被験者に心理的緊張を要求するような状況で働らくのではないだろうかと考えられる。

以上のように考えれば、社会的相互作用の中で自己評価が他者に及ぼす影響について、受容条件においては①他者の自己に対する発言や態度を認知する際に働らく機能と、②その認知した内容に対して反応する際に働らく機能との組合せとして考えることができ、非受容条件においては主として①の機能の効果として考えることができる。しかしこの②の機能については、その機能する条件およびメカニズムについて今後検討する必要がある。

ところで、日常場面では、ほとんどの場合対面状況で他者と相互作用するので、自己に対する他者の態度を解釈することがどうしても必要となってくる。従って、自己評価のレベルに応じて自己に対する他者の態度を認知するという機能が常に働らくと考えてよいだろう。その結果、他者に対する態度、発言等は自己評価の高低によって大きく差異を生ずるものと考えられる。そうすれば、自己評価が低い人は他者に対して受容的でないという多くの研究結果は、自己評価の低い人は自己評価の高い人に較べて他者から受容れられていないと感じやすく、また低い評価を与えられたと認知しやすいの

で、従って他者に対する態度も非好意的、非受容的になりやすくなるというメカニズムを反映したものと解釈できる。

自己のパフォーマンス評価の効果

本稿では自己のパフォーマンスの評価をパーソナリティ特徴的な自己自身に対する評価から区別して問題とした。この自己のパフォーマンス評価と他者に感じる魅力との関係についての仮説と結果とは Table 11 に示されている。これで見ると実験Ⅰおよび実験Ⅲにおいては大体仮説が支持されているにもかかわらず実験Ⅱの結果は仮説を支持していなかった。この実験Ⅱの結果について先に3つの可能性を考えた。①仮説を引き出した仮定が誤っていた。②この実験状況においては仮定された機能以外の機能が加っていた。③実験状況の不自然さから結果が混乱した。以上3つの可能性である。まず最初に①についてであるが、自己のパフォーマンスの評価の機能について本稿で仮定されたものはこれまでの研究で実証されているところのものであり、また本稿に報告した実験Ⅰおよび実験Ⅲの結果も支持しているものであるから、一応その可能性は小さいであろう。残る②と③であるが、③の場合ならば先に考察した実験Ⅱにおける自己評価の効果についても考えなおさなければならない。確かに、実験Ⅰおよび実験Ⅲに比べて実験Ⅱの状況は人為性が強い。それ故、状況の不自然さのための予期しない効果が入っていることも考えられる。しかしながら、受容されればその他者に対して大きな魅力を感じ、受容されない場合は小さな魅力しか感じない、という点は実験Ⅱの結果も実験Ⅰおよび実験Ⅲの結果と符合する。また自己評価の効果についても、当初の仮説は実験Ⅱにおいては支持されなかったが、その結果の偏りの方向は実験Ⅰおよび実験Ⅲと同一方向のものであった。従って、実験Ⅱの結果が大きく混乱しているとは考えられない。このように考えれば最後の②の可能性が最も強くなってくる。

もし仮定された機能以外の機能が実験Ⅱにおいて加っていたとすれば、それはどういうものであるか。仮説と結果の食い違いから考えれば、それは受容、非受容両条件において、自己のパフォーマンス評価と他者に感じる魅力との相関を正の方向にもってゆくような効果をもつものである。そしてそれは初対面の目上の他者と間接的な相互作用をする場合に働つきやすい。このような機能についていくつかの解釈が可能であるが、ここではこれ以上立ち入らない。

自己評価と自己のパフォーマンスの評価

先に述べたように、自己評価と自己のパフォーマンスの評価との間には密接な関係が考えられる。事実、実験Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、いずれにおいても両者の相関はかなり高かった。しかしながら、両者はやはり区別して問題とされな

ければならない。自己自身について非常に高い評価を下している人でも自己のいくつかの属性あるいはパフォーマンス等については自信を持っていないこともあるだろうし、逆に自己自身について低い評価を下している人でも自己の何かの属性については高く評価していることが考えられる。それ故、たまたまある種のパフォーマンスを問題とするような社会的相互作用の状況においては、自己評価は高いがその場で問題となっている自己のパフォーマンスについての評価は低い、とか、あるいはその逆であるとかいったことは当然考えられる。事実、本稿に報告した実験状況においても、自己評価は高いが作文は不得意で自分の書いた作文を高く評価していない、という場合も、またその逆の場合もあった。

本稿ではこの自己自身に対する評価と自己の特定のパフォーマンスに対する評価とを区別して問題とするのみで、両者の相互関係および他の変数に与える相互作用的效果については考察が及ばなかった。今後の研究において検討してゆきたい。

要 約

1. 本研究は、自己のパフォーマンスに関して他者と社会的相互作用をする場合、自己評価および自己のパフォーマンスに対する自己の評価という要因が、他者に感じる魅力のレベルに対してどのような効果を持つかを検討する目的で行なわれた。

2. 自己評価の効果については、④自己評価を確認するような仕方では他者からの評価を認知する。⑤他者からの評価がどの程度であったかという認知に応じて、他者に感じる魅力のレベルが決定される、と仮定された。

3. 自己のパフォーマンスの評価の効果については、④自己のパフォーマンスに対する自他の評価の食い違いが小さくなるように他者からの評価を認知する。⑥自他の評価の食い違いが小さいほどその他者に魅力を感じる。⑦自己のパフォーマンスに対する他者の評価が自己の持っている評価より上であればその他者に魅力を感じ、逆の場合その他者に感じる魅力を下げる、と仮定された。

4. 上の諸仮定から3つの実験についてそれぞれ実験仮説が引きだされた。そして受容条件、非受容条件ごとに、自己評価および自己のパフォーマンスの評価と各変数との偏相関が求められ、それぞれの仮説が検討された。

5. 3つの実験は、目上の初対面の人と対面状況で相互作用する実験Ⅰ、目上の初対面の人と間接的に相互作用する実験Ⅱ、友人と間接的に相互作用する実験Ⅲ、からなっていた。

6. 自己評価の効果については、④の仮定は支持されたが、⑥の仮定について、他者から高い評価を受ける受

容条件において認知された他者の態度に反応する際、自己評価の高い人の方が他者に魅力を感じやすいのではないかと推定がなされた。

7. 自己のパフォーマンスの評価の効果については、⑥⑦⑧の仮定が一応支持されたものと考えられる。しかし実験Ⅱにおいては、これら3つの仮定だけでは説明できない結果が得られた。

引用文献

- Berger, E.M. 1952 The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 47, 778—782.
- Dittes, J.E. 1959 Attractiveness of group as function of self-esteem and acceptance by group. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 59, 77—82.
- Dymond, R.F. 1954 Adjustment changes over therapy from self-sorts. In Rogers, C.R., & Dymond, R.F. (Eds.), *Psychotherapy and personality change*. Chicago: University of Chicago Press, p.76—84.
- Festinger, L. 1957 *A theory of cognitive dissonance evanston*. Ill: Row Peterson.
- Fey, W.F. 1954 Acceptance of self and others, and its relation to therapy readiness. *J. clin. Psychol.*, 10, 269—271.
- Guilford, J.P. 1954 *Psychometric Methods*. New York: McGraw-Hill.
- James, W. 1891 *Textbook of psychology*. New York: Holt
- 堀田 徹一 1966 2者関係に及ぼす自己評価の効果—他者からの働きかけに対する反応を規定する要因として—*教育社会心理学研究*, 5, 231—238.
- Phillips, E.L. 1951 Attitudes toward self and others: a brief questionnaire report. *J. consult. Psychol.*, 15, 79—81.
- Scheerer, E.T. 1949 An analysis of the relationship between acceptance of and respect for others in ten counseling cases. *J. consult. Psychol.*, 13, 169—175.
- Stock, D. 1949 An investigation into the intercorrelations between the self-concept and feelings directed toward other persons and groups. *J. consult. Psychol.*, 13, 176—180.

—1966. 9. 27. 受稿—

SELF-ESTEEM AND SELF-EVALUATION OF OWN PERFORMANCE: A STUDY OF THE EFFECT OF SELF-CONCEPT UPON SOCIAL INTERACTION

EIICHI KAJITA

National Institute for Educational Research

ABSTRACT

The present study was conducted to investigate the effect of self-esteem and self-evaluation of own performance upon the attraction to other person who had evaluated subject's performance.

Regarding to the effect of self-esteem we assume that (1) one projects his self-esteem level when he recognizes other person's appraisal toward him, and that (2) the recognition of how other person

estimates determines the attraction to other person.

Regarding to the effect of self-evaluation of own performance, we assume that (3) one recognizes other person's evaluation to minimize the discrepancy between one's and other's evaluation, that (4) the less discrepancy between self and other's evaluation is, the more one is attracted to the other, and that (5) when other's evaluation of one's performance is above the one's self-evaluation, he is attracted to

the other.

From the above stated assumptions, experimental hypotheses were derived. And partial correlation coefficients of variables were evaluated to examine hypotheses in the following three experiments :

- (1) The experiment to interact directly with a senior stranger.
- (2) The experiment to interact indirectly with a senior stranger.
- (3) The experiment to interact indirect-

ly with the peer.

Regarding to the effect of self-esteem the assumption (1) was verified, but the assumption (2) was not sufficiently verified.

As for the effects of self-evaluation of own performance, the assumption (3), (4) and (5) were verified in the experiment (1) and (3), but these assumptions were not sufficiently verified in the experiment (2).

題 名.....

著 者.....

心 理 学 研 究

第 38 卷 第 5 号 別冊

日 本 心 理 学 会

第3章

他者についての概念化と対人感情

— 国立教育研究所 梶 田 叙 —

社会的相互作用における人の行動を媒介し、規定してゆく重要な変数として、自己概念や他者の概念(認知)についてこれまでいくつかの方向から研究がなされてきた (Tagiuri & Petruolo, 1958; Wylie, 1961)。ここで自己概念とか他者の概念とか呼ぶものは、自己あるいは特定の他者についての全体的イメージであって、自己あるいは特定の他者に関する種々の情報が、選択され、相互に関係づけられ、一定のわく組によって概念化されたものである。このような自己概念や他者の概念は事実自体に関する情報からというより、それに対して一定の基準からなされた判断からなりだっている。それ故、同一の人に関しても見る人の価値基準やその人に対する感情等によって、非常に異った概念化がなされるのは当然のことである。ここでは概念化のプロセス自体についてはなく、すでに出来あがっている概念について検討することによって、概念化の若干の方向性を明らかにした

問 題

本稿では、好悪という対人感情によって、その感情の対象となっている他者の概念、およびその他者自身の自己概念について推定された内容がどのように異ってくるかという点について、自己概念、理想的自己の概念、および他者の実際の自己概念との関連性の面から検討する。他者の概念と同時に他者自身の自己概念について推定された内容を取上げるのは、他者との社会的相互作用において、人はその他者についての自己の判断のみでなく、その他者が持っている他者自身についての判断をも考慮しなくてはならないからであり、他者に関して自己のなす判断とその他者自身のなしているだろう判断についての推定の内容とでは、対人感情との関連性が異ってくる事が予想されるからである。

上に述べた問題のうち特に他者の概念と対人感情との関連について、いくつかの点がこれまでの研究によって明らかにされている。それらは、(1) 好意を持っている

他者の概念と自己概念とは類似している (Fiedler, et al., 1952; Lundy, 1956, 1958; Lundy, et al., 1955), (2) 好意を持っている他者の概念と理想的自己の概念とは類似している (Fiedler, et al., 1952; Lundy, 1956; Lundy, et al., 1955; Northway & Detweiler, 1956; Thompson & Nishimura, 1952), (3) 好意を持っている他者の概念と理想的自己の概念との類似の方が、自己概念と理想的自己の概念との類似よりも大きい (McKenna, et al., 1956; Thompson & Nishimura, 1952), (4) 好意を持っている他者の実際の自己概念と被験者の自己概念との類似は、好意を持っていない他者の実際の自己概念と被験者の自己概念との類似よりも大きい (Fiedler, et al., 1952; Thompson & Nishimura, 1952),

という諸点である。これらの研究によって見出されてきた諸関係は、Q分類、MMPIの項目、いくつかの選ばれた性格特性等、測定用具のタイプが異なるにもかかわらず存在しているところから、かなり安定した関係と考えることができる。そこで次の段階としては、これら諸関係相互の間の関連性が問題とされなければならない。すでに見出されているいくつかの相関連した関係相互の間の関係について問題とする場合、まずそれらの関係のうちより基本的な関係と、より表面的現象的な関係とを見分けていざことが重要であろう。そのようなステップを重ねることによって、それら諸関係を成立させているダイナミクスも明らかになってゆくものと考えられる。

以上のような諸点をふまえて、本稿では次の5つの問題について検討する。

(a) 被験者が他者に対して持つ好悪という対人感情の違いは、他者自身の自己概念と被験者の自己概念との関係、および他者自身の自己概念と被験者の理想的自己の概念との関係と関連しているか。

(b) 被験者が他者に対して持つ好悪という対人感情の違いによって、その他者の概念と、被験者の自己概念、理想的自己の概念、他者自身の自己概念との関係はどのように異なるか。特に、先に挙げた(1)―(3)の研究結果がこの研究においても確認できるか。

(c) 被験者が他者に対して持つ好悪という対人感情の違いによって、被験者によって推定されたその他者の自己概念と、被験者の自己概念、理想的自己の概念と、そ

¹ The conception of other person and interpersonal feeling.

² Eiichi Kajita (The National Institute for Educational Research)

TABLE 1
各概念の間の相関関係¹⁾

		S-I [†]	S-S'	I-S'	S-O	I-O	O-S'	S-O _s	I-O _s	O _s -S'	O-O _s
L 条件	平均	0.412*	0.312**	0.562**	0.381*	0.893**	0.515**	0.396*	0.890**	0.544**	0.901**
	SD	0.456	0.277	0.274	0.459	0.335	0.275	0.466	0.377	0.155	0.460
D 条件	平均	0.369*	0.221*	0.438**	-0.127	-0.319*	-0.039	0.031	0.315	0.246**	0.464*
	SD	0.453	0.258	0.274	0.241	0.445	0.261	0.412	0.554	0.233	0.689
LD の差		n.s.	n.s.	n.s.	*	**	**	n.s.	*	**	n.s.

[†] 個人ごとに概念間の相関係数を求め、その値をZ変換し、条件ごとに平均したものを、TABLE 2, 4もこれに準ずる。

S: 自己概念 I: 理想的自己の概念 O: 他者の概念 O_s: 他者の自己概念の推定 S': 他者の実際の自己概念
** 1% レベルで * 5% レベルで それぞれ有意

の他者の実際の自己概念との関係はどのように異なるか。特に他者について自己の判断を述べる場合(b)とどのような差異が見られるか。

(d) (b)で検討された他者の概念と他の諸概念との関係のうち、より基本的な関係(その関係の存在によって他の関係の存在の説明はできるが、その逆はできないような関係)はどれか。

(e) (c)で検討された、被験者によって推定された他者の自己概念と他の諸概念との関係のうち、より基本的な関係はどれか。

方 法

被験者 中学2年生男子28名、それぞれをランダムにL条件(被験者が好意を持っている人を「他者」として各種の評定をする)、D条件(被験者が好意を持っていない人を「他者」として各種の評定をする)にわりわり、各条件14名ずつとした。しかし各条件2名計4名が評定の一部拒否、あるいは不備の為除外されたので、各条件12名ずつについて整理がなされた。

測定尺度 長島他(1966)の作製した Self-Differential 尺度の中学生用を用いた。これは自己および他者を形容する際よく用いられる35の形容詞対からなっている。各形容詞対は意味が逆になっており、7段階で評定される。この尺度は本稿の研究意図にとって次の点で望ましいものである。すなわち(1)用いられている形容詞が、ここで被験者となっている中学生達によって現実の種々の状況における自己や他者を形容する際用いられるものである為、本稿の当初に述べた意味における自己概念、他者の概念の測定に適していると考えられること。(2)因子分析の結果から5つの因子のおのおのを代表する形容詞対が選ばれている為、自己概念、他者の概念を測定するものとしてその形容詞選定に偏りが少ないと考えられること。の2点である。

手続き 被験者はまず、この調査の解答が全て数字に直されて整理されること、また学校の先生、友人等に解

答内容もれるおそれは全くないこと、等について説明を受けた後、同学年の男子の中で最も好意が持て、これからもつきあいを続けたいと思う人(L条件)、あるいは好意を持ってなくこれからもつきあいたくないと思う人(D条件)を1名選びその名を書いた。次いで、(1)現実の自己(自己概念、S)、(2)どのような人になりたいかという理想的自己(I)、(3)先に選んだ最も好意の持てる人あるいは好意の持てない人をどのように見るか(他者の概念、O)、(4)その他者は自分自身のことをどう見ているだろうかという推定(他者の自己概念の推定、O_s)についてそれぞれ評定した。同時に同学年の他の男子生徒は、現実の自己についての評定その他の評定をおこなった。このうち好意の持てる人あるいは好意の持てない人として被験者から選ばれた人の自己概念が、後に他者の実際の自己概念(S')として整理された。

結果の整理法 5種の評定間の関係を見る為に各被験者について評定間の相関係数が求められ、Z変換された後で条件ごとに平均値が出された。評定間のどの関係がより基本的なものであるか検討する為には、他の変数(評定)を恒常にした時の個相関係数が各被験者について求められた。これは恒常にした変数の影響として説明できる部分を差引いた残りの関連性を見ようとするものである。この個相関係数もZ変換された後で条件ごとに平均値が出された。

結果と考察

各被験者の評定間の相関係数をZ変換し、条件ごとにその平均と標準偏差とを示したのが Table 1である。それぞれの平均についてそのプラス、マイナスの方向が有意であるかどうか、また条件間に有意差があるかどうか1検定された。評定間の関連性については、Fig. 1に図示されている。

他者に対する好悪という対人感情に関して2条件が設定されたのであるが、対人感情に関係のない、自己概念(S)と理想的自己の概念(I)との間の相関関係に条件差

TABLE 2
O と S, I, S' の間の偏相関係係数†

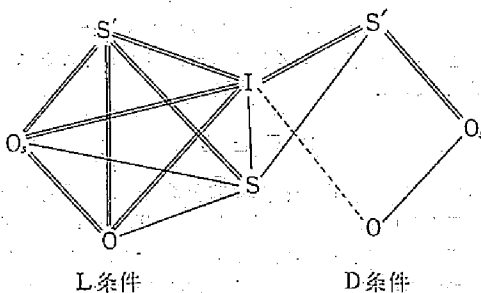
		S-O	I-O	O-S'
L 条件	平均	0.051	0.607**	0.163*
	S.D.	0.272	0.351	0.226
D 条件	平均	-0.095	-0.296*	0.049
	S.D.	0.198	0.413	0.262
L D の 差		n. s.	**	n. s.

† それぞれ他の2変数を恒常にした場合
** 1% レベルで * 5% レベルで それぞれ有意

が見られないところから、各条件にふり分けられた被験者に差はなかったものと考えらることにする。

他者の実際の自己概念(S')とSおよびIとの相関を見ると、双方とも有意にプラスであり、条件差も見られない。すなわち、対人感情にかかわりなく一般に相互の自己概念は類似する面が多く、また他者の実際の自己概念と被験者の理想的自己の概念も類似している。これは自己や他者を表現する形容語が多かれ少なかれ評価的ニュアンスを持っていること、正常な個人であれば一般にプラス方向のニュアンスを持った形容語を多く用いて自己に関する概念を形作りやすいこと(このことは各被験者の自己概念と理想的自己の概念との相関がプラスであることからもうかがわれる)、そしてここで用いた被験者選のように文化的等質性が高いような場合各評価語の評価の方向が大体決まっていること(このことは被験者の理想的自己の概念と他者の理想的自己の概念との相関一本稿の Table には載せていないが一が全て .63 以上であったということからもうかがわれる)、によって説明することができる。

TABLE 1 の図示



ただし
 ——— 正の関係 (P < .01)
 ——— 正の関係 (P < .05)
 - - - - 負の関係 (P < .05)

FIG. 1

他者の概念(O)と S, I, S' との関係について見ると、L条件ではSとO、IとO、OとS'の相関関係はいずれもプラスであり、D条件ではSとO、OとS'との相関関係はプラスともマイナスとも言えず、IとOとの相関関係のみマイナスである。条件差はいずれも有意である。すなわち、好意を持っている他者についての概念は、自己概念、理想的自己の概念、そして他者自身の自己概念とも類似しているが、好意を持っていない他者についての概念は、自己概念とも他者自身の自己概念とも関連があるとは言えず、被験者の理想的自己の概念と反対方向のものである。SとO、IとOの関係についての結果はこれまでの研究結果(1)(2)と一致している。またL条件においてS-OとI-Oとの差が有意(p < .05)であったが、このことはこれまでの研究結果(3)と一致するものである。

被験者によって推定された他者の自己概念(O_s)と S, I, S' との関係について見ると、L条件ではSとO_s、IとO_s、O_sとS'の相関関係はいずれもプラスであり、D条件ではSとO_s、IとO_sの相関関係はプラスともマイナスとも言えないが、O_sとS'との相関関係はプラスである。条件差はI-O_sとO_s-S'には見られるがS-O_sには見られない。すなわち、好意を持っている他者について推定する場合、その推定された自己概念は、被験者の自己概念、理想的自己の概念、および他者の実際の自己概念と類似しているが、好意を持っていない他者の場合は、被験者の自己概念とも理想的自己の概念とも関連があるとは言えず、他者の実際の自己概念と類似する方向に推定されている。

OとO_sとを比較して見ると、L条件においてはS、I、S'との関連性に全く差は見られないが、D条件においてはI-OとI-O_sとの差およびO-S'とO_s-S'との差がいずれも有意(双方とも p < .05)であった。すなわち、好意を持っていない人については被験者の理想的自己の概念と逆の方向の人だと見る傾向があるが、その人の自己概念はむしろ被験者の理想的自己の概念の方向(有意な傾向ではなかったが)であろうと推定する傾向が強く、また他者の概念は他者の実際の自己概念と関連していないが、推定された他者の自己概念は他者の実際の自己概念と類似している。

次いで、他者の概念(O)と S, I, S' との関係のうち基本的なものとしてどの関係を考えることができるか検討したい。IとS'を恒常にした時のS-O偏相関係数、SとS'を恒常にした時のI-Oの偏相関係数、SとIを恒常にした時のO-S'の偏相関係数を各個人について求めZ変換して条件ごとに平均した値と標準偏差とを示したのが Table 2 である。L条件ではSとOの偏相関係はゼロに近く、IとOの偏相関はプラスであり、OとS'の偏相関も値は小さいがプラスである。D条件ではSと

TABLE 3

自己概念のポジティブおよびネガティブ属性と他者の概念の属性との関係

タイプ	I	II	III	IV
L条件	1.5†	10.5	0	0
D条件	0.5	3	5.5	3

† 各タイプは、自己概念のポジティブ、ネガティブ属性と他者の概念の属性との一致・不一致が次の表のようになっている。

タイプ	ポジティブ属性	ネガティブ属性
I	一致 > 不一致	一致 > 不一致
II	一致 > 不一致	一致 < 不一致
III	一致 < 不一致	一致 > 不一致
IV	一致 < 不一致	一致 < 不一致

†† 単位は人、ただしどちらかの属性で一致と不一致の数が等しくなった場合は、入りうる2つのタイプに0.5ずつ入れる。

O、OとS'の偏相関はゼロに近く、IとOの偏相関はマイナスである。条件差はI・Oについてだけ見られる。以上から一応L条件においてはIとOおよびOとS'の関係を、D条件ではIとOの関係をより基本的なものと考えることができよう。このOとS'、すなわち他者の概念と他者の実際の自己概念とが、好意を持っている他者については、現実的にもまた他の2つの概念との関連性で説明できる部分を差引いた場合にも類似の方向であるのに、好意を持っていない他者については、いずれの場合も関連性がないということは、対人感情によるコミュニケーション量の差によって説明ができる。すなわち、好意を持っている他者とコミュニケーションする機会が多く、従ってその他者自身の自己概念に関する表明に接することが多くなるので、その他者についての概念を形成する際、当の他者の自己概念が影響することが多いが、好意を持っていない他者とはコミュニケーションする機会が少なくなるので、他者自身の自己概念の影響が小さいと考えられる。

他者の概念と自己概念、および理想的自己の概念との関係について見る時、これまで多くの研究によって指摘されてきた、好意を持っている他者の概念と自己概念との類似性が、他の2つの概念との関係で説明できる部分を差引くとなくなってしまうが、一方、理想的自己の概念との類似性は、他の2つの概念との関係で説明できる部分を差引いてもなお大きい、という結果が得られたことは注目すべきことであろう。このことは、他者概念と自己概念との類似、非類似といったことを問題とする場合、どういう側面での類似、非類似なのかをまず問題と

TABLE 4

O_s と S, I, S' の間の偏相関関係†

		S-O _s	I-O _s	O _s -S'
L条件	平均	0.027	0.634**	0.184*
	SD	0.292	0.233	0.266
D条件	平均	-0.058	0.203	0.084
	SD	0.262	0.475	0.196
LDの差		n.s.	*	n.s.

† それぞれ他の2変数を恒常にした場合。

** 1% レベルで * 5% レベルで それぞれ有意

しなくてはならないということの意味するのではなからうか、例えば、もし理想的自己の方向にある自己の属性については好意を持っている他者と類似している；また理想的自己の方向にない自己の属性については類似していないと認知しているとしたら、先にも指摘したように自己の属性を理想的自己の方向に認知する傾向が強いところから、全体としては自己概念と好意を持っている他者の概念とは類似の傾向にあるという結果になる。その場合、理想的自己の方向による影響を引き去ったら、先にあらわれた類似もゼロに近いものになってしまうのも当然のことである。この点について資料を検討してみよう。

自己および理想的自己いずれかの評定が中点になっている場合は除外して(35項目中平均10項目)、自己概念を形作る形容詞対の評定の中、理想的自己の方向に一致するものをポジティブな属性、逆方向のものをネガティブな属性とし、他者の概念について各形容詞対の評定との一致・不一致を見てみる。ここで両属性において一致の方が多い場合をタイプI、ポジティブ属性では一致が多くネガティブ属性では不一致が多い場合をタイプII、逆にポジティブ属性で不一致が多くネガティブ属性で一致が多い場合をタイプIII、両属性において不一致が多い場合をタイプIVとすると、各タイプ別の被験者数はTable 3のとおりである。但し、どちらかの属性で一致の数と不一致の数が等しくなったような場合は、該当する2つのタイプに0.5ずつ配分してある。先の考え方からすれば好意を持っている他者についてのL条件ではタイプIIが多くなると考えられる。また好意を持っていない他者についてのD条件ではL条件の場合と逆の関係が見られると仮定すればタイプIIIが多くなると考えられる。L条件において見るとタイプII以外のものはわずか1.5である。このことからタイプIIが支配的傾向であるとしてもよいと思われる。従ってL条件については先の考え方は一応支持されるものと考えてよいであろう。D条件ではタイプIIIが一番多いが、他のタイプに属するも

TABLE 5

自己概念のポジティブおよびネガティブ属性と推定された他者の自己概念の属性との関係

タイプ	I	II	III	IV
L条件	1	10	0.5	0.5
D条件	2	6	2	2

のが半数以上の6.5になるので、タイプⅢを支配的傾向とみなすことはできない。

推定された他者の自己概念 (O_S) の場合について、IとS'を恒常にした時のS・ O_S の偏相関係数、SとS'を恒常にした時のI・ O_S の偏相関係数、SとIを恒常にした時の O_S ・S'の偏相関係数を各個人について求め、Z変換して条件ごとに平均と標準偏差とを示したのがTable 4である。L条件ではSと O_S の偏相関はゼロに近く、Iと O_S の偏相関はプラスであり、 O_S とS'の偏相関も値は小さいがプラスである。D条件ではSと O_S 、 O_S とS'の偏相関はゼロに近く、Iと O_S の偏相関も標準偏差が大きくプラスとは言えない。条件差はI・ O_S についてのみ見られる。以上からL条件においてはIと O_S および O_S とS'の関係をより基本的なものと考えることができよう。D条件においては他の3つの概念との関連性が表面的にも薄かったが、より基本的と言えるような関連性も見られない。 O_S とS'の関連性が一応L条件では見られるのにD条件では見られないというのは、他者の概念の場合と同様コミュニケーション量の差によるものと思われる。

他者の概念の場合と同様に、自己概念のポジティブな属性およびネガティブな属性と、推定された他者の自己概念の属性との一致・不一致を見たのがTable 5である。これによるとL条件では他者の概念の場合と同様タイプⅡを支配的傾向と考えてよいだろう。D条件では、他者の概念の場合タイプⅢが多かったが、ここではタイプⅡが多くなっている。しかしこのタイプⅡも他のタイプに属するものが半数あるため支配的傾向とみなすことはできない。

偏相関を用いて検討した点に関してOと O_S を比較して見ると、L条件においては全く差が見られず、D条件においてはI・Oの偏相関とI・ O_S の偏相関との差が有意($p < .05$)である。原相関の場合には有意であったO・S'と O_S ・S'との差は偏相関の場合ゼロに近いものになっている。

この研究は、資料を得る際の各概念の評定順序、評定間隔等の検討すべき問題を含むものではあるが、得られた資料は一貫して、対人感情によって他者の概念の形成がいかにその人の価値の方向(ここでは理想的自己の概念)の影響を大きく受けているかということを示してい

る。この点についてのより詳細な研究が今後必要だと思われる。

要 約

1. 本研究は、好悪という対人感情によって、その感情の対象となっている他者についての概念、およびその他者自身の自己概念についての推定の内容と、自己概念、理想的自己の概念、および他者の実際の自己概念との関連性が、どのように異ってくるかという点について検討する目的で行われた。

2. 7ポイントで評定する35の形容詞対を用いてそれぞれの概念が評定された。そしてそれらの概念の間の相関係数が個人ごとに求められ、Z変換された後、条件(他者に対する好悪の別)ごとに平均と標準偏差とが出された。また他者の概念および推定された他者の自己概念の内容と、自己概念、理想的自己の概念、他者の実際の自己概念との間の偏相関が求められ同様に処理された。

3. 主要な結果は次の通りである。①好意を持っている他者の概念は、自己概念、理想的自己の概念、他者の実際の自己概念とそれぞれ関連しているが、自己概念との関連性は他の2つの概念によって説明できるものである。他者の実際の自己概念との関連性は他の2つの概念によって説明できる部分を差引いても小さいながら存在する。理想的自己の概念との関連性は他の2つの概念によって説明できる部分を差引いてもなお大きな関連性が存在する。好意を持っている他者の自己概念について推定された内容と、自己概念、理想的自己の概念、他者の実際の自己概念との関係についても同様である。②好意を持っていないと他者の概念は理想的自己の概念と逆方向の関連性があり、自己概念および他者の実際の自己概念との関連性は見られない。この理想的自己の概念と逆方向の関連性は、他の2つの概念によって説明できる部分を差引いてもなお見られる。好意を持っていない他者の自己概念について推定された内容の場合は自己概念との関連性は見られず、理想的自己の概念との関連性もはっきりしない。他者の実際の自己概念との関連性は小さいながら見られるが、他の2つの概念によって説明できるものである。③他者の概念と他者の自己概念について推定された内容との間には、対人感情に関りなく一般に関連性が見られる。しかし両者と他の概念との関連性を見ると、好意を持っている他者については両者が全く同様の関連性を持っているが、好意を持っていない他者については理想的自己の概念との関連性が異っている。

引用文献

Fiedler, F.E., Warrington, W.G., & Blaisdell, F.J.

- 1952 Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in a social group. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 47, 790-791.
- Lundy, R. M. 1956 Self-perceptions and descriptions of opposite sex sociometric choices. *Sociometry*, 19, 272-277.
- Lundy, R. M. 1958 Self-perceptions regarding masculinity-femininity and descriptions of same and opposite sex sociometric choices. *Sociometry*, 21, 238-246.
- Lundy, R. M., Katkovsky, W., Cromwell, R. I., & Shoemaker, D. J. 1955 Self acceptability and descriptions of sociometric choices. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 51, 260-262.
- Mckenna, H. V., Hofstaetter, P. R., & O'Connor, J. P. 1956 The concepts of the ideal self and of the friend. *J. Pers.*, 24, 262-271.
- 長島貞夫・原野広太郎・堀 洋道・藤原喜悦・斎藤耕二
1966 自我と適応の関係についての研究(3)
日本心理学会第30回大会発表論文集 p.513-515.
- Northway, M. L., & Detweiler, J. 1956 Children's perceptions of friends and non-friends. *Sociometry*, 18, 527-531.
- Tagiuri, R., & Petfallo, L. (Eds) 1958 *Person perception and interpersonal behavior*. California: Stanford Univ. Press.
- Thompson, W. R., & Nishimura, R. 1952 Some determinants of friendship. *J. Pers.*, 20, 305-314.
- Wylie, R. C. 1961 *The self concept*. Lincoln: Univ. of Nebraska Press.

1967. 6. 22. 受稿

SELF-ESTEEM, AFFECT, AND INTERPERSONAL COGNITION

EIICHI KAJITA

The National Institute for Educational Research

The present study was conducted to investigate the interconnectedness among self-other concepts (images of self, ideal self and of the other person, inferences of the other person's cognition concerning the subject and of himself, the other person's actual images of the subject and of himself), and effects of self-esteem and affect upon them. Subjects were 56 high school boys and girls. Main conclusions are: (1) High self-esteem person's concepts are congruent within each other, but low self-esteem person's concepts are differentiated into 3 groups (concepts concerning self, the other person, ideal self), (2) Tendency concerning assumed similarity is owing to idealization tendency, (3) The main effect of affect is, the idealization of the other person.

There have been many studies that investigate the connection of the affect with the relation between two or three concepts concerning self and other person. Two main tendencies derived from these studies are as follows. (1) One sees the person whom he likes to be more similar to himself than the person whom he doesn't like (e.g. Fiedler, Warrington, & Blaisdell, 1952). (2) One sees the person whom he likes to be more similar to his own ideal self than the person whom he doesn't like or even himself (e.g. Thompson & Nishimura, 1952). (1) is sometimes called the assumed similarity and (2) is sometimes called the idealization tendency. Besides, under the name of empathy, accuracy, insightfulness and other terms, many researchers have also studied the relation between the concept of other person and the other person's self image, the relation between the inference of other person's cognition or behavior and the object of inference, the relation between subject's self image and the other person's image concerning the subject, and others. But there have been few studies that investigate systematically the interconnectedness among concepts concerning various aspects of self and other person. We think it insufficient to study about the relation

between two or three concepts fragmentarily without the information of the interconnectedness among various concepts.

On the other hand, various studies have pointed out the relation of one's self image to his cognition of other person and of self-other relation. For example, Berger (1952) and other researchers have reported the positive correlation between acceptance of self and acceptance of others. Scheerer (1949) and others reported that acceptance of others increased during therapy and was correlated with acceptance of self across therapy interviews. And by the experimental method, it was clarified that high self-esteem person recognizes other person's appraisal toward him more favorably than low self-esteem person, and that the recognized level of the other person's favorableness determines the attraction level to the other person (Kajita, 1966, 1967a). We would like to examine further the effect of self-esteem on the relations between concepts or the interconnectedness among concepts concerning self and other person.

The present study is designed to investigate the interconnectedness among subject's concepts and the other person's concepts concerning self and other person, and to examine the effects of self-esteem

and affect upon such interconnectedness of concepts. In addition to both persons' concepts concerning self and the other person, we introduced in this study subject's ideal self image in order to clarify his orientation of value, and subject's inferences of the other person's concept concerning the subject and of the other person's self image to clarify their relation to his self image, his image of the other person and the object of inferences. That is to say, the subject's concepts that we will examine here are "self image", "ideal self image", "the image of the other person", "the inference of the other person's cognition concerning the subject" and "the inference of the other person's self image". The other person's concepts that we will examine in relation to the subject's concepts are "(the other person's) self image" and "the image of the subject".

In this study we will chiefly examine the following points: (1) The relations among above mentioned concepts, and effects of self-esteem and affect upon them, (2) Some specific aspects of relations—assumed similarity and idealization tendency, three aspects of inferences and influences of self-esteem on them, (3) Inner structure of these seven concepts. Finally we will consider the results as a whole.

METHOD

Subjects

The subjects were selected by the following way from 133 students of senior high-school: 67 boys and 66 girls who were 15-17 years old. At first, they evaluated 20 Lie scale items (3-point) which were revised form of Lie scale in MMPI (Minnesota Multiphasic Personality Inventory). Lie scores were calculated (0-40 points were possible) and 21 high scorers (more than 10 points) were omitted. Then the rest were divided into 3 groups by their self-ideal correlation coefficient that was considered as Self-Esteem index: High (upper 30%), Middle and Low (Lower 30%). Middle group was not

used as subjects of this study. The students of High (SH) and Low (SL) groups were divided into 8 conditions: High or Low Self-Esteem (SH·SL) × Like the other person or not (L·NL) × boy or girl. Finally 28 boys and 28 girls were used as subjects including 7 students for each cell. The more than 7 students for each cell were randomly omitted.

Procedure

Experiments were conducted during a regular class period. Students were asked to choose out of their same-sex classmates one or two persons whom they like best and want to keep friend with. Then they were administered Lie scale and asked to rate their "Ideal Self" on the Self-Differential constructed for the purpose of measuring one's Self-concept (Nagashima et al., 1967), which is of Osgood's Semantic Differential type and has 37 bi-polar qualifiers (7-point scales).

Three weeks after the first session, students were asked to rate their "Actual Self" and "the Other Person", and to infer "the Other Person's cognition concerning Subject" and "the Other Person's Self image" on the Self-Differential. "The Other Person" for each subject was selected by the results of the first session: in "like-the-other" (L) condition both the subject and the other person had chosen each other, and in "doesn't-like-the-other" (NL) condition, the other person was selected randomly out of those who had neither chosen the subject nor had been chosen by him.

As for each subject 21 Pearson's r were calculated between the following 7 rates: I (ideal self image), S (actual self image), O (image of the other person), So (inference of the other person's cognition concerning the subject), Os (inference of the other person's self image), S' (the other person's real self image) and O' (the image of the subject rated by the other person). Then each r was transformed into z score in order to compute the means for each relation between rates.

Factor Analysis for 4 cases

We picked up 4 cases representing 4 conditions (Self-Esteem × Affect) respectively to ex-

amine the inner structure of concepts. Four subjects were all boys and selected as follows: At first we chose the subjects whose correlation coefficients between S and I were the 4th of 7 in SH·L·Boy group and SL·L·Boy group respectively. They were named S-1 (SH·L·Boy) and S-3 (SL·L·Boy). Then the subjects whose correlation coefficients were nearest to that of S-1 and S-3, were selected from SH·NL·Boy group and SL·NL·Boy group respectively. They were named S-2 (SH·NL·Boy) and S-4 (SL·NL·Boy). The 4 cases were considered to well represent the 4 conditions respectively because each case's pattern of correlation coefficients showed considerable resemblance to the pattern of mean correlation coefficients transformed from the mean z scores of each condition.

Factor analysis was performed for each subject's correlation matrix by the principal-factor solution. And for the purpose of psychological explanation of the structure, the original factor arrays were rotated according to the following procedure: (1) The direction of the first factor (I') is decided to represent the direction of ideal self image, (2) The directions of the second (II') and the third (III') factors are decided according to the simple structure principle.

RESULTS AND DISCUSSION

Relations among 7 Concepts and Effects of 3 Factors upon them

Table 1 presents means and standard deviations of z scores derived from Pearson's r among 7 concepts. The results of analysis of variance for the data of Table 1 are shown in Table 2. As for the relation between S and I (S·I), only the effect of self-esteem is significant and the effects of other factors and interaction between factors are not significant. Therefore we can consider the experimental setting regarding self-esteem (SH and SL) was valid.

Looking at the overall means of z scores to see general similarity between concepts, we notice S and So, O and Os show high similarity respectively. O, Os

and O' are connected considerably with I. While S and S', So and S' bear little resemblance respectively. So we can state as follows: (1) In general, the subject's self image and the inference of the other person's cognition concerning the subject resemble each other. (2) In general, the image of the other person and the inference of the other person's self image resemble each other. (3) In general, the image of the other person, the inference of the other person's self image and the actual image of self conceived by the other person are related considerably to the subject's ideal self image. (4) In general, the subject's self image and the other person's self image do not resemble each other.

Now we will examine the concepts concerning the other person. The effects of factors and interactions between factors upon S·S' and I·S' are all insignificant. But on the contrary regarding S·O, S·Os, I·O and I·Os, the effects of some factors and interactions are significant. It shows that the differences concerning O and Os from one condition to another are owing not to the other person's actual self image and probably not to the other person's actual personality, but to the direction of concept-formation and of inference about the other person influenced by the factors belonging to the subjects. Therefore we can state on the basis of the results as follows: (5) High self-esteem person conceives the other person to be more similar to himself than low self-esteem person. (6) High self-esteem person conceives the other person to be more similar to his ideal self image than low self-esteem person. (7) The subject conceives the other person whom he likes to be more similar to his ideal self image than the other person whom he doesn't like so much. (8) Girl conceives the other person to be more similar to her ideal self image than boy. (9) High self-esteem person infers the other person's self image to be more similar to himself than low self-esteem person. And girl shows this tendency more strongly

TABLE
Means (\bar{z}) and Standard Deviations (s) of z scores

Condition	N		SI†	SSo	SO	SOs	SS'	SO'	ISo	IO
SH-L	Boy	\bar{z}	.765	.882	.557	.601	.331	.571	.710	.729
		s	.214	.330	.232	.288	.286	.158	.241	.249
	Girl	\bar{z}	.732	.944	.608	.800	.270	.603	.591	.852
		s	.187	.339	.230	.285	.187	.176	.249	.245
SH-NL	Boy	\bar{z}	.649	.749	.329	.376	.201	.371	.490	.339
		s	.152	.342	.352	.479	.281	.361	.281	.382
	Girl	\bar{z}	.681	.956	.354	.601	.189	.487	.493	.345
		s	.170	.439	.416	.365	.592	.268	.333	.464
SL-L	Boy	\bar{z}	-.245	.587	-.043	.130	.010	.007	-.223	.212
		s	.161	.489	.212	.176	.111	.224	.138	.303
	Girl	\bar{z}	-.052	.693	.022	.107	.102	.192	-.042	.493
		s	.239	.346	.230	.230	.210	.219	.182	.200
SL-NL	Boy	\bar{z}	-.030	.797	.248	.305	.346	.168	.025	.029
		s	.235	.420	.283	.438	.417	.243	.259	.226
	Girl	\bar{z}	-.111	.587	-.130	-.173	-.053	.222	-.184	.468
		s	.118	.228	.349	.391	.241	.134	.202	.226
Overall	\bar{z}	.298	.774	.243	.343	.174	.328	.233	.429	
	(r)††	(.289)	(.649)	(.238)	(.330)	(.172)	(.335)	(.229)	(.404)	
		s	.454	.399	.393	.456	.350	.307	.430	.385

† S: Self Image, I: Ideal Self Image, So: Inference of Self seen by the Other, O: Image of the Other, Os: Inference of the Other's Self Image, S': the Other's real Self Image, O': the Other's real Image of Self (Self seen by the Other)
 †† Values of r equivalent to means of overall z scores.
 $\bar{z} \neq 0$, is significant at .001 level (***), .01 level (**), or .05 level (*).

TABLE
The effects of self-esteem, affect and sex:

Source	SI	SSo	SO	SOs	SS'	SO'	ISo	IO	IOs
1. Self-Esteem (SH · SL)	***	(*)	***	***		***	***	**	**
2. Affect (L · NL)								**	
3. Sex: Boy · Girl								*	
1 × 2									*
1 × 3				*					
2 × 3									
1 × 2 × 3									

***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$ (*): $p = .05$

than boy. (10) When the other person is liked by the subject, high self-esteem one infers the other person's self image to be more similar to his ideal self image than low self-esteem one. But in case the other person is not liked by the subject, such a tendency as this is not shown.

Regarding the connection between S' and O, S' and Os, no factor nor interaction shows significant effect except the effect of sex difference upon O-S'. We can state as follows: (14) The connection between subject's image of the other person and the other person's actual self

1

derived from Pearson's *r* among 7 concepts

IOs	IS'	IO'	SoO	SoOs	SoS'	SoO'	OOs	OS'	OO'	OsS'	OsO'	S'O'
.720	.366	.600	.552	.602	.329	.515	.848	.385	.569	.371	.475	.380
.318	.319	.230	.257	.239	.257	.190	.210	.313	.381	.313	.305	.190
.829	.269	.760	.459	.642	.257	.582	.891	.387	.628	.353	.615	.277
.292	.382	.255	.187	.217	.241	.161	.170	.266	.184	.235	.224	.295
.390	.258	.396	.247	.273	.109	.344	.782	.171	.060	.212	.039	.252
.542	.339	.257	.490	.494	.243	.324	.342	.345	.392	.277	.429	.367
.503	.126	.406	.264	.390	.120	.437	.689	.344	.317	.253	.400	.163
.342	.416	.249	.321	.427	.479	.410	.230	.308	.330	.371	.315	.341
.189	.116	.252	.161	-.087	.005	.127	.478	.149	.008	.056	-.025	.165
.290	.427	.333	.457	.251	.122	.167	.548	.262	.232	.226	.313	.329
.291	.463	.503	-.003	.130	.083	.315	.738	.548	.406	.489	.240	.457
.277	.195	.210	.255	.332	.187	.235	.187	.224	.205	.319	.237	.302
.302	.156	.122	.431	.337	.391	.473	.520	.226	.192	.324	.156	.338
.241	.161	.182	.241	.458	.300	.230	.274	.305	.259	.324	.249	.170
.505	.302	.139	-.248	-.213	-.148	.248	.680	.330	.028	.347	-.058	-.142
.356	.255	.187	.237	.330	.187	.164	.279	.221	.226	.182	.219	.366
.466	.257	.397	.253	.259	.143	.390	.703	.317	.276	.301	.230	.236
(.435)	(.252)	(.378)	(.229)	(.254)	(.142)	(.363)	(.606)	(.307)	(.269)	(.292)	(.226)	(.232)
.400	.345	.319	.406	.457	.317	.286	.331	.309	.366	.311	.373	.353

2

Analysis of variance for data of Table 1

IS'	IO'	SoO	SoOs	SoS'	SoO'	OOs	OS'	OO'	OsS'	OsO'	S'O'
	***	**	***		**	*		**		***	
	***							**		*	
		*					*				
					*						*
			*	*				*		*	*

image is not influenced by the self-esteem and affect. But girls show greater connection between them than boys. (12) The accuracy of inference concerning the other person's self image is not influenced by the self-esteem, affect and sex differences.

Regarding the difference between O and Os, only the effect of self-esteem is significant. And regarding the relation between O and O', the effects of self-esteem, affect and interaction among 3 factors are significant. We can state as follows: (13) Low self-esteem person differentiate

the inference of the other person's self image from the image of the other person more than high self-esteem one. (14) The mutual similarity between subject's image of the other person and the other person's image concerning the subject is shown more strongly in case of high self-esteem person than in case of low self-esteem one. (15) The mutual similarity between subject's image of the other person and the other person's image concerning the subject is shown more strongly in case of the other person whom one likes than in case of the other person whom one doesn't like so much.

Then we examine the concepts concerning self. The self image of subject has already been chosen experimentally in relation to ideal self image. So we discuss the relations except the one between S and I. On S·So, I·So and S·O', the effect of no other factor than self-esteem is significant. Regarding So·O' and I·O', there are significant effects of self-esteem and affect. By these results we can state as follows: (16) High self-esteem person infers the other person's image concerning the subject to be more similar to his self image than low self-esteem person. (17) High self-esteem person infers the other person's image concerning the subject to be more similar to his ideal self image than low self-esteem person. (18) High self-esteem person infers more accurately the other person's image concerning the subject than low self-esteem person. And there is a tendency that high self-esteem person infers the image of subject conceived by the other person whom he likes, more accurately than by the other person whom he doesn't like so much. But such a tendency is not shown by low self-esteem person. (19) The self image of high self-esteem person is more consistent with the other person's image concerning the subject than that of low self-esteem person. (20) The other person's image concerning the subject is more consistent with the subject's ideal self image in case of high

self-esteem subject than in case of low self-esteem subject. (21) The other person whom the subject likes with each other, conceives the subject to be more similar to the subject's ideal self image than the other person whom he doesn't like so much with each other.

Regarding the relation between So and O, the effects of self-esteem, sex differences and interaction between above 2 factors are significant. Regarding the relation between 2 inferences, So and Os, the effects of self-esteem and interaction among 3 factors are significant. Considering above results we can state as follows: (22) High self-esteem girl infers the other person's image concerning the subject to be more similar to her image of the other person than low self-esteem girl, but boy doesn't show such tendency. (23) High self-esteem person shows stronger similarity between the inference of the other person's image concerning the subject and the inference of the other person's self image than low self-esteem person.

Generally speaking, high self-esteem person's concepts are more consonant within each other and to the other person's concepts than low self-esteem person's. Low self-esteem person's 5 concepts are apt to be differentiated into 3 groups—concepts concerning self (S and So), concepts concerning the other person (O and Os), and ideal self image (I). The difference between the other person whom one likes or whom one doesn't like appears in the relation of ideal self image to the images concerning the other person. And girls' concepts are more congruent within each other than those of boys, which might show that girls are more stereotypical than boys.

Fig. 1 illustrates the interconnectedness among 7 concepts.

Assumed Similarity and Idealization

Fiedler and other researchers called an aspect of interpersonal perception as assumed similarity and argued its importance. It is the similarity between A's

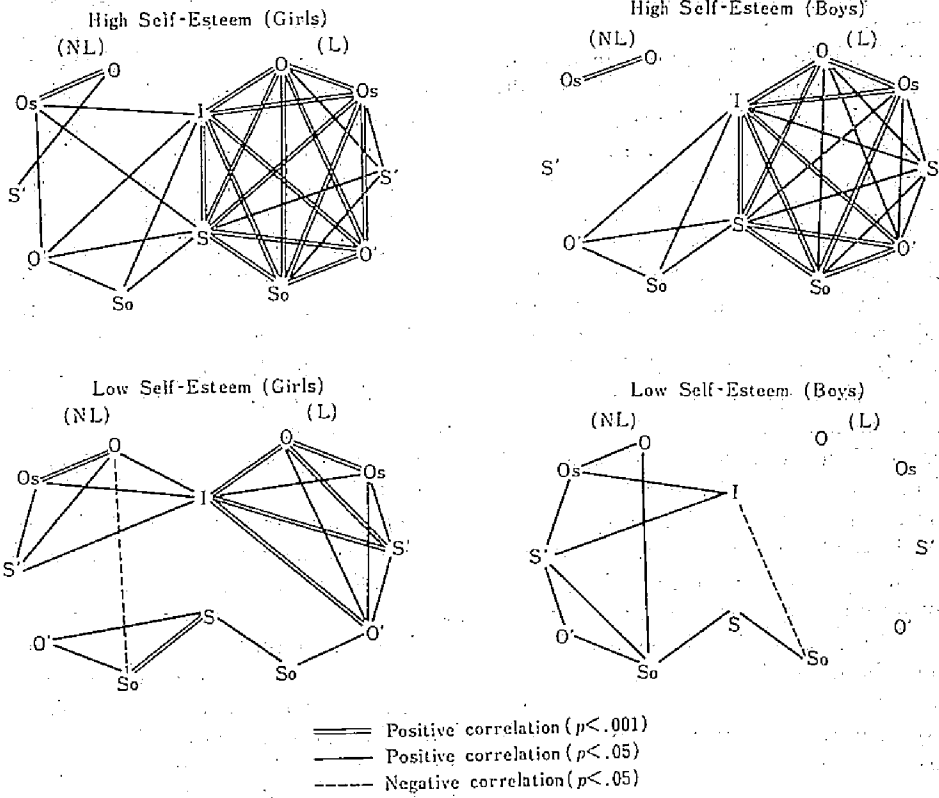


FIG. 1 The interconnectedness among 7 concepts.

perception of B and A's perception of himself. And previous studies (e.g. Fiedler, et al. 1952; Lundy, 1958) found the tendency that one perceives the other person whom he likes to be more similar to himself than the other person whom he doesn't like. Kajita (1967b) also found this tendency concerning assumed similarity, but they disappeared when the influences of the subject's ideal self image and of the other person's real self image were eliminated (the partial correlation between S and O with I and S' held constant). Therefore, it was concluded that the effects of affect upon assumed similarity is owing to the idealization tendency. In other words, one conceives the person whom he likes to be more similar to his ideal self image than the person whom he doesn't like, and most people

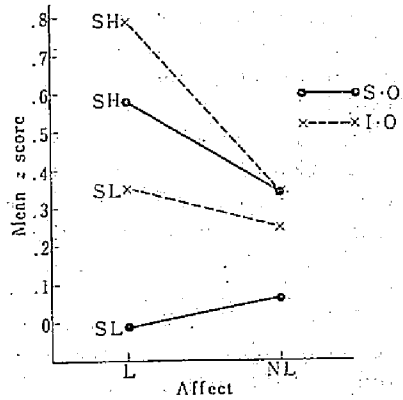


FIG. 2. Assumed similarity and idealization.

conceive themselves to be consonant to their ideal self images. Therefore, it results in that most people conceive the

one whom they like to be more similar to themselves.

If that conclusion is valid, the data of this research have to show that high self-esteem subject conceives the person whom he likes to be more similar to himself than the person whom he doesn't like, but low self-esteem subject doesn't show such tendency. Fig. 2 shows the data in a graphic form. The effect of interaction between Self-Esteem and affect upon S·O doesn't reach sufficient statistical significance ($F=3.272, .10 > p > .05$). But the directions show agreement to our assumption. Especially the results for low self-esteem subjects concerning S·O and I·O confirm our view. As low self-esteem person doesn't conceive himself to be similar to his ideal self image, it is natural that his self image and the image of the person whom he likes (idealized image) are more different from each other than in case of the person whom he doesn't like. Then we argue that the tendency concerning assumed similarity is a specific aspect of the idealization tendency.

Three Aspects of Inferences and Influences of Self-Esteem on them

Social interaction is based implicitly or explicitly upon the inference of the other person's cognition concerning the subject and that of the other person's self image. We would like to examine these two inferences from following three points of view. (1) Consonance: the relation between his concept and his inference of the other person's concept about the same object. It was measured in this study as O·Os and S·So. (2) Projection: the inference based on his own concept about the equivalent object. It was measured in this study as S·Os and O·So. (3) Accuracy: the relation between the inference and its object. It was measured in this study as Os·S' and So·O'.

Regarding the consonance, both inferences of the other person's concepts are highly consonant in general with his

own concept. But high self-esteem person's inferences are more consonant than low self-esteem person's. In other words, low self-esteem person tends to hold that his view of self or the other person is different from the other person's view. The cognition of such difference may be obstructive of communication and intimate relations.

Regarding the projection, high self-esteem person's inferences are projective but low self-esteem person's are not so projective. Girls show such tendency more strongly than boys in case of both inferences. These results may also mean that low self-esteem person tends to conceive other person to be different from himself.

Regarding the accuracy, the results about two inferences are different from each other. On the inference of the other person's cognition concerning the subject, self-esteem and interaction between self-esteem and affect influence its accuracy. That is, when the subject likes the other person, high self-esteem person infers accurately the other person's cognition of the subject, but low self-esteem person doesn't infer it so accurately. When the subject doesn't like the other person, the accuracy of high self-esteem person's inference is not different from that of low self-esteem person's. On the other hand, no factor influences the accuracy concerning the inference of the other person's self image. Regarding low self-esteem subjects, the accuracies of So and Os are almost the same. But regarding high self-esteem subjects, the accuracy of So is higher than Os. It may show that the inference of the other person's cognition concerning the subject is more important to the high self-esteem person than the other inference.

Now let's examine further about the influence of interaction between self-esteem and affect upon the accuracy of So. When the subject and the other person like with each other, he ought to infer the other person's cognition more accurately than

TABLE 3
Correlation matrix and factor loadings for S-1 (HS-L-Boy)

	Correlation matrix						Unrotated† factor loadings			Rotated factor loadings			h ²
	S	I	So	O	O _s	S'	I	II	III	I'	II'	III'	
S							.853	.363	.060	.833	.401	-.086	.863
I	.653						.838	-.004	-.124	.847	.000	.000	.718
So	.893	.746					.871	.397	.063	.850	.431	-.104	.920
O	.638	.640	.652				.794	-.127	.037	.781	.000	.196	.648
O _s	.531	.633	.501	.585			.706	-.212	-.315	.745	-.292	-.032	.643
S'	.104	.257	.054	.365	.369		.351	-.594	.085	.338	-.376	.477	.483
O'	.527	.623	.556	.613	.474	.458	.728	-.266	.221	.689	.001	.417	.650
							3.971	.774	.180	3.888	.573	.459	

† By principal-factor solution.

TABLE 4
Correlation matrix and factor loadings for S-2 (HS-NL-Boy)

	Correlation matrix						Unrotated factor loadings			Rotated factor loadings			h ²
	S	I	So	O	O _s	S'	I	II	III	I'	II'	III'	
S							.838	-.142	.274	.878	-.156	.055	.797
I	.666						.723	.019	.220	.756	.000	.000	.571
So	.706	.529					.834	-.197	-.228	.727	.009	.508	.786
O	.515	.425	.760				.700	-.395	-.355	.557	-.127	.668	.772
O _s	.602	.428	.411	.266			.644	.337	.193	.681	.288	-.139	.566
S'	-.020	.049	-.030	-.198	.259		.058	.739	-.211	.012	.759	-.129	.594
O'	.406	.374	.377	.227	.491	.514	.547	.522	-.114	.504	.576	.016	.585
							3.128	1.148	.396	2.899	1.031	.744	

when he doesn't like the other person, because of more opportunity to interact with the other person. But low self-esteem person doesn't show such tendency. Therefore, we should consider that some factor contradicts the influence of affect in case of low self-esteem person. It is probably concerning the relations between So and I, and between O' and I. That is, low self-esteem subject doesn't infer that the other person's cognition concerning the subject is consonant to his ideal self image in both cases of the other person whom he likes and the one whom he doesn't like. (cf. Table 1). But actually, the

other person whom he likes conceives him to be more consonant to his ideal self image than the other person whom he doesn't like. Therefore when the subject doesn't like the other person, he has more possibility to infer accurately. In any way, low self-esteem subject cannot infer so accurately the other person's cognition concerning the subject. As successful interaction depends more or less upon the accuracy of such inference, it is natural for low self-esteem person to become inadaptive in his social life.

To sum up, low self-esteem person tends to conceive other person to be different

TABLE 5
Correlation matrix and factor loadings for S-3 (LS-L-Boy)

	Correlation matrix						Unrotated factor loadings			Rotated factor loadings			h^2
	S	I	So	O	Os	S'	I	II	III	I'	II'	III'	
S							.907	-.217	-.158	-.437	.226	.808	.895
I	-.233						-.248	.129	-.353	.450	.000	.000	.203
So	.816	-.309					.861	-.169	.242	-.712	.247	.511	.828
O	.211	.152	.164				.311	.471	-.274	.179	.561	.216	.394
Os	.339	-.003	.149	.359			.375	.485	-.087	.001	.603	.140	.383
S'	.026	-.077	.111	.307	.307		.202	.500	.092	-.041	.537	-.097	.299
O'	.339	.064	.038	-.047	-.185	-.184	.128	-.428	-.414	.132	-.321	.501	.371
							1.920	.983	.471	.952	1.182	1.241	

TABLE 6
Correlation matrix and factor loadings for S-4 (LS-NL-Boy)

	Correlation matrix						Unrotated factor loadings			Rotated factor loadings			h^2
	S	I	So	O	Os	S'	I	II	III	I'	II'	III'	
S							.798	-.063	-.295	-.363	.765	.114	.728
I	-.220						-.176	-.382	.158	.450	.000	.000	.202
So	.711	-.027					.821	-.227	-.111	-.168	.802	.262	.738
O	.213	-.317	.269				.475	.462	.269	-.483	.047	.526	.511
Os	.447	-.045	.467	.490			.636	.189	.296	-.304	.303	.587	.528
S'	.046	-.184	.094	-.087	.093		.102	-.465	.319	.469	.206	.258	.328
O'	.182	.147	.351	-.079	-.046	.330	.223	-.555	.027	.394	.449	.049	.358
							2.032	.975	.387	1.063	1.566	.772	

from himself, and his inference about other person's cognition concerning himself tends to be incorrect. We can interpret also with these results, at least in part, the proposition that low self-esteem is connected with maladjustment, which has been pointed out by clinical psychologists.

Inner Structure of 7 Concepts: Factor Analysis for 4 Cases

Tables 3~6 show the correlation matrices and the results of factor analysis for S-1~S-4. An examination was made for the first 3 factors for each case. The tables of factor loadings by principal-factor solution show that the eigenvalue of the

first factor (I) is very large as compared with that of the rest factors in all 4 cases. We consider it as general factor of self-other conception, which shows the degree of congruency among concepts. But the sizes of eigenvalue and the pattern of factor loadings for the first factor are different between high self-esteem persons (S-1, S-2) and low self-esteem ones (S-3, S-4). Regarding high self-esteem subjects the concepts except the other person's self image are congruent with each other. But regarding low self-esteem subjects only S, So, O and Os (condition NL) or only S and So (condition L) are congruent; and they are all incongruent with ideal self

image.

By the results of rotation we can notice as well that the first factor (I') indicates similarity and consonance among the concepts except the other person's self image for S-1 and S-2, difference or dissonance between the subject's concepts concerning self and ideal self image for S-3, and difference or dissonance between the subject's self image and his ideal self image, between the subject's concepts concerning the other person and ideal self image for S-4. For S-1 the second factor (II') is the one regarding the difference between the subject's self image and the other person's self image, and the third factor (III') is the one regarding the characteristics of ratings by the other person. For S-2 the second factor is the one regarding the characteristics of ratings by the other person, and the third factor is the one indicating the connection between the image of the other person and the inference of the other person's image concerning the subject. For S-3 the second factor is the one regarding the other person's personality, and the third factor is the one regarding the subject's personality. For S-4 the second factor is the one regarding the subject's personality and the third is the one regarding the image of the other person. We can consider the factor III' for S-1 and the factor II' for S-2, the factor III' for S-3 and the factor II' for S-4, as almost the same one respectively.

Generally speaking, on the basis of these results of factor analysis, the concepts of high self-esteem person are consonant with each other. But the concepts of low self-esteem person are differentiated into 3 groups—concepts concerning self (S and So), concepts concerning the other person (O and Os), and his ideal self image.

General Considerations

In the results of this study examined above, we consider following three points as important: (1) The subject's self image and inference of the other person's cog-

nition concerning the subject, image of the other person and inference of the other person's self image, are extremely similar respectively, (2) High self-esteem person's cognitions and inferences concerning self and the other person are consonant with each other, but low self-esteem person's concepts are apt to be disrupted into 3 groups—concepts concerning self (S and So), concepts concerning the other person (O and Os), and ideal self image, (3) The main effect of affect (like or not) is the idealization of the other person.

The first half of (1) may indicate that one conceives himself under the influence of his inference concerning the other person's cognition of him, and that reversely the inference itself is based upon his self image. And the later half may indicate that the inference of the other person's self image is much affected by the subject's judgement of the other person. Regarding (2), the differentiation among the concepts of self, the other person, and ideal self which is shown in the concepts of low self-esteem person, is not a simple differentiation but a sort of dissonance. Low self-esteem person conceives actual self and the other person as not always consistent with his ideal self that he intends to be and that he may want also the other person to be. His subjective world is considered to be disrupted. It reminds us of the argument concerning the relationship between self-esteem and adjustment presented by many researchers. Regarding (3), we think that the importance of the direction of one's value system to our concept-formation and its relation to emotion is confirmed. And we are interested in the fact that though the inference of the other person's self image is closely connected with the image of the other person, they are influenced a little differently by the affect respectively.

SUMMARY

The present study was conducted to

investigate the interconnectedness among concepts concerning self and other person, and the effects of self-esteem and of affect upon such interconnectedness. The subject's concepts examined here were self image (S), ideal self image (I), image of the other person (O), inference of the other person's cognition concerning the subject (So), and inference of the other person's self image. The other person's concepts examined in relation to subject's concepts, were (the other person's) self image and the image of the subject.

Subjects were 28 boys and 28 girls (15-17 years old), including 7 students for each condition—self-esteem (2) × affect (2) × boy or girl (2). They rate above mentioned concepts on Semantic Differential type scales. As for each subject, 21 Pearson's r were calculated between 7 rates and each r was transformed into z score in order to compute the mean for each relation between rates. The effects of self-esteem, affect and sex difference upon each relation were examined by the analysis of variance.

For the correlation matrices of 4 boys representing 4 conditions respectively, factor analysis was performed in order to examine inner structure of 7 concepts.

The main results are as follows: (1) Subject's self image and inference of the other person's cognition concerning the subject, image of the other person and inference of the other person's self image, are extremely similar respectively. (2) The tendency concerning assumed similarity is owing to the idealization tendency. (3) High self-esteem person's inferences are projective but low self-esteem person's are not so projective. (4) The accuracy regarding the inference of the other person's cognition concerning the subject, are influenced by self-esteem and interpersonal feeling, but the accuracy regarding the inference of the other person's self image are not influenced by any factor. (5) High self-esteem person's cognitions and inferences concerning self and other

person are consonant with each other, but low self-esteem person's concepts are apt to be disrupted into 3 groups—concepts concerning self, concepts concerning the other person, and his ideal self image. (6) The main effect of affect is the idealization of the other person. (7) Girl's concepts are more congruent within each other than those of boy.

REFERENCES

- BERGER, E. M. 1952 The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **47**, 778-782.
- FIEDLER, F. E., WARRINGTON, W. G., & BLAISDELL, F. J. 1952. Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in a social group. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **47**, 790-796.
- KAJITA, E. 1966 The effect of self-esteem on interpersonal relations. *Jap. J. educ. soc. Psychol.*, **5**, 231-238. (In Japanese)
- KAJITA, E. 1967a Self-esteem and self-evaluation of own performance: a study of the effect of self-concept upon social interaction. *Jap. J. Psychol.*, **38**, 63-72. (In Japanese with English abstract)
- KAJITA, E. 1967b The conception of other person and interpersonal feeling. *Jap. J. Psychol.*, **38**, 284-289. (In Japanese with English abstract)
- LUNBY, R. M. 1958 Self-perceptions regarding masculinity-femininity and descriptions of same and opposite sex sociometric choices. *Sociometry*, **21**, 238-246.
- NAGASHIMA, S., FUJIWARA, K., HARANO, K., SATTO, K., & HORI, H. 1967 A study on the relationship of self-concepts to adjustment (2)—Development and construction of Self-Differential for adults, high school students, and middle school pupils. *Bull. Faculty of Educ. Tokyo Univ. of Educ.*, **13**, 59-83. (In Japanese)
- SCHERER, E. T. 1949 An analysis of the relationship between acceptance of and respect for others in ten counseling cases. *J. consult. Psychol.*, **13**, 169-175.
- THOMPSON, W. R., & NISHIMURA, R. 1952 Some determinants of friendship. *J. Pers.*, **20**, 305-314.

(Received June 22, 1968)

第5章 結論：対人認知および対人関係の規定因としての自己意識

以上の4研究によって明らかにされたこと
がら、自己意識がどのような点において、
対人認知および対人関係を規定しているか、
という観点から整理すると、次の五つの命題
の形にまとめることができるとであろう。

1. 「自己意識 特に自己評価のレベルは、
対人関係における経験を認知する場合の関
係枠として機能する。」

初対面の人と社会的交渉をした場合、人は
相手の人が自己に対してなした言動と、自己
評価のレベルを確認するような仕方で認知す
る傾向がある(第1章・第2章)。すなわち
同じ言動であっても、自己評価の高い人は、
相手の人が自己に対して肯定的好意的な態度
をとったように認知しやよいのに対し、自己

評価の低い人は、相手の人が否定的非好意的な態度をとったように認知しやうい。また、お互いによく知り合っている間からである場合において、相手からどのように見られているだろうかと考える時（これは、その他者とのこれまでの相互作用における諸経験を統合的に解釈したものに基づくと考えられる）、相手の持っているイメージと、自分の持っているイメージ（自己概念）に近いものとして考える傾向がある（第4章）。すなわち、相手からこのように見られているだろうと考えられているイメージは、相手が実際に持っているイメージよりずっと自己概念の方に近く、自己を理想的自己の方に近いものと思っている人（自己評価の高い人）は、相手からも理想的自己に近いものとして見られているだろうと考え、自己を理想的自己から遠いものと思っている人（自己評価の低い人）は、相手からも理想的自己から遠いものとして見られているだろうと考えている。しかし、実際には、

自己評価の低い人の場合でも、理想的自己からそれほど遠いものとして見られているわけではないのである。

このような事実は、自己に対して持っているイメージと調和あるように、対人関係における経験が体制化されていく、ということを示すものと考えられる。

2. 「自己意識 特に自己評価のレベルは、他者に対する態度を規定する。」

初対面の人と同じ内容の社会的交渉をしたにもかかわらず、自己評価の高い人は自己評価の低い人に較べて、相手に魅力を感じる度合が大きい(第1章・第2章)。また、お互いによく知り合っている間からである場合においても、相手に対していだいているイメージは、自己評価の高い人の方が、理想的自己像に近い好意的なものである(第4章)。このように、自己評価の高い人の方が他者に対

して好意的な態度やイメージをいだきやすい
ということば、結局先に述べたように、自
己評価が対人関係における経験を体制化する
場合の枠組となっっているからであると考えら
れる。他者の言動がどの程度自己に対して好
意的であったかの認知に応じて、その他者に
対する態度が決ってくるのであるから(第1
章・第2章)、自己評価の高い人は他者の言
動を好意的に受取りやすく、従って、他者に
対して魅力を感じやすく、好意的な態度をと
りやすいと考えられるのである。

3 「理想的自己像は、他者に対する好悪感
情との関連で、他者に関するイメージの内
容を規定する。」

好意を持っている他者については、理想的
自己像に近いイメージを持ちやすく、嫌いな
他者については、理想的自己像と逆方向のイ
メージを持ちやすいという、好悪感情と結び

ついでに理想化傾向が顕著である(第3章)。また、これまで多くの研究者から指摘されてきた assumed similarity に関する傾向(好意を持っていう他者については、自己概念に類似したイメージを持ちやすいという傾向)も、この理想化傾向によってもたらされたものであることが明らかになった(第3章・第4章)。理想的自己像の内容は個人によって差があるが、各個人の持っている理想的自己像が一つの大きな枠組となつて、他者に関する情報の選択、情報相互の関連づけが行なわれ、その他者に関する全体的イメージが形成されてゆくことを、これらの事実は示しているものと考えられる。

4 「自己評価のレベルは、自他に関する諸概念が調和的であるか非調和的であるかを規定する。」

自己評価の高い人の自他に関する諸概念(

自他の概念、理想的自己像、他者の持つてい
る自他の概念の推定、実際に他者の持つてい
る自他の概念)は、それぞれが非常に類似し
ているのに対し、自己評価の低い人の自他に
関する諸概念は、自己に関する概念、他者に
関する概念、理想的自己に関する概念の3
群に分かれる傾向がある(第4章)。しかし、
この限りでは、分化・未分化の問題であって
調和・非調和の問題とすることはできない。
非調和という言葉は、類似あるいは未分化が
望ましいにもかかわらず、現実には非類似あ
るいは分化の状態となっており、その結果不
快を感じているということと暗に意味あるか
らである。より詳細に前述の結果を検討する
と、自己評価の低い人の自他に関する諸概念
は、少なくとも次の3点において、単なる分
化でなく、非調和であると考えることができ
る。第1点は、自己概念および他者から見ら
れていると推測する自己の姿と、理想的自己
像とが分化している点である。多くの理論家

が指摘してきたように、人は現実の自己が理想的自己に近いものであることを望んでおり、また、他者の目からも理想的自己の像に近いものとして見られることを望んでいるのである。従って、現実の自己を理想的自己像から遠いものと考え、また他者からもそのような見られているだろうと考えることは、余り快いものではないだろう。このことから、自己評価の低い人の場合、自己概念と理想的自己像、他者から見られていると考えている自己の像と理想的自己像とが、単に分化しているのではなく、非調和であると言うことができる。第2点は、他者から見られている自己の姿に関する推測が、自己評価の高い人に較べて不正確であるという点である。言うまでもなく、効果的なコミュニケーションを行なう為には推測が正確である方が望ましく、不正確な場合には種々の不快なできごとが結果として伴うことを予想させる。このことから、他者から見られている自己の姿に関する推測

と、実際に他者から見られている自己の像とが余り一致してはいない、ということとは、単に分化しているのではなく、非調和であると言うことができる。第3点は、好意を持っている他者を理想化して見るのが一般的であるのに、自己評価の低い人の場合は、理想化の傾向が著るしくない、という点である。好悪感情には、それを合理化し裏打ちする理由づけが伴うのが通常であり、他者に関して自己の理想像を正の方向、負の方向に投影したイメージを持つ、ということが、その具体的現れの一つであると考えられるのであるが、自己評価の低い人は、好意を持っている他者について、そうはしてはいないのである。好意を持っていて、好意に対して、それほど理想的ではないという見方をしているということは、よほど冷静な目を持った人の場合を除けば、余り調和的なことではないと言える。

この他にも、不調和・不快を予想させる分化が、自己評価の低い人の場合には見られる

が、以上述べた3点からだけでも、自己評価のレベルによって、自他に関する諸概念が調和的になったり非調和的になったりする、と結論づけることができよう。

5. 「自己評価の低い人は、対人関係において不適応となる可能性が大きい。」

Rogers 以来多くの研究者によって主張されてきたこの命題に関して、この研究では、その内的プロセスの一部を明らかにすることができたと考ええる。

自己評価の低さが対人関係における不適応状態をもたらす一つのプロセスについては、これまで何度か触れてきた。ここで要約すると次のようになる。

①自己評価の低さ → ②他者が自己に対して行った言動を非受容的・非好意的と受取る傾向 → ③他者に対して非受容的・非好意的感情 → ④他者に対する非好意的言動 → ⑤他者

もそれに応じて非好意的方向に傾いた言動
→⑥他者の言動をより一層非好意的非受容的
と受取る→……⑭自他間の不適応

この連関図式のうち実証されているのは、
①から③までの部分と①と⑭との関連性で
あり、他の部分は要因間の関係を単純化して
考えた場合の推測的連関である。しかし、こ
のような連関の可能性が強いことは否定でき
ないであろう。この連関図式によって、自己
評価の低い人が特定の他者との間だけでなく
他者一般との間において不適応な関係を深め
ていくというプロセスが理解できる。

これに加えて、第4章で明らかになったよ
うに、自己評価の低い人の自他に関する諸概
念は調和的ではないのである。この調和的で
ないということとは、内的な葛藤を増大させる
ものと考えられるから、自己評価の低い人は
自分のことで精一杯という状態になり、対人
関係において退嬰的になる傾向があると予想
される。また、この非調和的状态の一部とし

て、先にも述べたように、自己評価の低い人は、他者から見られている自己の姿を正確に推測することが困難である。という傾向が見られたが、この点も、対人関係がスムーズに進行していかないことを予想させるものである。いずれにせよ、これまで見てきた諸事実から考えて、自己評価が低いということは、対人関係を維持、改善してゆく為には、決定的に不利であると言わざるを得ないであろう。